柱材については、柱穴Ｄ５４９を除いて遺存しているが、いずれも残存状態は不良（ほとんど土壌化）。柱材の径は８～12㎝で、残存長は15～46㎝である。

掘立柱建物Ｄ９は、土坑Ｄ５５０を囲むような状態で、柱穴Ｄ５４９・５５２・５６８・５８３・５８５・６５４・６５５・６５７で構成されていることから、土坑Ｄ５５０を覆う建物の可能性も考えられる。なお、土坑Ｄ５５０の平面プランは楕円形を呈し、径1.03×1.47mで、深さ0.68mを測る。井戸の可能性も考えられるが、断定はできない。

柱穴から土師器、須恵器片が出土しているが、いずれも細片で図化することが出来ない。このため所属時期については明確に判定できないが、６世紀と考えられる。

掘立柱建物Ｄ１０（第396図、図版95b・96a）

Ｄ－２調査区の西半部中央、A19e7区で検出した。掘立柱建物Ｄ９・１１に切られている。梁間３間（3.96m）×桁行３間（4.51m）で、主軸方位はＮ-0.5°－Ｗである。内部の柱筋にも側柱同様の柱掘方（ピットＤ６５２・６７３・６９３・８５９）をもつ総柱の掘立柱建物で、床面積は17.84㎡。検出面の標高はT.P.1.38m。平均柱間は梁間が1.32m、桁行で1.50mを測る。ピットＤ６２８・６３０・６３４・６３６・６３９・６５２・６５９・６６０・６６２・６６５・６６７・６６９・６７３・６９３・８５７・８５９で構成される。

束柱と考えられる柱穴Ｄ６５２・６７３・６９３・８５９を除いた柱掘方の平面は隅丸方形を呈し、一辺0.4～0.7m、平均約0.58m、深さは0.31～0.63mで、平均0.44m。なお、束柱は径0.29～0.62m、深さは0.12～0.4m、平均0.26m。

柱痕跡は確認されなかったが、すべての柱掘方ピットから礎板が検出された（図版96a）。北西隅の柱穴Ｄ６６２が掘立柱建物Ｄ９の柱穴Ｄ６５５、南西隅の柱穴Ｄ６６７が掘立柱建物Ｄ１１の柱掘方柱穴Ｄ６２７に切られる。さらに、柱穴Ｄ６５９・６６０・６６５・６６７は溝Ｄ５４６に切られている。

埋土中より土師器、須恵器片が出土しているが、いずれも細片のため図化することができない。遺構の所属時期は、良好に礎板が遺存していることから５世紀の可能性が高い。

掘立柱建物Ｄ１１（第397図、図版81b）

Ｄ－２調査区の西半部、A19e7・8区で検出した。掘立柱建物Ｄ１０を切っている。梁間２間（3.42m）×桁行２間（3.63m）の総柱建物で、主軸方位はＮ-10°－Ｅである。検出面の標高はT.P.1.38mを測る。床面積は12.41㎡。平均柱間は梁間が1.71m、桁行で1.81mを測る。柱穴Ｄ５５５・５５６・５６０・５７７・５７８・６２６・６２７・６９６・７３４で構成される。

柱掘方の平面は円形および隅丸方形を呈し、一辺0.34～0.7m、平均0.59m、深さは0.26～0.49mで、平均0.37m。柱痕跡は柱穴Ｄ５５５・５６０で確認され、径は0.21m。柱穴Ｄ５７８・６２７・７３４は溝Ｄ５４６によって上部を削平される。また、北東隅の柱穴Ｄ６２７は掘立柱建物Ｄ１

０の柱掘方ピットＤ６６７を切っている。

柱穴Ｄ５５５から６世紀の須恵器坏蓋の口縁部片、土師器甕片が出土している。

掘立柱建物Ｄ１５（第395図、図版88）

Ｄ－２調査区の西半部中央南寄り、A19e～f7区で検出した。梁間２間（3.14m）×桁行２間（3.97m）で、床面積は12.45㎡。主軸方位はＮ-2°－Ｅで、検出面の標高はT.P.1.41m。平均柱間は梁間が1.57m、桁行で1.99mを測る。柱穴Ｄ６０２・６１２・６１９・６２１・６２２・６９８・７０３で構成される。

柱掘方の平面は円形および隅丸方形を呈し、一辺0.25～0.5m、平均0.41m、深さは0.15～0.36mで、平均0.28m。柱痕跡は柱穴Ｄ６１２・６１９で確認されている。

埋土中より土師器、須恵器片が出土しているが、いずれも細片のため図化することができない。このため所属時期については明確に判定できないが、５～６世紀と考えられる。

掘立柱建物Ｄ１６（第398図、図版80）

Ｄ－１調査区の西端、A20d1区で検出した。竪穴住居Ｄ９、井戸Ｄ９５２を切っている。梁間２間（3.04m）×桁行３間以上（5.31m）で、主軸方位はＮ-90°－Ｅである。平均柱間は梁間が1.52m、桁行が1.77mで、検出面の標高はT.P.1.47mを測る。柱穴Ｄ９１７・９４０・９４６・９４９・９５０・９５５・１２６９・１２７７で構成される。

柱掘方の径は0.25～0.76m、平均0.46m、深さは0.14～0.37mで、平均0.26m。柱痕跡は柱穴D940・955で確認している。

柱穴Ｄ９４０から６世紀前半頃の須恵器脚部片、土師器の小片が出土している。

掘立柱建物Ｄ１７（第399図、図版82a）

Ｄ－１調査区の南端中央、A19e～f10区で検出した。竪穴住居Ｄ４を切っている。梁間２間（3.26m）×桁行２間以上（3.46m以上）で、南側は調査区外に伸びる。平均柱間は梁間が1.63m、桁行で1.73mである。主軸はＮ-35°－Ｅで、検出面の標高はT.P.1.35mを測る。柱穴Ｄ１０８２・１３６８・１６０３・１６０４・１９４１で構成される。

柱掘方の径は0.4～0.7m、平均0.55m、深さは0.24～0.68mで、平均0.44m。柱痕跡は柱穴Ｄ１０８２・１６０４で確認され、径は0.15m。

掘立柱建物Ｄ１７出土遺物（第419図15・16）

柱穴Ｄ１０８２から須恵器高坏の脚部（16）、土師器甕の口縁部片（15）が出土している。なお、須恵器高坏は５世紀中頃以降の時期のものと考えられるが、竪穴住居Ｄ４を切っていることから、遺構の時期は５世紀後半以降である。

掘立柱建物Ｄ１８（第400図、図版80・96e・96d）

Ｄ－１調査区の西端中央、A20d1区で検出した。柱穴Ｄ９５７・９５８・９６０・９６３・９６５・９６６・９６７・１２７１で構成される。中央に位置する柱穴Ｄ９６７は他の柱穴に比べて規模が大きく、径1.14×0.74m、深さ0.52mで、底面で礎板を確認した。

なお、掘立柱建物Ｄ１８は、掘立柱建物Ｄ１６の約1m南側に位置し、それに附属する建物の可能性も考えられる。

柱穴Ｄ９６７を除いた柱掘方の径は0.28～0.44m、平均0.4m、深さは0.32～0.63mで、平均0.46m。柱穴Ｄ９６７の礎板は残存状態不良で、長さ36cm以上、幅9.5cm、厚さ0.1cmを測る（図版96d)。また、柱穴Ｄ９６６の最下層に薄いカーボン層を確認している。

掘立柱建物Ｄ１８出土遺物（第419図17）

柱穴Ｄ９６５の抜き取り穴より土師器甕（17）が出土した（図版96e)。(17）は口径9.6cm、器高12.3cmを測る。その他の柱穴から出土した土器片は、いずれも遺構の時期を特定できるものや図化できるものはなかった。

掘立柱建物Ｄ１９（第401図）

Ｄ－１調査区の北西隅、A20c1区で検出した。梁間桁行２間以上(2.6m以上)×桁行３間(5.52m)で、北側は調査区外に伸びる。平均柱間は梁間が1.28m、桁行で1.84mである。主軸はＥ-10°-Ｎで、検出面の標高はT.P.1.47mを測る。柱穴Ｄ９０５・９１３・１３８９・１４５６・１４５７・１４５８・１６７５で構成される。

柱掘方の径は0.23～0.45m、平均約0.4m、深さは0.22～0.5mで、平均0.33m。柱穴Ｄ９１３から５世紀の須恵器瑳の小片（口縁部片）が出土している。

井戸

北西居住域では３基を確認している。Ｄ－１調査区で２基（井戸Ｄ９５２、井戸Ｄ１２８１)、Ｄ－２調査区で１基（井戸Ｄ６４３)、井戸枠はなく、すべて素掘り井戸である。

井戸Ｄ６４３（第402図、図版97e～97g）

Ｄ－２調査区の西半部中央やや北西寄り、A19d～e7区で検出した。平面形はほぼ円形を呈し、径1.5×1.3m、深さは2.6mを測る。底から2.2m（T.P.0.7m）上方で大型の製塩土器（第420図1)、韓式系軟質土器甕（第420図2)、底から0.35m上方で土師器甕（第420図3)、坑底に接して籠（図版263b）が出土している。

井戸Ｄ６４３出土遺物土器（第420図１～３、図版193）

(1）は製塩土器で、口径15cmを測る。粘土紐の痕跡は明瞭で、外面のハケメ調整は粗い。また、口縁部上縁の内外にはハケメ後に指おさえで調整を施している。口縁部内面に白色物資が付着し

ている。韓式系軟質土器甕（2）は口径 21.6㎝を測る。体部の途中を欠いているが、底部はとがり気味の丸底で、器壁は厚い。体部外面は格子タタキメ、内面はナデ調整を施している。

甕（3）は布留式で、口径 13.9㎝、器高 21㎝を測る。体部外面は縦方向のハケメ後、肩部に断続的な横方向（弧状気味）のハケメ、下半は丁寧なナデ調整、内面は指ナデ調整を施している。底部は平底気味で、外面には煤、体部内面（頸部以下）には黒色物質が付着している。遺構の時期は、出土土器から初期須恵器の段階で、Ｉ型式１段階以前、５世紀の前後と考えられる。

井戸Ｄ９５２（第 403 図、図版 99a）

Ｄ－１調査区の西半部中央やや南寄り、A20d1 区で検出した。平面形はいびつな楕円形を呈し、径 0.8 × 0.6m、深さは 2.06m を測る。掘立柱建物Ｄ１６の柱穴Ｄ９５０に切られている。最下層（標高 T.P.-0.09m）から土師器甕が出土している。他の遺物は土師器の小片のみである。

井戸Ｄ９５２出土遺物（第 419 図 21、図版 194）

土師器甕（21）は口径 13.6㎝、器高 17.1㎝を測る。口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部は外傾する面をもち、その中央はやや窪んでいる。口縁部外面は横方向のハケメ、内面はヨコナデ、体部外面上半は縦方向のハケメ、下半は斜め・横方向のハケメ後ナデ、内面上半は板状工具によるナデ、下半はナデ調整を施している。外面には煤、体部内面（頸部以下）には黒色物質が付着している。

井戸Ｄ１２８１（第 350 図、第 404 図、図版 98）

Ｄ－１調査区の西半部やや南寄り、A20e1 区で検出した。平面形はほぼ円形を呈し、径 2.35 × 2.37m、深さ 2.15m を測る。井戸底の標高は TP-0.65m。埋土は、土層の堆積状況から上層・中層・下層・最下層の４つに大別される。上層は、井戸の機能消失後の窪地に堆積した土層で、中層～下層は井戸本来の機能消失後に堆積した土層である。上層から６世紀後半の須恵器坏身、中層から５世紀後半の須恵器甕、下層からは一括して廃棄したような状態で須恵器、土師器、加工木などが出土した（図版 98a ～ 98c）。最下層では土師器甕（第 420 図 22）が横位の状態で出土している（図版 98d ～ 98e）。

井戸Ｄ１２８１出土遺物（第 420 図４～ 22、図版 193）

上層から II 型式２～３段階の須恵器坏身（4･5）、土師器小型鉢（10）、中層から須恵器甕（15）、下層からＩ型式５段階の須恵器坏身（18・19）、鉢（20）、土師器甕（16）、小型鉢（11 ～ 14）、製塩土器（17）、最下層から土師器甕（22）が出土している。なお、須恵器高坏（21）、壺（7）、土師器甕（6）、小型鉢（8・9）は出土層位不明のものである。

土師器ミニチュア鉢（8 ～ 14）は内外面ともに粘土紐の痕跡が認められる。（9）の成形は粘土紐巻き上げ技法による。製塩土器（17）は浅い椀状で、外面は粘土紐の痕跡が認められるが、内面は丁寧なナデ調整を施している。（11 ～ 14・18）は下層から一括で出土した土器群である。

最下層から出土した土師器甕（22）には頸部から体部にかけて、縄（組紐）を巻きつけた痕跡（色調の変化）が認められ、釣瓶として使用していたものと思われる。

その他に、滑石製臼玉16個が出土している。遺構の時期は、出土土器から５世紀後半頃と考えられる。

土坑

土坑Ｄ４７２（第350図）

Ｄ－２調査区の西半部南端、A19f7区で検出した。南側は調査範囲外に広がっている。平面プランは不定形を呈し、径2.1×2.3m以上、深さ約0.28mを測る。西側の一部は溝Ｄ６００に切られている。埋土は炭層を介して上層・下層に分けられる。6世紀後半の須恵器坏蓋・坏・甕、土師器甕・甑・小型鉢（製塩土器？）等の資料が出土している。

土坑Ｄ４７２出土遺物（第421図１～19、図版173）

（3～12・14～18）は上層、（19）は炭層、（1・2・13）は出土層位不明ものである。（1）はII型式３段階の須恵器坏蓋、（2～4）は須恵器坏身で、（2）はII型式３段階、（3・4）はII型式４段階と考えられる。（5～9）は土師器小型鉢で、製塩土器の可能性が考えられる。いずれも粘土紐の接合痕が観察されるが、（5）のみ内面は丁寧なナデ調整を施している。（6・9）は外面に二次的に火を受けたためか、赤変している。なお、（5）は重さ89.2g、（6）は85gを測る。

（10）は須恵器壺で、口頸部外面に「×」のヘラ記号を刻んでいる。（11～18）は土師器甕で、そのうち（13～16）は口径9.4～11㎝の小型甕である。（19）は甑で、外面はハケメで、下端にナデを加え、内面はナデ調整を施している。蒸気孔の形状は不明。

土坑Ｄ４８０（第406図、図版99b）

Ｄ－２調査区の南西隅、A19e8区で検出した。西側は調査範囲外に広がる。径は南北1.2m、東西1.5m以上で、深さは約0.1mを測る。埋土はN3/暗灰色（紫かかる）シルトに10BG6.5/1明青灰色シルト（炭化物混じり）が径１～2㎝の斑状に混入する。

土坑Ｄ４８０出土遺物（第421図22～26）

埋土中よりＩ型式２段階の須恵器甕（22）、土師器高坏（24）・甑（23）、韓式系土器平底鉢（25・26）等が出土している。（22）は口頸部外面に一帯の櫛描波状文を飾っているが全周しない。

甑（23）の口縁端部は内傾して面をもち、内側にわずかに突出する。内面は横方向のハケメ、外面は縦方向のハケメ調整を施している。（25）の外面調整は格子タタキメで、下端にヘラケズリを施している。（26）の内面調整は斜め方向のナデで仕上げている。

遺構の時期は出土遺物から５世紀中頃と考えられる。

土坑Ｄ５９９（第409図）

Ｄ－２調査区の北西隅、A19d8区で検出した。東側で掘立柱建物Ｄ９の柱穴Ｄ５６８に切ら

れている。埋土はN4/灰色シルトに10BG6.5/1明青灰色シルトが径２～3cmの斑状に混入。

土坑Ｄ５９９出土遺物（第419図22～29）

埋土中より、須恵器坏蓋（23）・坏身（25・26）・高坏（22）・高坏蓋（24）・壺（27）、土師器甕（28・29）が出土している。高坏（22）は脚部片で三方に透孔をあけている。(23）はＩ型式３段階、(26）はＩ型式4or5段階で、底部外面に赤色顔料が付着している。須恵器高坏の蓋（24）はつまみが破損し、内面中央に同心円文の当て具痕が残る。なお、須恵器坏身（25）は口径10cm、器高5.2cmを測り、ヘラケズリ調整の範囲は狭いものの５世紀後半以前と推定している。

土坑Ｄ６０７（第407図）

Ｄ－２調査区の西半部やや南寄り、A19f7区で検出した。平面プランは円形を呈し、径1.8×1.6m、深さ0.96mを測る。

土坑Ｄ６０７出土遺物（第419図30・31、第631図19、図版246b）

埋土中より、直線文タタキメを施した韓式系土器（硬質）甕？体部片（30)、韓式系軟質土器甑（31)、有孔円板（第631図19、図版246b）が出土している。(30）の「直線文タタキメ」は通常の平行タタキメに、ほぼ直角に一本の直線をタタキ板に彫りこんだもので、韓国では「単線横走垂直集線文」と呼称されている。この種のタタキメをもつ土器は、「鳥足文タタキメ」とともに朝鮮半島の南西部、すなわち百済中心地域や栄山江流域との係わりをもつ韓式系土器であることが明らかにされている。内面は丁寧な指ナデ調整を施している[註6]。

なお、直線文タタキメは大阪府南部にある陶邑窯跡群（TK73、TK85号窯跡）[註7]から見つかっていることから、「U字形板状土製品」とともに、日本列島に須恵器製作を伝えた人々の故地（窯の操業者の出自）を示す資料として注目されている。(31）は底部片で、外面の調整は斜格子タタキメを施している。火を受け、表面は赤色化している。

土坑Ｄ６４０（第408図、図版81b）

Ｄ－２調査区の西半部北寄り、A19d7区で検出した。平面プランは隅丸長方形を呈し、2.9×2.05m、深さ0.2mを測る。

土坑Ｄ６４０出土遺物（第422図１～８、図版194）

埋土中より、韓式系軟質土器（1・7)、土師器直口壺（2)・高坏（3・4)・甑（5)・甕（6・8)、が出土している。(1）は口径8.8cm、器高7.0cmを測る平底鉢で、体部外面の下端にヘラケズリ、内面上半部はハケメ後、ナデ、下半部はナデ調整を施している。(7）は口径28cmを測る甑で、外面は格子タタキメ、内面はナデ調整である。高坏（3）の坏部内面には放射状に暗紋を施している。土師器直口壺（2）の体部中央にタタキメの痕跡が認められる。(8）は口径15.8cmを測る布留式系の甕形土器である。外面の調整はハケメ後、部分的にナデ、内面はヘラケズリ調整を施す。

土坑Ｄ６４８（第350図、図版95b）

Ｄ－２調査区の西半部中央、A19e7区で検出した。径1.54×2.10m、深さ8cmを測る。掘立柱建物Ｄ１０の東柱柱穴Ｄ６７３・８５９を切っている。埋土はN4/0灰色シルトに10BG6.5/1明青灰色シルトが径２～3cmの斑状に混入。上層に炭・焼土を多く含む。

土坑Ｄ６４８出土遺物（第421図20・21）

埋土中より、II型式４段階の須恵器坏身（20）、土師器甕（21）が出土している。

土坑Ｄ６５８（第411図H、図版95b）

Ｄ－２調査区の西半部中央やや南寄り、A19e7区で検出した。平面プランは楕円形を呈し、径0.9×1.15m、深さ0.62mを測る。埋土中より土器片が出土しているが、時期を特定できるものや図化できるものはなかった。

土坑Ｄ６７９（第350図、図版101c）

Ｄ－２調査区の南端中央やや西寄り、A19e～f6区で検出した。溝Ｄ５４３と重複しているが、切り合い関係は不明である。長軸9m以上、短軸約6m、深さ約0.5mを測る。中央に長軸に沿って材木が認められた。

土坑Ｄ６７９出土遺物（第422図9～17、図版194）

埋土中より、II型式３段階の須恵器坏蓋（9・10）、坏身（11～13）、甕（17）、土師器小型壺（14・15）、須恵器系土器高坏（16）、ウシの左中心足根骨＋第４足根骨（図版269b-4）が出土している。小型壺（14・15）は胎土が精良で、内外面ともに赤色顔料が付着していた。北東居住域の井戸Ｄ４７４（第232図13）、ピットＣ３８９９（第215図5）からも同タイプのものが出土している。いずれも時期は６世紀後半と考えられる。なお、高坏（16）については、焼成が土師質で、形態や製作技法が須恵器と共通することから「土師質焼成須恵器」[註8]とも呼称されているものに対応するものと思われる。

土坑Ｄ６９０（第350図、図版81b）

Ｄ－２調査区の西半部やや北東寄り、A19d6～７区で検出した。平面プランは不定形を呈し、南北5.8m、東西3.4m、深さは14cmを測る。埋土中より土師器小型甕（第422図18）が出土している。

土坑Ｄ７０１（第350図、第405図、図版81b）

Ｄ－２調査区の南西隅、A19f8区で検出した。平面プランは瓢形を呈し、東西2.46m、南北約1.0m、深さは0.17mを測る。屋外のカマドの可能性が考えられる。

土坑Ｄ７０１出土遺物（第422図20・21）

埋土中より、Ｉ型式２～３段階の須恵器壺（21）、土師器甕（20）が出土している。遺構の時期は出土土器から５世紀中頃と考えられる。

土坑Ｄ７４０（第385図）

Ｄ－２調査区の北西隅、A19d8区で検出した。平面形は楕円形を呈し、径は東西2.8m以上、南北0.8m、深さは0.24mを測る。竪穴住居Ｄ２７に切られている。埋土内より、Ｉ型式５段階の須恵器坏身（第422図19）が出土している。

土坑Ｄ９２６（第411図F、図版99c、図版99d）

Ｄ－１調査区の北西部、A20c1区で検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、径1.16×0.97m、深さ0.41mを測る。坑底で２つの（４つの可能性もある）ピットを確認している。北側のピットＤ１４９１は一辺0.2m、深さ4cm、南側のピットＤ１４９２は一辺0.3m、深さ0.16mを測る。埋土中より土師器甕（第422図24）が出土している。

土坑Ｄ１２５８（第350図、図版80a）

Ｄ－１調査区の西端部、A20e1区で検出した。平面形は不定形を呈し、径2.5 m×1.1 m、深さは0.41mを測る。溝Ｄ９００・９８６を切っている。

土坑Ｄ１２５８出土遺物（第422図22・23）

埋土中より、II型式３段階の須恵器坏身（22）、土師器把手付鉢（23）が出土している。

土坑Ｄ１３６３（第411図E）

Ｄ－１調査区の西半部中央、A20e1区で検出した。平面は楕円形を呈し、径1.3×0.75m、深さ0.32mを測る。埋土中よりＩ型式５段階の須恵器坏身（第428図1）が出土した。口径10.9cm、器高4.7cmを測り、底部外面に「×」のヘラ記号を刻んでいる。

土坑Ｄ１３９４（第350図）

Ｄ－２調査区の北西隅、A20c1区で検出した。南側は、排水のための溝掘削により破壊され、東西1.75 m、深さ38cmを測る。埋土内より土師器甑（第428図3）が出土している。

土坑Ｄ１５６２（第411図G、図版91a）

Ｄ－２調査区の北東部、A19c9区で検出した。ピットＤ１１１５・１９３２に切られている。平面形は不定形を呈し、径0.87×1.1m以上、深さは0.39mを測る。埋土内よりII型式２段階の須恵器坏身（第428図2）が出土している。

土坑Ｄ１６０１（第350図）

Ｄ－１調査区の南半部やや西寄り、A19f10区、A20f1区に跨って検出した。溝Ｄ９０２に切られ、大半は調査区外で、規模等は不明である。

土坑Ｄ１６０１出土遺物（第428図５～９、図版194）

埋土内より、Ⅰ型式５段階の須恵器坏蓋（５～７）・坏身（8）、韓式系軟質土器平底鉢（9）が出土している。(9) は口径10.4cm、器高8.0cm、底径5.6cmを測り、底部外面にロクロのゲタ痕が見られる。外面は格子タタキメ（一部、平行タタキメ）調整後、下半部にヘラケズリを施し、内面は丁寧な回転ヨコナデ調整を施している。底部外面の周辺は赤変し、体部外面全体に煤がかぶっている。

土坑Ｄ１６１７（第350図、第410図、図版99e、図版99f）

Ｄ－１調査区の東端ほぼ中央、A19d～e8～９区で検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、径5.6×2.7m、深さ0.46mを測る。竪穴住居Ｄ２０・２３に切られ、竪穴住居Ｄ１８を切っている。

土坑Ｄ１６１７出土遺物（第423図１～31、第424図１～９）

須恵器（第423図１～10）、土師器（第423図12～19、第424図１～8）、製塩土器（第423図20～31）、韓式系軟質土器（第423図11）、移動式カマド（第424図9）、石製品などがある。

炭層の上位から須恵器坏蓋（423-1）、坏身（423-5・7・9）、土師器ミニチュア鉢（423-12・13）、小型甕（423-14～15）、甕（423-17～19、424-5）、甑（424-7）、移動式カマド（424-9）、製塩土器（423-20～23・25・26）、角閃石黒雲母トーナル岩製の台石、黒雲母角閃石花崗閃緑岩製の敲石が出土している。

炭層中から須恵器坏蓋（423-2～4）、坏身（423-6・8）、高坏形器台（423-10）、土師器甕（423-16、424-1～4）、甑（424-6）、製塩土器（423-24・29・30）が出土している。

なお、製塩土器（423-27）、土師器甑（424-8）は炭層上位と炭層中のものが接合した資料である。韓式系軟質土器平底鉢（423-11）、製塩土器（423-28・31）は層位不明のものである。

須恵器坏蓋（423-1）、坏身（423-6・7）はⅠ型式５段階、須恵器坏蓋（423-2・4）はⅠ型式５段階からⅡ型式１段階への過渡期、須恵器坏蓋（423-3）、坏身（423-5・8・9）はⅡ型式１段階、高坏形器台（423-10）はⅠ型式４・５段階に相当する。いずれにしてもⅠ型式５段階からⅡ型式１段階への過渡期の資料と考えられる。坏蓋(423-4)の天井部にはヘラ記号を刻んでいる。土師器甕（423-18）は（423-17）に比べて砂粒がやや粗いが、内面の調整は丁寧で、粘土の接合痕は認められない。甑（424-8）は口径21.3cm、器高24.7cmを測る。体部中位のやや上方に左右一対の扁平な匙状の把手を上向きに取り付けている。蒸気孔は中央に１個と周囲に３個の三日月形の孔を穿っている。体部外面は縦方向のハケメ、内面は横・斜め方向のナデ調整を施しているが、粘土紐の接合痕はよく残る。甕（423-14）は外面ナデ調整で、二次的に加熱している。移動式カマド（424-9）は端部に面をもたないタイプで、下向きの牛角状把手上面に布目痕が残る。

また、強度を強めるためであろうか、口縁部端部内側と体部の内側には粘土紐を棒状に貼り付けて、補強している。韓式系軟質土器平底鉢（423-11）は口縁部の周辺のみ遺存し、体部外面の調整は格子タタキメ、内面はナデ調整である。遺構の時期は出土土器から、５世紀末から６世紀前半と考えられる。

土坑Ｄ１９３６（第350図）

Ｄ－１調査区の北半部中央、A19c9～10区で検出した。ピットＤ１９３８・１９３９に切られている。平面形は不定形を呈し、東西1.0m以上、南北径0.48m、深さ0.29mを測る。埋土中よりII型式１段階の須恵器坏身（第428図4）が出土している。遺構の時期は出土土器から、６世紀前半と考えられる。

溝

溝Ｄ５４０（第44図）

Ｄ－２調査区の南端中央、A19e・f5区で検出した。南側は調査範囲外に伸びている。幅1.6m、深さ0.28mを測り、長さは3.5mを確認している。埋土は10BG6/1青灰色シルト（焼土・炭化物混じり）である。出土遺物は小片で、図化できるものはないが、５世紀と考えられる須恵器器台の小片、鉱滓が出土している。

溝Ｄ５４３（第44図）

Ｄ－２調査区の中央、A19d～e5～6区で検出した。南側で、土坑Ｄ６７９と重複しているが、前後関係は不明である。埋土中からII型式１段階と考えられる須恵器坏蓋（第428図13）が出土している。

溝Ｄ６００（第350図、図版81b）

Ｄ－２調査区の西半部南端、A19e・f7区で検出した。土坑Ｄ４７２・６０７を切っている。幅約2.0m、深さ4cmを測る。埋土はN4/灰色シルトに10BG6.5/1明青灰色シルトが斑状に混入している。

溝Ｄ６００出土遺物（第428図16）

埋土中より、須恵器坏身（16）、須恵器甕等が出土している。（16）は口径12.8cm、器高4.5cmを測り、内面に同心円文の当て具痕が残る。II型式３段階に相当し、６世紀後半と考えられる。須恵器甕は５世紀のもので、土坑Ｄ４８０の須恵器甕（第421図22）に接合した。

溝Ｄ６４１（第350図、図版81b）

Ｄ－２調査区の西半部やや北寄り、A19d7区で検出した。幅約0.7mを測り、掘立柱建物Ｄ９

の柱掘方ピットＤ６５７に切られる。

溝Ｄ６４１出土遺物（第428図14・17・18）

埋土中よりII型式２段階の須恵器坏蓋（17）・坏身（18）、土師器甕（14）等が出土している。

溝Ｄ９０２・溝Ｄ５４６（第350図、第356図、図版80・81b）

Ｄ－１調査区～Ｄ－２調査区の南寄り、A19f10区、A19e7～10区で検出した。竪穴住居Ｄ４・８、掘立柱建物Ｄ６を切っている。幅約0.7～0.84m、深さ0.24mを測り、埋土は粗砂混じりのN4/灰色シルト（第360図）。

溝Ｄ９０２・溝Ｄ５４６出土遺物（第428図20～23、図版257-5、分析編228頁）

埋土中より須恵器坏蓋（22）、土師器鉢（21・23）・甕（20）、ガラス玉（分析編第３章図版1-D3）、鉱滓（図版257-5）が出土している。遺構の時期は遺構の切り合い関係から、６世紀後半～末頃と考えられる。

溝Ｄ９８６（第350図、第414図、図版80a・100）

Ｄ－１調査区の西端、A20e～f1区で検出した。幅約0.9m、深さ約0.38mを測る。土坑Ｄ１２５８に切られ、溝Ｄ９８７を切っている。溝中より、一定のまとまりで廃棄されたような状態で土器群が検出されている。

溝Ｄ９８６出土遺物（第425図～第427図）

溝中よりまとまった状態で須恵器、土師器、砥石（黒雲母ホルンフェルス）そして大型哺乳類の骨片が出土している。

須恵器（第425図、第426図）

425-1～5・7は坏蓋で、425-2～5・7はII型式２段階、425-1はII型式３段階のものである。425-6・8～10は坏身で、425-6・8・10はII型式２段階、425-9はII型式３段階のものである。

425-11は瓹で、口径11.8cm、器高14.2cm、頸部高7.1cm、体部高7.1cm、体部最大径は9.3cmを測る。型式的にはII型式１段階から２段階への過渡期のタイプ。425-12・13、426-1・2は甕で、426-2の底部は内側に窪んでいる。

なお、425-3・7・10の内面に同心円文の当て具痕が残る。坏蓋425-5は天井部外面に「-」のヘラ記号を刻み、口縁部外縁には刻み目を施している。425-3と425-4の坏蓋は重なって出土している。また、須恵器坏身（425-6）は他の土器よりも下位より出土した。

土師器（第427図１～13）

鉢（1）、椀形高坏（2）、ミニチュア鉢（3・4）、土師器小型甕（5～7）、土師器甕（8・9・11・12）、鍋（10）、甑（13）等が出土している。椀（1）は口径11.2cm、器高4.6cmを測り、外面はハケメ調整を施している。土師器甕（8）の外面の調整はハケメで、下半部には粗いハケメ

を施している。土師器甕（9）は体部外面の調整は縦方向のハケメ後、下半にヘラケズリを施している。鍋（10）は中位に一対のやや扁平な匙状の把手を付している。甑（13）は口径27.2㎝、器高33.7㎝を測る。体部中位に左右一対の牛角状把手を上向きに取り付けている。蒸気孔は中央に１個と周囲に３個の楕円形の孔を穿つタイプ。体部外面には縦～斜め方向のハケメ、内面は指ナデ調整を施している。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施す。

溝Ｄ１０３６（第350図、図版82a・101a）

Ｄ－１調査区の中央、A19d・e10区で検出した南北方向の溝である。幅約0.3m、深さ9㎝を測り、延長約5mを確認している。

溝Ｄ１０３６出土遺物（第429図１～６）

Ｉ型式５段階の須恵器坏身（１～３）、土師器鉢（4）、甕（5）、把手付鍋（6）等が出土している。須恵器坏身（3）の内外面には赤色顔料が一部付着している。鉢（4）は口径10.1㎝、器高5.25㎝を測り、底部はやや上げ底気味の平底である。

溝Ｄ１０８７（第350図、図版82a）

Ｄ－１調査区の南端中央、A19f10区で検出した。溝Ｄ９０２と重複し、同一の溝の可能性も考えられる。竪穴住居Ｄ４を切っている。埋土内より土師器甕（第428図26）が出土している。

溝Ｄ１０９７（第350図、図版88a・101b）

Ｄ－１調査区の東半部やや北寄り、A19d9～10区で検出した。幅約1.2m、深さ0.34mで、長さ8.0mを確認している。竪穴住居跡Ｄ１５・２５を切っている。

溝Ｄ１０９７出土遺物（第428図24・25）

II型式４段階の須恵器坏身（25）、土師器把手付鉢（24）、馬の臼歯７点が出土している。馬の臼歯は右上顎臼歯、右上顎第3or4小臼歯、右上顎第１？大臼歯、右上顎第３大臼歯、左下顎臼歯、右下顎臼歯、右下顎第３大臼歯である。遺構の時期は６世紀後半～末頃と考えられる。

溝Ｄ１３２５（第350図、図版93b）

Ｄ－１調査区の北西部、A20c1区～A19c10区で検出した。幅約0.4m、深さ0.3mで、長さ3.2mを確認している。掘立柱建物Ｄ１の柱掘方ピットＤ９３１に切られている。

溝Ｄ１３２５出土遺物（第428図27）

土師器小型壺（27）は口径9.4㎝を測る。外面及び口頸部の内面に赤色顔料を塗付し、成形時の凹凸や粘土紐の跡が明瞭に残る一方で、極めの細かい胎土をもつ。土坑Ｄ６７９（第422図14・15）、北東居住域の井戸Ｄ４７４（第232図13）、ピットＣ３８９９（第215図5）からも同タイプのものが出土している。いずれも時期は６世紀後半と考えられる。

溝Ｄ１５１７（第350図）

Ｄ－１調査区の西半部中央、A20e1区で検出した。幅約0.6m、深さ8cmで、長さ5.3mを確認している。埋土中より頁岩製の砥石（第640図5）が出土している。

溝Ｄ１５８０（第350図、図版83a）

Ｄ－１調査区の東端やや中央寄り、A19d8区で検出した。幅約1.3m、深さ0.22mを測る。埋土中よりII型式１段階の須恵器坏蓋（第428図15）が出土している。

ピット

ピットＤ５５４（第411図A、図版93a）

Ｄ－２調査区の西半部中央、A19e7区で検出した。径0.47×0.26m、深さ0.53mを測る。柱痕跡は径14cm。出土土器は細片で、時期等は不明。

ピットＤ５６３（第350図）

Ｄ－２調査区の西端やや南寄り、A19e8区で検出した。径0.26×0.35m、深さ0.26mを測る。柱痕跡は径0.16m。埋土はN4/灰色シルトに10BG6.5/1明青灰色シルトが径２～3cmの斑状に混入する。出土土器は細片で、時期等は不明。

ピットＤ６０６（第350図、第411図B）

Ｄ－２調査区の西半部南寄り、A19f7区で検出した。径0.55m、深さ0.15mを測る。柱材（芯持ち材）は径23.5cm、残存長は14.1cmである。

出土土器は細片で、時期等は不明。

ピットＤ６１０（第350図）

Ｄ－２調査区の西半部やや南寄り、A19f7区で検出した。径0.4×0.3m、深さ0.28mを測る。柱痕跡は径0.19m。埋土はN4/灰色シルトに10BG6.5/1明青灰色シルトが径２～3cmの斑状に混入する。掘立柱建物Ｄ１５と重複するが、前後関係は不明である。

ピットＤ６１３（第350図、第412図A）

Ｄ－２調査区の西半部南寄り、A19e7区で検出した。径0.52m、深さ0.46mを測る。３個の板材を礎板として利用していた。柱痕跡は径0.19m。

ピットＤ６２０（第350図）

Ｄ－２調査区の西半部やや南寄り、A19e7 区で検出した。径 0.4 × 0.35m、深さ 0.28m を測る。柱痕跡は径 0.2m。埋土は N3/ 暗灰色シルトに 10BG6.5/1 明青灰色シルトが径１～ 2㎝の斑状に混入する。掘立柱建物Ｄ１５と重複するが、前後関係は不明。

ピットＤ６４４（第 350 図、第 411 図 C、図版 95a）

Ｄ－２調査区の西半部中央、A19e7 区で検出した。径 0.5m、深さ 0.51m を測る。柱材は径 10㎝、残存長は 19㎝である。柱材は残存不良で、ほとんど土壌化していた。

ピットＤ６６１（第 350 図）

Ｄ－２調査区の西半部、A19e7 区で検出した。径 0.4m、深さ 0.22m を測る。柱痕跡は径 0.11m を測る。出土土器は細片で、時期等は不明。

ピットＤ６８０（第 350 図、第 412 図 B、図版 101c）

Ｄ－２調査区の西半部南東寄り、A19f7 区で検出した。径 0.37 × 0.39m、深さ約 0.3m を測る。柱痕跡は径 0.2m。底面で確認された礎板は長さ 28.7㎝、幅 13.9㎝、厚さは 4.2㎝である。

ピットＤ７１５（第 350 図、第 412 図 C、図版 93a）

Ｄ－２調査区の西端部中央、A19e8 区で検出した。径 0.37m、深さ 0.3m を測る。柱痕跡は径 12㎝。竪穴住居Ｄ２９を切っている。底面で確認された礎板は、長さ 28.3㎝、厚さは 3.9㎝。

ピットＤ７３５（第 350 図）

Ｄ－２調査区の西半部ほぼ中央、A19e7 区で検出した。径 0.37 × 0.46m、深さ 0.3m を測る。柱痕跡は径 0.13m。掘立柱建物Ｄ１１と重複するが、前後関係は不明。

ピットＤ８６５（第 350 図）

Ｄ－２調査区の西半部やや南寄り、A19e7 区で検出した。径 0.25 × 0.3m、深さ 0.38m を測る。柱痕跡は径 9㎝。掘立柱建物Ｄ１１と重複するが、前後関係は不明。

ピットＤ８６６（第 350 図、第 411 図 D）

Ｄ－２調査区の西半部中央、A19e7 区で検出した。径 0.5 × 0.35m、深さ 0.65m を測る。柱材は径 8㎝、残存長は 39㎝である。掘立柱建物Ｄ１０の束柱ピットＤ６７３に切られている。遺構の時期は、遺構の切り合い関係から、５世紀と考えられる。

ピットＤ９３６（第 350 図、第 412 図 G、図版 96c）

Ｄ－１調査区の北半部やや西寄り、A19d10 区で確認した。径 0.75 × 0.7m、深さ 0.5m を測る。底面で確認した礎板は、長さ 56.7㎝、幅 11.5㎝、厚さ 3㎝で、南北２ヶ所において柱材を据え置いた際の圧痕が観察された。２つの柱の掘方を１つのピットでカバーしたのかもしれない。

ピットＤ９３８（第 350 図、図版 93b）

Ｄ－１調査区の北半部やや西寄り、A19d10 区で検出した。径 0.3m、深さ 0.24m を測る。柱痕跡は径 8㎝。出土土器は細片で、時期等は不明。

ピットＤ９７６（第 350 図、図版 83b）

Ｄ－１調査区の中央やや西寄り、A19d10 区で検出した。径 0.55m、深さ 0.15m を測る。埋土中より、土師器甕（第 428 図 19）が出土している。

ピットＤ１０２７（第 413 図 A、図版 88a）

Ｄ－１調査区の北半部やや東寄り、A19c ～ d9 区で検出した。径 0.6 × 0.48m、深さ 0.65m を測る。柱痕跡は径 0.16m。竪穴住居Ｄ１５・Ｄ２５を切っている。出土土器は細片で、時期等は明らかでないが、遺構の切り合い関係から、6 世紀後半以降と考えられる。

ピットＤ１０５９（第 350 図、図版 90a）

Ｄ－１調査区のほぼ中央、A19e9 区で検出した。径 0.33 × 0.55m、深さ 0.52m を測る。柱痕跡は径約 0.1m。なお、掘立柱建物Ｄ２と重複するが、前後関係は不明である。出土土器は細片で、時期等は不明。

ピットＤ１０７８（第 350 図、図版 83b）

Ｄ－１調査区の南半部中央、A19e10 区で検出した。径 0.35m、深さ 0.24m を測る。柱材は径約 13.3㎝、残存長 22㎝である。柱材の樹種はサカキ（芯持丸木）。竪穴住居Ｄ４を切っている。出土土器は細片で、時期等は不明。

ピットＤ１１６７（第 350 図、図版 89a）

Ｄ－１調査区、A19e9 区で検出した。径 0.6m、深さ 0.45m を測る。柱痕跡は径 0.12m。北側の一部は竪穴住居Ｄ１９に切られている。出土土器は細片で、時期等は明らかに出来ないが、遺構の切り合い関係から、6 世紀後半以前と考えられる。

ピットＤ１２４４（第 412 図 D、図版 96f）

Ｄ－３調査区の西半部、A19f9 区で検出した。径 0.5m、深さ 0.65m を測る。底面で確認され

た礎板は、長さ 31cm、幅 14cm、厚さは 5cmである。ピットＤ１２４５に切られている。

ピットＤ１３０２（第 350 図）

Ｄ－１調査区の中央部北寄り、A19d10 区で検出した。径 0.5m、深さ 0.58m を測る。底から礎板の痕跡かと考えられる木片（横 4.5cm、縦 2.5cm、厚さ 1cm）が出土した。

ピットＤ１３０５（第 350 図）

Ｄ－１調査区の西半部北端やや中央寄り、A19c10 区で検出した。北側は、排水用に設けた溝の掘削により破損する。径 0.35m、深さ 0.5m を測る。竪穴住居Ｄ１２と重複するが、前後関係は不明である。埋土中より、Ｉ型式５段階の須恵器坏蓋（第 428 図 10）が出土している。

ピットＤ１３１４（第 350 図、図版 83b）

Ｄ－１調査区の中央、掘立柱建物Ｄ５の約 1m 北側、A19d10 区で検出した。径 0.29m、深さ 0.39m を測る。柱痕跡は径 0.1m。出土土器は細片で、時期等は不明。

ピットＤ１３２０（第 350 図、図版 83b）

Ｄ－１調査区の南半部、A19e10 区で検出した。径 0.3 × 0.36m、深さ 0.44m を測る。柱痕跡は径 0.11m。出土土器は細片で、時期等は不明。

ピットＤ１３２４（第 350 図、図版 93b）

Ｄ－１調査区の北半部、A19c10 区で検出した。径 0.65m、深さ 0.35m を測る。柱痕跡は径 0.2m。竪穴住居Ｄ１２と重複するが、前後関係は不明。

ピットＤ１３２６（第 350 図、図版 93b）

Ｄ－１調査区の北半部、A19c10 区で検出した。径 0.6m、深さ 0.15m を測る。溝Ｄ１３２５に切られ、掘立柱建物Ｄ１に重複する。埋土中より、５世紀後半の須恵器甕（第 428 図 12）、土師器甑が出土している。

ピットＤ１３５９（第 413 図 B）

Ｄ－１調査区の中央、A19d10 区で検出した。径 0.35m、深さ 0.56m を測る。柱痕跡は径 9cm。出土土器は細片で、時期等は不明。

ピットＤ１４６０（第 413 図 D）

Ｄ－１調査区、A19d10 区で検出した。径 0.57m、深さ 0.61m を測る。柱痕跡は径 0.1m。掘立

柱建物Ｄ１の柱掘方ピットＤ９４１に切られる。出土土器は細片で、時期等は明らかでないが、遺構の切り合い関係から、６世紀後半以前と考えられる。

ピットＤ１４９５（第413図C）

Ｄ－１調査区の北東部、A19d9区で検出した。溝Ｄ１５２２を切っている。径0.48m、深さ0.53mを測る。柱材は径10.8cm、残存長34.2cmで、樹種はヒノキ（芯持丸木）。

ピットＤ１５０９（第350図）

Ｄ－１調査区の北東隅、A19c8区で検出した。径0.27m、深さ0.21mを測る。柱材は残存不良で、土壌化している。掘立柱建物Ｄ４のピットＤ１１２８に切られる。

ピットＤ１５２９（第350図）

Ｄ－１調査区、掘立柱建物Ｄ３の約2m南側、A19d9区で検出した。径0.4×0.55m、深さ0.26mを測る。埋土中より、５世紀末～６世紀前半の須恵器坏身片が出土している。

ピットＤ１５３２（第350図）

Ｄ－１調査区、掘立柱建物Ｄ２の約2m北側、A19d9区で検出した。径0.35×0.31m、深さ0.42mを測る。出土土器は細片で、時期等は不明。

ピットＤ１５８８（第350図、図版91a）

Ｄ－１調査区の北東部、A19d9区で検出した。径0.37×0.4m、深さ0.4mを測る。柱材は径19.6cm、残存長32.7cmで、樹種はヒノキ（芯持丸木）である。

ピットＤ１６１１（第350図、図版83b）

Ｄ－１調査区の南半部中央、A19e10区で検出した。径0.4m、深さ0.36mを測る。柱痕跡は径0.12m。柱材は一部残存していたが、ほとんど土壌化していた。竪穴住居Ｄ３を切っている。

ピットＤ１６１４（第412図H、図版83b・96h）

Ｄ－１調査区の南半部はぼ中央、A19e10区で検出した。径0.6m、深さ0.19mを測る。竪穴住居Ｄ３・４に重複し、これらを切っている。埋土中よりＩ型式５段階の須恵器坏身（第428図11）、土師器浅鉢等が出土している。

ピットＤ１６４０（第350図）

Ｄ－１調査区の西半部、A20d1区で検出した。径0.36×0.39m、深さ0.49mを測る。ピット

Ｄ９６８、溝Ｄ９６９に切られている。

埋土は10BG7/1明青灰色シルトにN5/0灰色粘土ブロック（径１～3cm）を15％混入する。柱痕跡は径約0.15m。出土土器は細片で、時期等は不明。

ピットＤ１６５２（第413図E、図版91a）

Ｄ－１調査区の北半部中央、A19c9・10区で検出した。径0.42m、深さ0.46mを測る。柱材は径20cm、残存長34cmで、樹種はヒノキ（芯持丸木、半歳）。竪穴住居Ｄ２５の床面で確認しているが、前後関係は不明。

ピットＤ１６６６（第413図F、図版97b）

Ｄ－１調査区の北半部中央、A19c10区で検出した。竪穴住居Ｄ１２を切っている。径0.49m、深さ0.422mを測る。柱材は径14.5cm、残存長34.4cmである。樹種はツブラジイ（削出丸木）で、多角状に面取りをしている。なお、柱材の底は底面より0.16mほど沈み込んでいる（図版97b）。

ピットＤ１６７７（第350図）

Ｄ－１調査区の北半部ほぼ中央寄り、A19d10区で検出した。径0.4m、深さ0.5mを測る。竪穴住居Ｄ１３、掘立柱建物Ｄ２と重複しているが、前後関係は不明である。出土土器は細片で、時期等は不明。

ピットＤ１８０７（第350図）

Ｄ－１調査区の北東部、A19c9区で検出した。径0.41m、深さ0.52mを測る。柱材は径12.8cm、残存長29.5cmで、樹種はヒノキ（芯持ち材）。ピットＤ１５０２・１４９８に切られている。

ピットＤ１８５８（第413図G）

Ｄ－１調査区の東半部ほぼ中央寄り、A19e9区で検出した。径0.52m、深さ0.46m、柱痕跡は径0.12mを測る。竪穴住居Ｄ１８、ピットＤ１４４７を切っている。出土土器は細片で、時期等は不明。

ピットＤ１８６８（第413図H、図版97c）

Ｄ－１調査区の北半部やや東寄り、A19c9区で検出した。径0.36×0.31m、深さ0.48mを測る。柱材は径23.8cm、残存長37.8cmで、樹種はヒノキ（芯持丸木）。ピットＤ１８６９を切っている。竪穴住居Ｄ１０・Ｄ２５と重複するが、前後関係は不明である。

ピットＤ１８９３（第413図I）

Ｄ－１調査区の東端、A19e8 区で検出した。平面プランは隅丸長方形を呈し、径 0.31 × 0.45m、0.43m を測る。柱痕跡は径 0.13m。掘立柱建物Ｄ８のピットＤ１８９４を切っている。

ピットＤ１９３０（第 412 図 E）

Ｄ－３調査区の南西隅、A19f9 区で検出した。径 0.63m、深さ 0.49m を測る。礎板（木取りは板目）は、長さ 26.2㎝、幅 11㎝、厚さは 3.8㎝である。ピットＤ１２４２に切られている。

ピットＤ１９３４（第 412 図 F）

Ｄ－１調査区の中央部やや南寄り、A19e10 区で検出した。竪穴住居Ｄ３の床面除去後に確認した。径 0.52 × 0.38m、深さ 0.45m を測る。礎板の樹種はシャシャンボ（板目、芯持ち材）。遺構の時期は遺構の切り合い関係から、５世紀代と考えられる。

ピットＤ１９６４（第 350 図）

Ｄ－１調査区の東半部ほぼ中央、A19d9 区で検出した。竪穴住居Ｄ１８に重複する。径 0.4m、深さ 0.34m を測る。柱痕跡は径 0.15m。出土土器は細片で、時期等は不明。

ピットＤ１９９５（第 413 図 J）

Ｄ－１調査区の北半部やや東寄り、A19d9 区で検出した。ピットＤ１９９６を切っている。径 0.38m、深さ 0.38m を測る。柱材は径 17.9㎝、残存長 27.4㎝で、樹種はヒノキ（芯持丸木）。なお、竪穴住居Ｄ１５・２５と重複するが、前後関係は不明である。

ピットＤ１９９６（第 413 図 J）

Ｄ－１調査区の中央やや北寄り、A19d9 区で検出した。径 0.4m、深さ 0.34m を測る。柱痕跡は径 8㎝。掘立柱建物Ｄ１５･Ｄ２５に重複し、ピットＤ１９９５に切られる。出土土器は細片で、時期等については、明らかにできない。

Ｄ調査区包含層出土土器・土製品（第 429 図 7 ～ 17）

（7 ～ 10）は韓式系硬質土器で、外面は直線文タタキメ、内面はナデ調整を施している。（7･8）は同一個体の可能性がある。いずれもＤ -1 調査区第 10 層から出土した。（11）は不明土製品で、第 11 層から出土した。（12）は韓式系軟質土器平底鉢で、底径 5.8㎝を測る。外面は格子状タタキメ、下半はナデ消し、下端はヘラケズリ、内面はナデ調整を施している。底部外面にロクロのゲタ痕が見られる。Ｄ -1 調査区第 10 層以下から出土した。（13）は須恵器坏蓋？で、口径 13㎝を測り、Ｄ－２調査区第 10 層以下から出土した。（14）はＩ型式２段階の須恵器（瓦質）甕で、口径 19㎝を測る。内外面は黒灰色を呈し、焼成は甘く、胎土は中世から近世にみられる瓦質土

器に近似している。瓦質須恵器。Ｄ－２調査区第 11 層から出土した。(15) は土師質有孔土錘で、Ｄ -1 調査区第 11 層から出土した。(16・17) は須恵器系土器高坏で、(16) は柱状部片で、外面に波状文と直線文を巡らしている。Ｄ -1 調査区第 10 層から出土した。(17) は口径 18cm、底径 11.7cmを測る。坏部外面下半は回転ヘラケズリ、内面はナデ調整を施している。Ｄ -1 調査区第 11 層以下から出土した。

包含層出土玉類（第 631 図、第 632 図）

滑石製臼玉はＤ -1 調査区第 9 層から 17 点、第 10 層から 17 点、第 10 層以下から 1 点、第 11 層から 3 点、第 12 層から 1 点、出土層位不明 1 点、Ｄ－２調査区第 10 層から 2 点、第 11 層から 1 点、第 13 層から 14 点、地山直上（第 14 層上面）から 6 点出土している。

滑石製双孔円板はＤ－１調査区第 10 層から 1 点（第 631 図 25）出土している。滑石製品有孔円板は 6 点で、（第 631 図 23）はＤ -1 調査区第 10 層、（第 631 図 24）は第 11 層、（第 632 図 25）はＤ－２調査区第 10 層、（第 631 図 21）は 12 層、（第 631 図 22、第 632 図 26）は第 13 層、（第 631 図 26）は第 13・14 層から出土している。

ガラス玉は 2 点で、掲載図化していないが、青紺色の粟玉がＤ－１調査区第 10 層（分析 D2)、第 11 層（分析 D1）から各々 1 点出土している（分析編第 3 章 図版 1)。

包含層出土石製品（第 639 図、図版 249）

砥石は 11 点で、Ｄ－１調査区第 10 層から流紋岩製の砥石（第 639 図 1)、砂質泥岩製の砥石（第 639 図 2）が出土している。その他、掲載図化していないが、Ｄ -1 調査区第 10 層から流紋岩製の砥石 3 点（個体番号 D3・D14・D19、以下個体番号省略)、砂質泥岩の砥石（D17)、第 9 層から流紋岩製の砥石（D6)、第 11 面から泥岩製の砥石（D18)、13 層から流紋岩製の砥石（D16)、Ｄ－２調査区第 7b 層から流紋岩製の砥石（D15)、第 10 層以下から流紋岩製の砥石（D2）が出土している。

敲石は 2 点で、Ｄ -1 調査区第 9 層から砂岩製の敲石（D7)、Ｄ－２調査区第 13 層から砂岩製の敲石（D6）が出土している。

Ｈ地区包含層出土土器（第 580 図 38 ～ 40）

38 はＩ型式 5 段階の須恵器坏身で、底部外面にヘラ記号を刻んでいる。第 10 層下位・第 11 層から出土した。39 はII 型式 3 段階の須恵器坏身で、第 10 層上位から出土した。40 は口径 40 cmを測る大甕で、第 11 層から出土した。

第５項　西居住域の遺構と遺物

西居住域はＦ調査区のほぼ全域に広がる居住域で、南西居住域北辺を東西に伸びる浅い谷と、北西居住域および北東居住域との間に存在する浅い谷によって画された小さな島上の微高地に検

出された。北東居住域の周囲に明確な区画溝が巡ることを考慮すると、本居住域が北東居住域と繋がっている可能性は低いものと考えられる。竪穴住居 19 棟、掘立柱建物 10 棟、井戸 6 基などを始めとする多数の遺構が検出されている。居住域全体の平面図は第 430 図に示す。穴住居、掘立柱建物、井戸その他主要な土坑などは個別に遺構平面図・断面図を作成した。遺構の記述は作成した遺構図面の挿図番号順に掲載している。

居住域は北西－南東方向に伸びる微高地上で検出したが、その西側は谷状に大きく落ち込む地形になり、谷の底面では古墳時代中期を中心とする、北北西－南南東方向の人工的な溝（大溝）が掘られていた。この谷は古墳時代末～飛鳥時代頃には、微高地との比高差を解消するまで埋没する。

一方、微高地の北側はＤ調査区から続く浅い谷があるが、後述するように古墳時代後期に形成される自然河川による堆積作用により、こちらも古墳時代末～飛鳥時代頃には埋没し比高差が解消される。この北側の谷では６世紀後半段階に、自然河川の氾濫堆積物を利用して小規模な水田耕作を行っていたことが明らかとなっている。

竪穴住居

竪穴住居Ｆ１（第 431 図、図版 104）

Ｆ調査区の中央部、A19j6、A19j7、B19a6、B19a7 区で検出した。5.82m × 5.7m の隅丸方形状の平面形を呈し、建物の主軸はＮ -49° - Ｗを指す。住居内ではピットＦ１００４、Ｆ１０２０、Ｆ１０２１、Ｆ１００２が主柱穴と考えられる。また北西部分を除いて壁溝が確認された。北壁の中央に造り付けのカマドＦ９８７をもつ。側壁はＵ字状に残存し、その内側中央部分に支脚を据える小ピットと、その焚口側に火床である焼土を確認した。燃焼部長 0.95m、焚口幅約 0.7m である。さらにプラン中央の床面上に草本や木本類の炭化物と焼土塊が円形に検出された。本住居跡は竪穴住居Ｆ１１を切った状況で検出されている。

覆土およびカマドＦ９８７より須恵器・土師器が出土した。出土した須恵器は II 型式 3 段階に相当するものである。

竪穴住居Ｆ１出土遺物（第 464 図１～８、図版 195）

覆土およびカマドＦ９８７より須恵器･土師器、滑石製臼玉１点が出土した。須恵器坏蓋（1）、坏身（2・3）、土師器鉢（4）、甕（5・6）、高坏（7）、鍋（8）などがある。

竪穴住居Ｆ１１（第 431 図、図版 110b）

Ｆ調査区の中央部、A19j6、A19j7 区で検出した。竪穴住居１に切られているが、平面形は 7.4m × 5.06m の長方形を呈する。建物の主軸はカマドが西壁にあるとすると、Ｓ -87° - Ｗを指す。竪穴住居Ｆ１と同様に、床面の中央部で、草本類の炭化物と焼土塊が円形に検出された。主柱穴は特定できなかった。またカマドは検出されておらず、西壁に存在した可能性がある。所属時期

は切り合い関係から６世紀後半に属すると考えられる。滑石製管玉（第628図14、図版243e）が出土している。

竪穴住居Ｆ２（第432図、図版105・106a～c）

Ｆ調査区の南半部東端、B19a5、B19a6区で検出した。一部分が調査区外であるが、プランは6.04m×6mの隅丸方形で、建物の主軸はＮ-26°-Ｗを指す。主柱穴はピットＦ９７６、Ｆ９７７、Ｆ９７８、Ｆ９７９である。また東壁の一部で壁溝を確認している。造り付けカマドＦ９６５は竪穴住居Ｆ１と同様に北壁中央部にもつ。全長1.3m、焚口幅0.75mである。床面から須恵器、土師器、滑石製勾玉、鋸歯紋の線刻がある滑石製紡錘車などが出土している。またカマドＦ９６５からは土師器が出土している(第432図)。出土した須恵器はII型式４段階に相当するものである。

竪穴住居Ｆ２出土遺物（第464図９～11・13、第623図14、第625図８、図版195・243b・244）

床面から須恵器、土師器、滑石製勾玉、鋸歯紋の線刻がある滑石製紡錘車などが、カマドＦ９６５からは土師器、覆土から滑石製臼玉２点が出土している。須恵器坏身（464-9)、土師器甕(464-10)、高坏（464-11)、土師器甕（464-13、カマドＦ９６５支脚)、滑石製勾玉（623-14)、滑石製紡錘車（625-8)、不明石製品などがある。

竪穴住居Ｆ３（第433図、図版105a・106a・106d）

Ｆ調査区の南半部東端、B19a5、B19a6区で検出した。竪穴住居２に切られている。一辺5.76mの隅丸方形を呈すると考えられる。建物の主軸は竪穴住居２に対して西に約45度傾き、Ｎ-18°-Ｅを指す。主柱穴はピットＦ１０５２、Ｆ１０７２、Ｆ１０８３、Ｆ１０７４である。西壁から南壁の一部で壁溝を確認している。造り付けカマドＦ１０３３を西壁中央にもち、燃焼部長1.1m、焚口幅0.6mで土師器高坏（第464図12）を支脚に転用している。覆土から須恵器、土師器、製塩土器が出土している。出土した須恵器はII型式２段階に相当するものである。

竪穴住居Ｆ３出土遺物（第464図12・14～17、図版195）

覆土から須恵器、土師器が出土している。土師器高坏（464-12、カマドＦ１０３３支脚)、須恵器坏蓋（15・16)、製塩土器（17）などがある。

竪穴住居Ｆ４（第433図、図版105a・106a・106e）

Ｆ調査区の南半部東端、A19j5、A19j6、B19a5、B19a6区で検出した。竪穴住居Ｆ２・Ｆ３・Ｆ５に切られた部分的な検出であるが、平面形は一辺6.6mの隅丸方形に復元できる。竪穴住居Ｆ３と同方向に建物の主軸をとり、Ｎ-13°-Ｅを指す。主柱穴はピットＦ１０８１、Ｆ１２４１が考えられるが、それ以外は不明確である。造り付けカマドＦ９１６を西壁中央にもち、燃焼部長1.1m、焚口幅0.6mである。覆土およびカマドＦ９１６から須恵器、土師器が出土した。出土した須恵器はII型式２段階に相当するものである。

竪穴住居Ｆ４出土遺物（第464図18～21、図版195）

覆土およびカマドＦ９１６から須恵器、土師器、滑石製臼玉１点が出土した。土師器甕（18～20）、須恵器坏身（21）などがある。

竪穴住居Ｆ５（第433図、図版105a・106a）

Ｆ調査区の南半部東端、A19j5、A19j6、B19a5、B19a6区で検出した。竪穴住居Ｆ２・Ｆ３に切られた状態で、四隅の一部を検出したのみであるが、平面形は5.26m×5.1mの方形に復元できる。建物の主軸はＮ-11°Ｗを指す。主柱穴はピットＦ１０８７、Ｆ１１８６、Ｆ１１９５、Ｆ１２４６で、Ｆ１１９５は竪穴住居２のカマドＦ９６５下で検出された。造り付けカマドＦ７２６を北壁中央にもつが、竪穴住居Ｆ３の構築時に壊され、炭化物の広がりを部分的に確認したのみである。遺物は、覆土から土師器片が出土しているが図示できるものはなかった。切り合い関係からII型式２段階に属するものと考えられる。

竪穴住居Ｆ２～Ｆ５については、ほぼ同一の場所で建て替えを行っており、切り合い関係から、竪穴住居Ｆ４→Ｆ５→Ｆ３→Ｆ２の順で構築されている。特に竪穴住居Ｆ３～Ｆ５はII型式２段階において、造り付けカマドの位置を西壁と北壁と交互に変えながら構築されていることが確認された。

竪穴住居Ｆ６（第430図）

Ｆ調査区の南半部中央東よりのA19j7区で検出した。平面形は隅丸方形と考えられるが、竪穴住居Ｆ１、Ｆ５、Ｆ１５などに切られているため、規模は不明である。また主柱穴も特定できなかった。カマドも検出されておらず不明である。覆土からは図示できる遺物は出土していない、滑石製臼玉１点が出土している。

竪穴住居Ｆ７（第435図、図版107a・107b）

Ｆ調査区南東隅のB19a6、B19b6区で検出した。竪穴住居Ｆ１２に切られているが、平面形は一辺4m程度の隅丸方形に復元できる。建物の主軸はＮ-4°－Ｅを指す。主柱穴はピットＦ１１１５、Ｆ１１１９であるが、北辺の２柱穴は検出されなかった。東壁の南東隅に造り付けカマドＦ９３１をもつ。カマド内およびその周辺には炭化物、焼土が広く分布していた。カマド内の中央に支脚を据える小ピットがあり、その焚口側には燃焼部となる硬化した焼土面が検出された。燃焼部長0.9m、焚口幅0.5mである。

覆土およびカマド内より土師器、須恵器、製塩土器が出土している。出土須恵器はＩ型式３段階に相当するものである。

竪穴住居Ｆ７出土遺物（第463図１～３）

覆土およびカマド内より土師器甕（1）、須恵器坏身（2）、製塩土器（3）、滑石製臼玉６点が

出土している。

竪穴住居Ｆ１２（第435図、図版107a・108a・108b）

Ｆ調査区の南半部東側の、B19a6、B19b6区で検出した。竪穴住居Ｆ７、竪穴住居Ｆ８を切るように検出された。平面形は4.18m×3.72mの隅丸方形であり、建物の主軸はＮ－３°－Ｅを指す。主柱穴はピットＦ１１２４、Ｆ１１２５５、Ｆ１１２７、Ｆ１２５２である。東壁中央に造り付けカマドＦ１０６８をもつ（第434図、図版107b・107c）。燃焼部長0.75m、焚口幅0.65mである。遺存状態は比較的よく、煙道部（残存長0.4m）も残存する。また土師器小型甕を支脚として転用していた。カマド内およびその周辺からは炭化物、焼土が広範囲に検出された。とくにカマド右側では、床面を10㎝程度盛土して一段高くしており、炭化物はその上にも広がっていた。

床面からは、砥石、滑石製臼玉が出土しており、南東隅からは製塩土器が２個体分出土している。またカマド内から土師器甕や韓式系土器片が出土している。その他、覆土より須恵器、土師器が出土している。出土した須恵器はＩ型式４段階に相当する。

竪穴住居Ｆ１２出土遺物（第463図17～23、第639図4、図版197・250a）

須恵器、土師器、韓式系土器、製塩土器、砥石（第639図4）、臼玉などが出土している。須恵器坏身（17）、土師器甕（18・19）、韓式系土器甑（20）、製塩土器（21・22）、土師器鉢（23）などがある。

竪穴住居Ｆ８（第436図、図版108c・108d）

Ｆ調査区南東部のB19a6、B19b6区で検出した。竪穴住居Ｆ７およびＦ１２の西側に位置する。平面形は3.18m×3.5mの方形を呈し、建物の主軸はＮ-78°－Ｗを指す。主柱穴は明確でない。西壁中央に造り付けカマドＦ１１３３をもつ。逆Ｖ字型に近い形態を呈し、土師器高坏を伏せて据え、支脚に転用していた。燃焼部長0.8m、焚口幅0.5mである。カマド内から右側壁の外側にかけて炭化物が広がっていた。

覆土およびカマド内より土師器、韓式系土器等が出土している。出土遺物と切り合い関係より、Ｉ型式３段階併行に属するものと考えられる。

竪穴住居Ｆ８出土遺物（第463図７～10、図版196）

覆土およびカマド内より土師器、韓式系土器等が出土している。韓式系土器平底鉢（7）、土師器高坏（8）、甕（9）、韓式系土器甑（10）などがある。

竪穴住居Ｆ９（第436図、図版110a）

Ｆ調査区南半部西側の大溝肩近く、A19j8区で検出した。平面形は4.35m×辺4.25mの方形を呈し、建物の主軸はＮ-12°－Ｗを指す。主柱穴はピットＦ１１０１、Ｆ１１０２、Ｆ１１０３、Ｆ１１０６である。東壁のやや南よりに造り付けカマドＦ１１０５をもつ。谷１に設定したトレ

ンチによって削平されたが、残存長 0.5m、残存幅 0.3m である。

覆土から須恵器、韓式系土器が出土している。出土した須恵器はⅠ型式３段階に相当するもので、西居住域で検出された竪穴住居の中で最も古い住居のひとつである。

竪穴住居Ｆ９出土遺物（第 463 図４～６、図版 196）

覆土から須恵器、韓式系土器が出土している。須恵器瑳（5）、韓式系土器平底鉢（6）などがある。カマドＦ１１０５からは土師器甑（4）が出土している。

竪穴住居Ｆ１９（第 436 図、図版 108c）

Ｆ調査区南東部の B19a6、B19b6 区で検出した。竪穴住居Ｆ７およびＦ１２の西側に位置する。平面形は 4.5m × 3.7m の長方形を呈する。建物の主軸はＮ -15° - Ｗを指す。竪穴住居Ｆ８に切られる。主柱穴は明確でなかった。竪穴住居Ｆ８のカマドＦ１１３３の位置が本住居跡の西壁中央に位置しており、Ｆ８の床面を一段高くした逆「コ」字状に巡るベッド状遺構の可能性もあるが、本調査区の他の竪穴住居では同様の遺構がみられないことから、切り合い関係をもつ別の竪穴住居と判断した。従ってカマドは東壁に存在していたと考えられる。覆土から土師器が出土しているが、図示できるものはない。時期は切り合い関係からⅠ型式３段階と考えられる。

竪穴住居Ｆ１０（第 437 図、図版 109a）

Ｆ調査区南端中央の B19b7 区で検出した。平面形は 3.4 × 3.1m の隅丸方形で、本調査区で検出された住居跡の中では最も規模が小さい。建物の主軸はＮ -11° - Ｅを指す。主柱穴となる明確なピットは検出されなかった。床面下部の中央部でベ - ス面が小マウンド状に高まっている。住居の構築の際、プランの中央部を掘り残すように高まりを形成した、その上に床面を作っていると考えられる。南東隅に造り付けカマドＦ１１１７をもつ（第 437 図、図版 109b）。カマドは調査区南壁側溝によって削平を受けたが、焚口を住居跡中央部に向けており、幅 0.68m、復元長は約 0.6m 程度となるものと考えられ、奥行きよりも横幅の広いカマドであるということができる。

カマド内からは土師器が（図版 109c）、またカマドの左側から土師器甕と製塩土器が出土している。その他覆土から須恵器、土師器が出土している。出土した須恵器はⅠ型式３段階～Ⅰ型式４段階に相当する。

竪穴住居Ｆ１０出土遺物（第 463 図 11 ～ 16、図版 196）

カマド内からは土師器が、またカマドの左側から土師器甕と製塩土器が、その他覆土から須恵器、土師器が出土している。須恵器坏蓋（11･12）、坏身（13）、製塩土器（14）、土師器甕（15･16）などがある。

竪穴住居Ｆ１３（第 430 図、図版 110b）

Ｆ調査区中央部東側の A19j6、A19j7 区で検出した。竪穴住居Ｆ１１に切られる。平面形は 7.7m

×7.5mの隅丸方形を呈し、本調査区検出の住居中で最大である。建物の主軸はN -27° - Eを指す。主柱穴は東西３列ずつ配されていると考えられるが、掘立柱建物Ｆ１０の柱穴と重なり検出できなかったものもある。ピットＦ１２２２、Ｆ１２２９、Ｆ１２６５、Ｆ１２２０は主柱穴と考えられる。北壁中央に造り付けカマドＦ９８２およびＦ９８３をもつ。Ｆ９８２は燃焼部長1.6m、焚口幅0.9mでこれも本調査区中最大規模である。Ｆ９８３は燃焼部長0.7m、焚口幅0.7mを測る。Ｆ９８２とＦ９８３は断面観察からは新旧関係が判然とせず、むしろ同時に存在した可能性も否定できない。Ｆ９８２では完掘時に支脚を据えるための小ピットと燃焼部となる硬化した焼土面を検出したが、Ｆ９８３ではそれらが検出されず、浅い掘り込みの中に炭化物が含まれていた。Ｆ９８３についてはカマドとしての機能を果たしていたかは不明である。

竪穴住居Ｆ１３出土遺物（第464図22・23・25・26、第639図3、図版195・249a）

覆土およびカマド内から須恵器、土師器、滑石製臼玉３点、砥石（第639図3）が出土している。須恵器坏身（22・23）、土師器甑（25）、土師器甕（26）などがある。なお、主柱穴Ｆ１２２０から滑石製臼玉１点が出土している。出土した須恵器はII型式４段階に相当する。

竪穴住居Ｆ１４（第439図、図版111a）

Ｆ調査区の南半部中央東よりのB19a5、B19a6区で検出した。竪穴住居Ｆ４やＦ１３などの掘方下で検出した。平面形は4.4m×4.5mの隅丸方形であり、建物の主軸はN -37° - Eを指す。主柱穴はピットＦ１２３０、Ｆ１２３８、Ｆ１２４９、Ｆ１２７３である。造り付けカマドは北東壁の中央にあったと考えられるが、竪穴住居Ｆ１３構築時に削平されており、焼土と炭化物の部分的な広がりを検出したにとどまる（Ｆ１２５３）。覆土より須恵器、土師器、砥石が出土している。出土した須恵器はI型式５段階に相当するものである。

竪穴住居Ｆ１４出土遺物（第464図24、第640図2、図版195・250a）

覆土より須恵器、土師器、砥石が出土している。図示し得たのは２点で、須恵器高坏蓋(464-24)、砥石（640-2）がある。

竪穴住居Ｆ１５（第430図）

Ｆ調査区の南半部中央東よりの、A19j6、A19j7、B19a6、B19a7区で検出した。竪穴住居Ｆ１やＦ１１、Ｆ１４などに切られており、これらの掘方下でプランの一部をようやく検出できた。一辺3.8mの隅丸方形になると考えられる。建物の主軸や主柱穴は不明である。切り合い関係からI型式５段階～II型式１段階に相当するものと考えられる。

竪穴住居Ｆ１６（第439図、図版111b～d）

Ｆ調査区南半部中央のA19j7区で検出した。竪穴住居Ｆ１によって切られているが、平面形は4.0 m×3.84mの方形を呈する。建物の主軸はN -15° - Wを指す。主柱穴はピットＦ１３１３、

Ｆ１３０１、Ｆ１２６８、Ｆ１２４９である。北壁中央に造り付けのカマドＦ１３０３をもつ。比較的残存状態がよく、燃焼部長 1.1m、焚口幅は 0.6m（復元）である。

覆土およびカマド内より須恵器、土師器が出土している。出土した須恵器はＩ型式３段階に相当するものである。

竪穴住居Ｆ１６出土遺物（第 463 図 24・25）

覆土およびカマド内より須恵器、土師器が出土している。土師器高坏（24）、須恵器甕（25）、滑石製双孔円板（第 631 図 16・17、図版 246b）などがある。

竪穴住居Ｆ１７（第 430 図）

Ｆ調査区南半部東よりの B19a6 区で検出した。竪穴住居Ｆ４、Ｆ１８などにより切られており、また平面プランの一部をかろうじて検出したのみであるので、規模や主柱穴等は不明である。北壁に焼土や炭化物の広がりを検出した（Ｆ９０９）。側壁や燃焼部は残存状態も悪く確認できなかった。従って規模は不明である。切り合い関係から５世紀に属すると考えられる。

Ｆ９０９の検出の際にこれを切るように新たなカマドが検出された（Ｆ１０４８）。土師器小型甕を倒立させて支脚にしているが、カマドの南半分が竪穴住居Ｆ１８によって切られており、規模等は不明である。本来は竪穴住居Ｆ１７とＦ１８との間に、このカマドをもつ竪穴住居が存在した可能性が高いが、プランは検出されなかった。カマドＦ１０４８内から滑石製双孔円板が出土している。

竪穴住居Ｆ１８（第 430 図）

Ｆ調査区南半部東よりの B19a6 区で検出した。竪穴住居Ｆ４などにより切られており、また平面プランの一部をかろうじて検出したのみであるので、規模や主柱穴等は不明である。北壁付近に焼土と炭化物の広がりを検出した。ここから土師器、滑石製臼玉１点が出土している。所属時期は不明であるが、５世紀に属すると考えられる。

掘立柱建物

掘立柱建物は 10 棟確認している。各ピットからの出土遺物は少なく、遺構の時期決定は困難な面もあるが、ピット埋土のあり方で概ね６世紀代か５世紀代かの区別は可能である。すなわち、６世紀の遺物包含層である灰色粘土～粘質シルトを基本とし、これにベースである青灰色粘土～シルトのブロックを含むものや、暗灰色粘質シルトのブロックを含むものが主に６世紀代に属し、５世紀の遺物包含層である暗灰色粘質シルトにベースの青灰色粘土～シルトをブロック状に含むものが主に５世紀に属すものとみてよい。

掘立柱建物Ｆ１（第 441 図、図版 112a）

Ｆ調査区中央東端で検出した。A19i5、A19i6、A19j5、A19j6 区で検出した。梁間３間（4.3m）、桁行３間以上で調査区外に伸びている。梁間 4.3m、桁行は調査区外へ伸びるため不明である。柱間は 1.3m を計るがややばらつく。柱穴は７箇所認められ、掘方の平面形は径 0.6m 程度の円形～不整円形であり、うち１箇所から柱が残存していた。所属時期は II 型式２段階～３段階と考えられる。

掘立柱建物Ｆ２（第 442 図、図版 112b）

Ｆ調査区中央部東よりの A19i6、A19i7 区で検出した。梁間３間（4.2m）、桁行３間（4.9m）で、東西にやや長い。柱間は梁間 1.4m ～ 1.6m 程度、桁行が 1.6m ～ 2.0m 程度である。柱穴は 11 箇所認められ、掘方は径 0.5m 程度の不整円形や不整方形を呈する。所属時期は II 型式２段階～３段階と考えられる。

掘立柱建物Ｆ４（第 443 図）

Ｆ調査区中央の A19i7、A19j7 区で検出した。梁間２間（3.6m）、桁行２間（4.4m）の総柱建物である。柱間は梁間 1.8m ～ 2.0m 程度、桁行 2.2m ～ 2.4m 程度を測る。柱穴は９箇所認められ、掘方の平面形は径 0.7m 程度の円形ないしは不整方形である。時期は II 型式１段階と考えられる。

掘立柱建物Ｆ３（第 444 図）

Ｆ調査区南半部の中央東よりの B19a6 区で検出した。竪穴住居４、竪穴住居６を切っている。梁間２間、桁行２間で総柱建物である。梁間 3.2m、桁行 3.6m で、柱間は梁間 1.6m、桁行 2.0m 前後を測る。柱穴は８箇所認められ、掘方の平面形は径 0.5m 程度の円形ないし不整円形である。所属時期は I 型式５段階と考えられる。

掘立柱建物Ｆ６（第 445 図）

Ｆ調査区の中央東よりの A19i6、A19i6 区で検出した。竪穴住居Ｆ１３に切られており、西辺および南辺については柱穴が検出できなかった。また東辺は掘立柱建物Ｆ１の柱穴によって切られている。梁間３間、桁行４間以上の規模を呈する。梁間 3.8m、桁行 4.6m 以上で、柱間は梁間、桁行ともに 1.2m ～ 1.6 前後を測る。柱穴は９箇所認められ、東辺の柱穴列では柱痕跡となる小ピットが明瞭に確認された。掘方の平面形は一辺 0.5m 程度の略方形ないし不正円形である。所属時期は I 型式４段階と考えられる。

掘立柱建物Ｆ５（第 446 図）

Ｆ調査区中央の A19i7、A19j7 区で検出した。掘立柱建物Ｆ４に切られている。梁間２間（3.4m）、桁行３間（4.0m）で、柱間は梁間 1.6m 前後、桁行 1.4m ～ 1.6m 前後を測る。柱穴は 10 箇所認

められ、掘方の平面形は径 0.4m 程度の不整円形や方形である。1 箇所に柱が残存していた。所属時期はＩ型式 4 段階と考えられる。柱穴Ｆ７４０から建築部材（第 672 図 8）が出土している。

掘立柱建物Ｆ７（第 447 図、図版 113a）

Ｆ調査区南半部西よりの B19a7 区で検出した。梁間 3 間、桁行 3 間で梁間 4.3m、桁行 4.5m の総柱建物である。柱間は梁間、桁行ともに 1.6m 前後を測る。柱穴は 16 箇所認められ、掘方の平面形は径 0.6m 程度の円形、不整円形、略方形である。所属時期は II 型式 2 段階～ 3 段階と考えられる。

掘立柱建物Ｆ８（第 448 図、図版 113b）

Ｆ調査区南東部の B19b5 、B19a5 区で検出した。竪穴住居Ｆ７を切っている。梁間 2 間(3.1m)、桁行 2 間（3.9m）の小規模な建物である。梁間 3.1m、桁行 3.9m で、柱間は梁間が 1.6m 前後、桁行が 1.8m ～ 2.0m 前後を測る。柱穴は 8 箇所認められ、うち 1 箇所には柱が残存していた。また 1 箇所からは草本類の炭化物を検出している。掘方の平面形は径 0.5m 程度の円形ないし不整円形、略方形を呈する。所属時期は II 型式 2 段階～ 3 段階と考えられる。

掘立柱建物Ｆ９（第 449 図、図版 113b）

Ｆ調査区南半部中央の B19a7、B19a8、B19b7、B19b8 区で検出した。竪穴住居Ｆ８を切っている。撹乱によって西辺を検出していないが、梁間 2 間、桁行 3 間の総柱建物である。梁間 3.9m、桁行 4.3m で、柱間は梁間 2.0m ～ 2.2m、桁行 1.6m 前後を測る。柱穴は 10 箇所認められ、掘方の平面形は径 0.6m 程度の円形ないしは不整円形である。所属時期は II 型式 2 段階～ 3 段階であると考えられる。

掘立柱建物Ｆ１０（第 450 図）

Ｆ調査区中央東よりの A19j6、A19j7 区で検出された。梁間 3 間、桁行 3 間で、竪穴住居Ｆ１３を切っている。また竪穴住居Ｆ１１の掘方下から柱穴を検出したため、竪穴住居Ｆ１１の方が新しい。梁間 4.7 m、桁行 5.0m で、柱間は梁間 1.3m ～ 1.7m 前後、桁行 1.6m ～ 2.0m 前後でややばらつく。柱穴は 12 箇所認められ、掘方の平面形は径 0.6m 程度の不整円形や略方形である。柱穴Ｆ１０６７から勾玉（第 623 図 4、図版 222b）が出土している。所属時期は II 型式 2 段階～ 3 段階と考えられる。

井戸

井戸は６基検出している。いずれもベ－スである青灰色シルト～粘質シルト層よりも下位の砂層（弥生時代中期から後期頃の堆積層）まで掘り込んであるため、当時の湧水点もこの砂層中で

あろう。他の調査区で検出されているような船材を枠に転用したものはみられず、素掘りのものばかりである。

井戸Ｆ８０６（第451図）

Ｆ調査区南半部の西よりのA19a8、A19a7区で検出した。大溝の東肩よりやや東よりに位置する。掘方は検出面で長軸1.1m、短軸1.05m、深さ1.4mの円形を呈する。検出面から0.5m程度までは擂鉢状の断面形になるが、そこから底面に向かってほぼ垂直に掘り込んでいる。掘方の埋土は4層に分層でき、3層中には腐食した植物遺体を多く含んでいた。2層より須恵器高坏（第466図8、図版198）、土師器甕（7）が、また井戸底より土師器甕（第466図9、図版198）が出土している。

出土した須恵器よりＩ型式4段階～5段階に相当すると考えられる。

井戸Ｆ８５５（第452図）

Ｆ調査区の南端付近のA19b7区で検出した。掘方は検出面で長軸1.55m、短軸1.35mの楕円形を呈し、深さ1.4mを測る。検出面から深さ約0.2mと約0.7m辺りに段を形成する断面形で、そこから底面へはやや急な掘り込みとなる。埋土は5層に分層できるが、1・2層によりこの井戸が埋まりきる前後に新たに土坑状に掘り返されたことが分かる。

出土遺物は土師器のミニチュア土器がある（第466図5、図版198）、埋土の状況より所属時期は1・2層が6世紀代（II型式2段階～3段階）、3層以下は5世紀（I型式4段階～5段階）に属すると考えられる。

井戸Ｆ９４４（第453図、図版115）

Ｆ調査区南東部のA19b6区で検出した。竪穴住居Ｆ７に切られている。長軸1.3m、短軸1.1m程度、深さ1.9mである。検出面から0.6m程度より下位はほぼ垂直に掘り込まれている。埋土は7層に分層できる。最下層の7層および6層は黒色系の粘土で、一度に埋められた可能性がある。5層は暗灰色系の粘質シルトで、本層より舷側板などの木製品（第677図6、第685図1・2、図版209・307）が出土している（図版115a）。その他の出土遺物は土師器甕（第466図1・2、図版198）、また最下部からは枝状の自然木とともにザル（図版263a）が出土している（図版115c）。須恵器は出土していないが、所属時期は5世紀前半に属するものと考えられる。

井戸Ｆ１１６８（第454図、図版116a・b）

Ｆ調査区西部A19a8区の谷1肩部付近で検出した。長軸1.8m、短軸1.3mで不正円形を呈し深さ1.7m以上である。井戸の底部が砂礫層に達しているため、側面がオーバーハングしている。埋土は5層に分層できる。出土遺物は土師器や砥石、曲柄又鍬破片などが出土している（第454図）。所属時期は5世紀後半に属する。

井戸Ｆ１１６８出土遺物（第466図6、第685図3、図版198・307）

土師器甕（466-6）、曲柄又鍬（685-3）などがある。

井戸Ｆ６９０（第455図、図版114）

Ｆ調査区西部のA19h8区で検出した。谷２の肩部に掘り込まれている。長軸2.25m、短軸2.2m、深さ1.65mである。井戸上半部分は擂鉢状を呈するが、下半部分は掘方が真直ぐに落ち、円筒状になる。埋土は６層に分層できる。出土遺物は上位層から須恵器坏身や韓式系土器が、最下層から須恵器提瓶が２個体出土している（図版114b）。出土した須恵器は最下層がII型式１段階に相当し、それより上位層はII型式２段階～３段階に相当するものと考えられる。

井戸Ｆ６９０出土遺物（第465図１～13、図版199）

須恵器、土師器などが出土した。須恵器坏蓋（1～4）、坏身（5・6）、土師器甕（7・8）、須恵器提瓶（9・10）、土師器ミニチュア鉢（11）、鉢（12）、把手付鍋（13）などがある。

井戸Ｆ６２７（第456図、図版198）

Ｆ調査区の北東部、谷２の東部にあたるA19h6、A19h5区で検出した。平面形は長軸1.95m、短軸1.4mの楕円形で、深さは1.2mである。出土遺物は土師器の鉢など（第466図3･4）がある。所属時期は、谷２のｇ層下で検出したことから、５世紀後半に属するものと考えられる。

土坑

土坑Ｆ１１２０（第457図、図版116c～e）

Ｆ調査区の南端部A19b6区で検出した。長軸1.1m、幅0.9mの楕円形の土坑で、深さは0.2mである。土坑南端は溝Ｆ１０６２の肩によって切られている。埋土は６層に分層でき、最上層が灰色粘土で溝Ｆ１０６２の埋土と類似している。最下層は暗灰色粘土にベースの暗緑灰色粘土ブロックが混じる。その間に炭化物を多く含む粘質土と焼土塊を含む粘質土がみられる。土坑内からは鳥足文をほどこした陶質土器が検出された（第457図、図版116c～e）。これは胴部の一部から底部を欠くものの、全体形が復元できる例としては貴重な資料である。鳥足文は部分的に列が乱れるものの、胴部上半に一条めぐらされている（第466図10、図版198）。炭化物層および焼土塊を含む粘質土層はこの陶質土器の口縁部内からも検出されており、これらは土坑内に伴っていたものと考えられる。

また陶質土器に接するように坏蓋が検出されている（第466図11、図版198）。この坏蓋から土坑の所属時期は６世紀前半と考えられる。

土坑Ｆ６８４・Ｆ６８５・Ｆ６８６（第430図）

Ｆ調査区の西半部、A19i8、A19i7区検出した遺構で、全体で長軸9.5m、短軸5m、深さ0.15m

を測る。埋土は灰色粘質シルトを主体とする。出土遺物は須恵器片などがあるが、図示できるものはない。埋土の状況から６世紀後半に形成されたと考えられる。遺構内には他にピットなどは検出されず、性格は不明である。この遺構の下からも５世紀に属する遺構の検出は見られなかったため、付近は遺構の存在しない広場的な性格をもつスペースであった可能性もある。

土坑Ｆ６７９（第458図）

Ｆ調査区中央北よりのA19i7区で検出した長軸1.3m、短軸0.82m、深さ0.2mを測る。埋土は１層で、灰色系の粘質シルトである。最上層から土師器甕（第468図13）が出土している。

土坑Ｆ６２６（第430図）

Ｆ調査区の北東部A19h6区で検出された。長軸3.2m、短軸1.0mを測る。埋土は２層に分層できる。井戸Ｆ６２７と同様に谷２のｇ層下で検出した。規模の大きな土坑であるが、遺物は出土していない。所属時期は５世紀後半に属するものと考えられる。

溝

溝Ｆ１０６２（第459図、図版117c・d）

Ｆ調査区の南東端のA19b5、A19b6区で検出した東西方向の溝である。Ｅ調査区へ取り付く管廊へと拡張した部分で検出したため、溝幅が分かるのは部分的であるが狭い部分で0.7m、広い部分で1.0m、深さは0.5m程度である。東西方向に真直ぐ伸びているとみられる。最深部でT.P.+0.5mまで達し、埋土は上下２層に分かれる。上層は灰色粘土に下層のブロックが混じり、下層は暗灰色粘土にベースの青灰色粘土ブロックが混じる。上層からは須恵器、土師器が出土し、須恵器はII型式２段階～３段階に相当し、この時期の堆積である。下層からは須恵器、土師器が出土し、須恵器はI型式３段階～４段階に相当すると考えられる。溝の掘削は５世紀中頃には行われ、最終的には６世紀後半に埋没したものと考えられる。

溝Ｆ１０６２出土遺物（第467図１～12、図版200）

須恵器・土師器などが出土した。須恵器坏蓋（1）、坏身（2・3・5）、高坏（4）、甕（7）、土師器甑（6）、甕（8・9）、須恵器甕（10～12）などがある。

溝Ｆ１０７５（第459図、図版118a）

Ｆ調査区の南東端のA19b5、A19b6で検出した。溝Ｆ１０６２に切られている。埋土は暗灰色粘土にベースの青灰色粘土ブロックを含む。東西方向から南北方向へ屈曲し調査区の南へと伸びている。溝内からは土師器甕が出土している。溝Ｆ１０６２との切り合い関係から５世紀中頃～後半に属すると考えられる。

溝Ｆ１０７５出土遺物（第466図12・13、図版200）

土師器が出土した。土師器甕（12・13）がある。

溝Ｆ６３４（第460図、図版117b）

Ｆ調査区の中央やや東よりのA19i6区で検出した。溝F633の北東で検出した浅い溝で、幅約1.3m、最深部で0.15mを測る。埋土は4層に分層でき、灰色粘質シルトであり焼土塊や炭化物が面的に広がっていた。出土遺物は須恵器、土師器、製塩土器がある。須恵器はII型式2段階～3段階に相当すると考えられる。

溝Ｆ６３４出土遺物（第468図8～10）

製塩土器、土師器などが出土した。製塩土器（8）、土師器鉢（9）、須恵器甕（10）などがある。

溝Ｆ６３３（第461図、図版117a）

Ｆ調査区の中央東よりA19i6からA19j6区で北北東－南南西方向に検出した。幅は約1.2mを測る。南端は竪穴住居跡Ｆ１３および掘立柱建物Ｆ１０によって切られている。埋土は4層に分層でき、灰色粘土の上層と暗灰色粘質シルトの下層に分けられ、最深部で0.4mを測る。埋土からは焼土塊や炭化物を検出している。出土した須恵器からII型式1段階に相当すると考えられる。

溝Ｆ６３３出土遺物（第468図11・12）

須恵器・土師器などが出土した。須恵器坏蓋（11）土師器鉢（12）などがある。

溝Ｆ６２１（第430図）

Ｆ調査区の北西部のA19h8区で検出した東西方向の溝で、谷Ｆ１に向かって西に開いている。埋土は谷Ｆ１のｄ層を主体とし、ベースである青灰色細粒砂まで掘り込まれている。最下部から円筒埴輪が1個体分出土している。その他、滑石製臼玉1点が出土している。出土した円筒埴輪の時期から6世紀前半頃に属するものと考えられる。

溝Ｆ７２４（第462図）

Ｆ調査区中央の東端のA19j5区で北北東－南南西方向に検出した。幅約1.4m、最深部で0.4mを測る。埋土は3層に分層でき、灰色系の粘質シルトを主体とする。溝の南端付近から土師器高坏、甕、甑等が出土している（第462図）。II型式3段階の掘立柱建物Ｆ１に切られている。所属時期は5世紀後半と考えられる。

溝Ｆ７２４出土遺物（第468図1～7、図版197）

土師器高坏（1～3）、ミニチュア鉢（4）、甕（5・6）、甑（7）などがある。

谷

谷Ｆ２（第430図、図版102・103）

集落域の北側にある浅い谷Ｆ２は、Ｄ調査区の東部で検出された谷部の南側の延長部分である。集落形成以前から微高地に対して低く、また西へと徐々に低くなっている。この相対的に西側に向かってII型式２段階に流路Ｆ５２９が流れ始め、この流路の土砂の堆積作用によって谷Ｆ２は埋没していくことが土層断面から観察される。

谷Ｆ２の堆積層は６層に分けられる。ａ層～ｅ層は間に砂礫を挟む粘土～粘質シルトで、基本的に下位層の小ブロックや砂礫を部分的に含む耕作土である。特にｄ層上面では鍬による耕作痕を、またｅ層上面では畦畔を検出しており、集落間の小面積の低地部分で水田耕作を行っていたことが判明した。ｆ層は均質な粘質シルト～粘土の水性堆積層で、出土遺物からは、このａ～ｆ層がII型式２段階～４段階に堆積したものである。一方、ｇ層は暗灰色の粘質シルトでＩ型式４段階～５段階の遺物を含む。この時期はまだ流路Ｆ５２９が流れていないこともあり、谷の堆積速度は緩慢で、浅い谷とはいえそれほど水気は多くない。井戸Ｆ６２７や土坑６２６などの遺構が形成されたが、遺構の存在しない低平な部分が平面的に広がっていることが特徴である。

この低平な部分はA19g8区付近において北への斜面を挟んで、西へ一段落ち込んでいる。この落ち込み部分には、大溝上層と時期的に対応すると考えられる、黒褐色ないし暗灰色の粘質シルトである谷2g層が谷2f層の下位に堆積しＩ型式４段階～５段階の遺物を含む。流路Ｆ５２９に関係なく元々の地形として存在しており、大溝と関連した入江状の地形を呈していた。大溝上層自体がこの落ち込みに堆積することはなかったものの、入江状の地形が大溝の機能する時期には形成されていたことは興味深い。低平で遺構のない谷Ｆ２と合わせて、物資などの搬入などが行われたエリアであろうか。

谷Ｆ２出土遺物（第507図１～15・17、第672図6、図版296）

須恵器、土師器などが出土した。須恵器坏身（1～6）、甕（7・8）、短頸壺（9）、瑞（10・11）、土師器ミニチュア鉢（12）、甕（13～17）、滑石製臼玉108点（図版248a）、敲石などがある。他に、柱材（672-6、図版296）がある。

流路

流路Ｆ５２９（第430図、図版102・103）

Ｆ調査区のA19h9、A19g7区で検出した自然流路である。北東方面から流れてきた流路で、Ｄ調査区の自然流路Ｄ４７０、またＣ調査区の流路Ｃ４３５３の延長部分である。元々の地形として相対的に低い部分に向かって、北東方向から流れ込んできた自然流路で、最下層の粗粒砂層から検出された須恵器などによりII型式２段階には形成され、その後幾度となく氾濫しながら谷Ｆ２を埋没させている。

出土遺物はII型式２段階の須恵器が中心で、他に土師器甕、壷、滑石製双孔円板（第632図24）、臼玉、砥石、台石などがある。

第６項　各居住域を区画する溝の遺構と遺物

各居住域は溝や傾斜面によって区画されている。北東居住域と南西居住域の間には北西から南東方向の区画溝Ｂ１３０２４０（上部は溝Ｂ１３０６７０）と溝Ａ９５０があり、居住域を画している。北東居住域の南東限を区画するのは溝Ｂ１３０４０６などの斜面上の溝群である。これら調査区南東部の区画溝の全体平面図は第470図に示した。溝Ｂ１３０２４０（溝Ｂ１３０６７０）と溝Ａ９５０からは多量の遺物が出土した。遺物出土状況は第472～479図に分割して図示、土層断面は第480図に図示している。

南西居住域と南東居住域の間には溝Ａ４２８があり、居住域を画している。溝４２８の全体平面図は南東居住域の北限を画する溝Ａ４２９・４３４と合わせて第471図に図示した。

北東居住域と北西居住域は浅い谷状地形により区画されている。谷の最低部には溝Ｄ７６７を検出している。北西居住域の南側を区画するのは溝Ｆ８５６・６２５・６１３、南西居住域の北側を区画するのは溝Ｅ０９１００６で、これら調査区西半部の区画溝の全体平面図は調査区西限の大溝の平面図とあわせて第469図に図示した。溝Ｆ８５６・６２５・６１３の遺物出土状況は第502図に、土層断面は第503図に図示している。溝Ｅ０９１００６の遺物出土状況、土層断面は第501図に図示した。なお、溝Ｅ０９１００６から第504図１～８の遺物が出土している。

区画溝Ｂ１３０６７０（第472図、図版121e～121h）

Ｂ調査区の北西半部のB19b1、B18b10、B18c10、B18d10、B18c9区で検出した。区画溝Ｂ１３０２４０と交差するように北西から南東方向に約20m直線的に走り、終わる。幅1.5m～2.5m、深さ0.4m～0.6mを測った。Ｂ１３０２４０を切っているため、後出のものといえるが、上層（緑灰色シルトをブロック状に含む灰黒色シルト）、中層（緑灰色シルトと黒灰色シルトの互層）、下層（黒灰色シルト）の３層に分かれる埋土のうち、上層はＢ１３０２４０と同時期に埋まっている。

埋土内から須恵器、韓式土器、土師器、滑石製臼玉１点、動物遺存体などが出土した。出土した須恵器はＩ型式４段階に相当するものである。

区画溝Ｂ１３０６７０出土遺物（第487図１～16、第596図、図版209）

埋土内から須恵器、韓式系土器、土師器などが出土した。図示し得たのは17点で、須恵器坏蓋（1）、須恵器坏身（2・3）、須恵器高坏蓋（4）、須恵器無蓋高坏（5）、須恵器壺（6・9）、須恵器瑞（7・8）、須恵器甕（10・11）、製塩土器（12）土師器甕（13～15）、土師器甑（16）、移動式カマド（第596図、図版209）などがある。動物遺存体はウマの下顎第２前臼歯が出土している。

区画溝Ｂ１３０２４０（第473図～第476図、図版119・120）

Ｂ調査区の南西半部のB19a1、B19b1、B18b10、B19c1、B18c10、B18d10、B18d9、B18e10、B18e9、B18f10、B18f9区で検出した。最も遺構の密集するＢ調査区北西半部からＣ調査区にかけ

てひろがる上段と、その南西側に広がる中段の境界となる斜面上を北北西から南南東方向に緩やかな弧を描いて走る溝で、調査区の南西端部からＡ調査区の北西端部に至り、Ａ区では区画溝Ａ９５０となる。区画溝Ｂ１３０２４０から区画溝Ａ９５０の北西半部にかけては、北東居住域と南西居住域の区画溝となっている。南西端部付近で区画溝Ｂ１３０２３９と合流する。なお、（第494図9～13）は区画溝Ｂ１３０２３９から出土した須恵器、土師器、韓式系土器、製塩土器である。

区画溝Ｂ１３０２４０は幅1.3m～3.8m、深さ0.3m～0.6mを測り、埋土は概ね上層（黒灰色シルト）、中層（緑灰色シルトのブロックが混じる黒灰色シルト）、下層（黒灰色粘質シルト）の3層に分層でき、各層から遺物が大量に出土した。掘削に際して出土遺物は上層と中・下層そして最上層（溝の上面を精査した際に検出されたもの）に分けられた。

最上層からは須恵器、土師器、上層からは須恵器、韓式系土器、土師器、U字形板状土製品、石製品などが、中・下層からは須恵器、韓式系土器、土師器、U字形板状土製品、石製品などが出土した。出土した須恵器は中・下層がⅠ型式３段階、上層がⅠ型式４段階～５段階に相当するものである。区画溝Ｂ１３０２４０はⅡ型式１段階２段階には埋没したと考えられる。

区画溝Ｂ１３０２４０最上層出土遺物（第481図1～13）

最上層の埋土からは須恵器、土師器などが出土した。図示し得たのは13点で、須恵器坏蓋（481-1～5）、須恵器坏身（481-6）、須恵器高坏（481-7）、須恵器鉢（481-8）、須恵器甕（481-9～12）、土師器高坏（481-13）などがある。

区画溝Ｂ１３０２４０上層出土遺物（第481図14～50、第482図1～24、第483図1～27、第484図1～7、第633図4、図版201～203、図版247b）

上層の埋土からは須恵器、韓式系土器、土師器、U字形板状土製品、滑石製双孔円板（第633図4、図版247b）、臼玉１点などが出土した。図示し得たのは94点で、須恵器坏蓋（481-14～26）、須恵器坏身（481-27～41）、須恵器無蓋高坏（481-42～49、483-5）、須恵器有蓋高坏（481-50、482-1）、須恵器高坏（482-2～6）、須恵器把手付鉢（482-7・8）、須恵器鉢（482-9）、須恵器甑（482-10）、須恵器壺（482-11）、須恵器甕（482-12～15）、韓式系土器平底鉢（482-16～18）、韓式系土器甕（482-19）、韓式系土器把手付鍋（482-20・21）、土師器把手付鍋（482-22）、土師器鉢（482-23）、土師器椀（482-24）、土師器高坏（483-1～4・6）、土師器壺（483-7～9・19・25）、土師器甕（483-10～18・20～24・26、484-2）、韓式系土器甑（484-1、483-27）、韓式系土器羽釜（484-3）、土師器移動式カマド（484-4～7）などがある。

区画溝Ｂ１３０２４０中・下層出土遺物（第484図8～23、第485図1～23、第486図1～6、第598図3、第639図9、図版203～208・251a）

埋土の中・下層からは須恵器、韓式系土器、土師器、U字形板状土製品、石製品などが出土した。図示し得たのは47点で、須恵器坏蓋（484-8～10）、須恵器坏身（484-11・13）、須恵器高坏蓋（484-12）、須恵器有蓋高坏（240-4-14・15）、須恵器無蓋高坏（484-16・17）、須恵器壺（484-18）、韓式系土器平底鉢（484-19・20）、土師器壺（484-21、485-16～18）、韓式系土

器鉢（484-23）、土師器高坏（484-22、485-1 ～ 14）、土師器鍋（485-15）、土師器甕（485-19 ～ 23、486-1 ～ 5）、韓式系土器甑（486-6）、土師器移動式カマド（598-3）、U字形板状土製品、砥石（639-9、図版 249a）などがある。

区画溝Ａ９５０（第 477 図～第 480 図、図版 123・124）

Ｂ調査区南西部から続く区画溝Ｂ１３０２４０と同一の遺構である。Ａ調査区北西側の、B18f10 から B18g8 区で検出した。Ａ調査区での検出状況は、区画溝Ａ４２８の北西突出部から西方向に伸び、円弧を描いて 90°北に方向を変える。

溝の幅は、5.0m ～ 6.0m、深さ 0.6m を測る。断面の形状は浅いU字状を呈するが、深さ 0.4m の位置でテラスを作り、二段掘りとなる。下段の溝幅 2.0m、深さ 0.2m を測る。埋土は大別して 3 層に分かれ、上段の上・中層は炭の混じる黄灰色～オリーブ黒色粘土、下層はオリーブ黒色シルト質粘土である。

溝Ａ９５０出土遺物（第 488 図～第 493 図、第 594 図 1、図版 201 ～ 208）

上層埋土から須恵器坏、高坏、瓿、甕、鉢、土師器鉢、高坏、壺、甕、甑、製塩土器（488-1 ～ 32・34 ～ 46、489-1・4 ～ 10、490-1 ～ 4・8 ～ 11・14、図版 201・202・203・204）、韓式系土器羽釜（490-13）、韓式系土器移動式カマド（594-1）、U字形板状土製品、滑石製臼玉等多数の遺物が出土した。中層から須恵器坏蓋、壺、土師器甕が出土した（489-13 ～ 21、図版 205・206）。下層からは須恵器坏蓋・身、高坏、壺、土師器高坏、甑、鉢、土師器壺、甕（491-1 ～ 21、492-1 ～ 7・9 ～ 17、493-1 ～ 14、図版 205・206・207・208）、韓式系土器甑（493-13、図版 208）、韓式系土器平底鉢（492-14・15）、韓式系硬質土器高坏（491-18、図版 205）、滑石製臼玉等が出土した。出土した須恵器は上層がⅠ型式 4 ～ 5 段階（少量のⅡ型式 1 段階を含む）、中・下層がⅠ型式 3 段階に相当するものである。

また、下層埋土から多量の遺物とともに、B18g9、B18f9 の 2 区に跨ってウマの頭蓋骨（図版 266c）、下顎骨、臼歯等が多数出土した（第 477 ～ 479 図、図版 122・123、原色図版 13）。

南東側斜面の溝群（第 470 図）

北東居住域の南東側の斜面上をほぼ平行に走る 5 条の溝を検出した。溝Ｂ１３０４０６、土坑Ｂ１３０４１７、溝Ｂ１３０４１９、溝Ｂ１３０７６２、溝Ｂ１３０１０７がこれにあたる。出土遺物から判断する限り、これらの溝は同一時期のものとは認められず、それぞれが異なる時期の区画溝であったと考えられる。また、これらの溝は、すべて同じ地点で一部途切れており、この部分が北東居住域への入り口であったと考えられる。

溝Ｂ１３０４０６（第 470 図）

Ｂ調査区の中央部の B18b7、B18b8、B18c8 区で検出した。幅 0.3m ～ 1.0m、深さ 0.15m ～ 0.25m

を測った。埋土内から須恵器、土師器などが出土した。

溝Ｂ１３０４０６出土遺物（第496図１～５）

埋土内から須恵器、土師器などが出土した。図示し得たのは５点で、須恵器坏蓋（1・2）、須恵器坏身（3）、須恵器高坏（4）、須恵器甕（5）などがある。

溝Ｂ１３０４１９（第470図）

Ｂ調査区の中央部のB18c8、B18c9区で検出した。幅0.3m～1.0m、深さ0.15m～0.25mを測った。埋土内から須恵器、土師器などが出土した。

溝Ｂ１３０４１９出土遺物（第496図22～28）

埋土内から須恵器、土師器などが出土した。図示し得たのは７点で、須恵器坏蓋（22）、須恵器坏身（23）、須恵器高坏（24）、須恵器甕（27）、土師器甕（25・26）、土師器甑（28）などがある。

溝Ｂ１３０１０７（第470図）

Ｂ調査区の中央部のB18a6、B18b6、B18b7区で検出した。幅1.0m～1.5m、深さ0.2mを測った。埋土内から須恵器、土師器などが出土した。

溝Ｂ１３０１０７出土遺物（第496図30～35）

埋土内から須恵器、土師器などが出土した。図示し得たのは６点で、須恵器坏蓋（30）、須恵器甕（32）、須恵器脚部（33）、土師器鉢（31）、土師器甕（34・35）などがある。

溝Ａ９５２（第470・478図）

区画溝Ａ９５０の南西テラス、Ａ調査区北西のB18g9区で検出した。幅0.5m、深さ0.05mを測る。断面の形状は浅いU字状を呈する。埋土から須恵器坏、壺が出土した（第495図16・17）。

土坑Ａ１４８１（第470・478図）

区画溝Ａ９５０の底、Ａ調査区北西のB18g9区で検出した。一辺1.1mの略方形の平面形を呈する土坑で、深さ0.2mを測る。埋土から土師器鉢が出土した（第495図15）。

土坑Ａ１４８２（第470・478図）

区画溝Ａ９５０の底、Ａ調査区北西のB18g9区で検出した。長軸1.3m、短軸0.9mの楕円形の平面形を呈する土坑で、深さ0.3mを測る。

埋土から土師器甕、韓式系土器平底鉢が出土した（第495図13・14）。

土坑Ａ１４８３（第477図）

区画溝Ａ９５０のテラス、Ａ調査区北西のB18f9区で検出した。長軸2.0m、短軸1.7mの略

半円形の平面形を呈する土坑（馬埋葬土坑）で、深さ 0.3m を測る。

埋土からウマの頭蓋骨、左右下顎骨（図版 266a）が出土した。

区画溝Ａ４２８（第 471 図、図版 122）

Ａ調査区の中央部北側から南東方向にかけての、B18g7 から C18b2 区で検出した。南東居住域と南西居住域を区画する溝である。溝の主軸は北西－南東方向を示し、直線的に伸びる西岸は、調査区中央やや北側で西方向に向きを変え、区画溝Ａ９５０を横断する形で北に向かい、最後は東に向きを変える。東岸の南東部には土坑群が並ぶが、直線的に北西に向かって延び、区画溝Ａ４２９と交差して西へ向きを変え、不明瞭ではあるが北に回り込んだ西岸の延長部分とともに北岸を形成するものと考えられる。

溝の幅は、調査区南東隅で 30m、北東側で 20m を測る。断面の形状は浅いＵ字状を呈し、深さ 0.8m ～ 1.2m を測り、北西から南東方向に緩やかに傾斜する。埋土の堆積状況は、最上層に灰オリーブ粘質土が厚さ 0.4m で溝全体に堆積する。上層除去後、幅 10m、深さ 0.3m で中層が堆積し、最下層は一段下がった状況で深さ 0.1m ～ 0.2m の溝を形成する。埋土は、炭化物が多量に混じった黒色シルト質粘質土である。

埋土から須恵器坏蓋、坏身、鉢、高坏、壺、甕、韓式系土器羽釜・甕・甑・移動式カマド（第 497 図１～ 23、第 593 図 1)、土師器高坏、壺、甕、甑（第 498 図１～ 24)、ウシの歯（図版 269b-3)、大型哺乳類の骨片等が出土した。出土する遺物の時期幅は広いが、出土した最も新しい須恵器は II 型式２段階に相当するものである。中・下層から須恵器高坏、壺、甕、韓式系土器甕等（第 498 図)、土師器高坏、壺、甕（第 498 図）が出土した以外にも、滑石製双孔円板（第 633 図 1、図版 247b)・有孔円板（第 633 図 2)・臼玉１点、鉄製刀子（第 642 図 7、図版 254)、土玉（第 629 図 3、図版 248e)、砥石（第 636 図１・２・6、図版 249)、敲石、椀形滓等が出土した。出土した須恵器はＩ型式３～４段階に相当するものである。

当区画溝の中・下層出土遺物の総量は、隣接する集落規模から考えて、極めて少量である。このことは、当区画溝に土器が廃棄されないよう管理されていた状況を示すものと考えらる。

区画溝Ａ４２９（第 471 図）

Ａ調査区の北西側の B18f3 から B18g5 区で検出した。南東居住域の北限を東西方向に区画する溝である。区画溝Ａ４２８の北東コーナー部から北東方向に伸び、東に向きを変えた後、端部を方形にして止まる。幅 2.2m ～ 6.0m、深さ 0.6m を測る。断面の形状は浅いＵ字状を呈する。埋土は大別して３層に分けられ、上･中層は炭の混じる灰色粘土、下層は灰色シルト質粘土である。

埋土から、須恵器坏、高坏、甕、台付把手付鉢、土師器高坏、甕、片口鉢、製塩土器、韓式系土器鉢、韓式系（硬質）土器甕、平底鉢が出土した（第 499 図１～ 23、図版 210)。韓式系（硬質）土器甕（499-23）は溝Ａ４３４・区画溝Ａ４２８出土の土器片と接合したものである。また、

滑石製臼玉１点も出土した。

溝Ａ４３４（第471図）

Ａ調査区の北端東側で、B18f2からB18f6区で検出した。区画溝Ａ４２９とともに南東居住域の北側を区画する。

埋土から須恵器坏、高坏壺、土師器高坏、甕、鉢、製塩土器、韓式系土器平底鉢、甑、Ｕ字形板状土製品等が出土した（第500図１～30、図版210）。また滑石製勾玉（第623図5、図版243b）・双孔円板（第633図５・6、図版247b）・臼玉８点、砥石（第636図5、図版250b）、木製品、ウマの肩甲骨、歯、大型哺乳類の骨片等も出土した。

土坑Ａ９３０（第470図）

居外、Ａ調査区北側のB18f8区で検出した。径0.4mの円形の平面形を呈する土坑である。深さ0.25mを測る。埋土から土師器高坏が出土した（第495図19）。

土坑Ａ９３３（第470・479図）

居外、Ａ調査区北側のB18g8区で検出した。長軸0.85m、短軸0.8mの楕円形の平面形を呈する土坑である。深さ0.45mを測る。埋土から土師器壺（丹塗り磨研）が出土した（第495図18）。

区画溝Ｆ６１３・Ｆ８５６（第469・502図、図版125）

Ｆ調査区北西端のA10g8、A19g9区で検出した。区画溝Ｆ６２５の南で平行するように検出された。溝Ｆ８５６は暗灰色系の粘質シルトを埋土とする溝であるが、それを切るように、灰色粘質シルトを埋土とする溝Ｆ６１３が流れている。溝Ｆ８５６から須恵器、土師器が出土している。出土須恵器からＩ型式２段階に相当すると考えられる。また溝Ｆ６１３は須恵器の他に馬とみられる獣骨も出土しており、II型式２段階～３段階に相当すると考えられる。共に溝Ｆ６２５と同様にＤ調査区で検出された北西居住域を区切る役割をもっていると考えられる。

区画溝Ｆ８５６出土遺物（第505図１～6、図版211）

区画溝Ｆ８５６からは、土師器、須恵器などが出土した。土師器甕（1・2）、土師器甕（3）、須恵器坏蓋（4）、蓋（5）、甕（6）などがある。

区画溝Ｆ６１３からは須恵器が出土したが、図示し得るものはなかった。

区画溝Ｆ６２５（第502図、図版118b）

Ｆ調査区北西端のA19g8、A19g9区で検出した。南西から北東にかけて弧状に巡る、北西居住域と西居住域を区画する溝である。北の肩部が調査区になるため溝幅は不明である。深さは約0.4mを測る。埋土は暗灰色粘質シルトで土師器、須恵器系土器、須恵器、製塩土器、Ｕ字形板

状土製品などが出土している。出土した須恵器はＩ型式４段階～５段階を主体とするが、一部Ｉ型式３段階に属するものも含まれる。

区画溝Ｆ６２５出土遺物（第505図７～24、第506図1、図版211）

土師器、須恵器系土器、須恵器、製塩土器、Ｕ字形板状土製品などが出土した。土師器高坏（7）、須恵器系土器高坏（8）、土師器ミニチュア鉢（9）、須恵器高坏蓋（10）、須恵器坏蓋（11）、坏身（12）、土師器甕（13･14･21～24）、須恵器高坏（15）、壺（16･17）、瓶（18･19）、器台（20）、甕（506-1）などのほかに、製塩土器、Ｕ字形板状土製品などもある。

第７項　集落西限の大溝と出土遺物

集落の西を限定する大溝がＥ調査区とＦ調査区で検出された。Ｅ調査区の大溝Ｅ０９０００１、Ｆ調査区の大溝Ｆがこれに相当する。さらに、Ｄ調査区の大溝Ｄ９００、Ｈ地区の大溝Ｈ１１も一連のものの可能性がある。大溝全体の平面図は第469図に示し、さらにＨ地区の大溝Ｈ１１で検出した輪鐙等の遺物出土状況（第517図～521図）、Ｄ調査区の大溝Ｄ９００の遺物出土状況（第512図～515図）、Ｅ調査区の大溝Ｅ０９０００１で検出した鑣轡等の遺物出土状況（第508図）、Ｆ調査区の大溝Ｆで検出した鞍等の遺物出土状況（第509図）などを個別に示した。

大溝Ｅ０９０００１（第508図・第511図、図版138～140）

Ｅ調査区の中央部を緩く弧を描きながら南北に縦断する状態で検出された。最長部分の北壁付近で幅約19m、最短部分の中央付近で幅約9.5mを測った。検出面の高さは溝の東側肩部がT.P.1m～1.3m、西側肩部がT.P.±0mで、約1.0mの比高差がみられた。東側肩部と溝底との比高差は、最深部で1.4m、最浅部で0.9mを測った。

大溝の東側には一面に集落遺構が認められたが、西側には遺構がまったくみられなかったことから、大溝Ｅ０９０００１はＦ調査区の大溝Ｆと一連の、集落の西端を限定する性格を持つ大溝であると考えられる。

Ｅ調査区中央部付近に、他と比べて溝幅が狭い場所があるが、この部分は東側肩部が張り出す形状を呈しているため溝幅が狭くなっている。そして溝の深度も0.9mで他の部分と比べて浅く、張り出し部がなんらかの意図のもとに形成されていると考えられる。そして付近に１間×１間の掘立柱建物もみられることから、この部分は集落への西側の出入口であったと思われる。

大溝Ｅ０９０００１は場所によって土色や土質が異なってはいるが、下層、中層、上層、最上層の順に大別され（第511図）、各層からの出土遺物から、大溝が時を経て徐々に埋没していったことがわかる。下層は微砂を含む黒灰色粘土と暗緑灰色粘質シルト、黒灰色あるいは黄灰色の砂など、中層は黒灰色粘土と暗茶褐色粘質土、植物遺体を含む暗灰色粘質シルトと灰黄色微砂の互層および暗緑灰色粘質シルトなど、上層は暗灰色粘土と植物遺体を含む暗灰色粘質シルト、暗

茶褐色砂質土と灰黒色粘土ブロックが混じる暗茶褐色砂質土などからなり、各層から須恵器、土師器、陶質や軟質の韓式系土器などの土器類、土製品、鉄製品、石製品、木製品、鹿角製品などが大量に出土した。出土した須恵器は下層がＩ型式２段階以前、中層がＩ型式３段階、上層がＩ型式４段階～II型式１段階に相当するものであった。出土遺物から、下層が５世紀前半、中層が５世紀中葉、上層が５世紀後半～６世紀初頭に埋まった層であることが判明した。最上層は大溝Ｅ０９０００１が埋没した後に覆うように堆積した層で、場所によってオリーブ茶色砂質土あるいは灰黄色や灰白色の砂層となっていた。出土遺物から最上層は６世紀前半に堆積した層と考えられる。この段階で大溝Ｅ０９０００１は埋没し、1m程の比高差を有する斜面に変化している。

大溝Ｅ０９０００１最上層出土遺物（第524図、第525図、図版212・258）

最上層の埋土から須恵器、土師器などが出土した。図示し得たのは42点で、須恵器坏蓋（524-1～18）、須恵器坏身（524-19～29）、須恵器系土器高坏（524-30～32）須恵器無蓋高坏（524-33）、須恵器瑳（525-1～6）、須恵器壺（525-7）、炉壁片（図版258-7）、鞴の羽口（図版258-5・6）などがある。

大溝Ｅ０９０００１上層出土遺物（第526図～第531図、第544図、第545図5・9～14、図版212・216・218）

上層の埋土から須恵器、瓦質土器、韓式系土器、土師器などが出土した。図示し得たのは121点で、須恵器坏蓋（526-1～20、544-1～7）、須恵器坏身（526-21～40・42・43・45～47、544-8～13）、陶質土器坏身（526-41・44）、須恵器高坏蓋（527-1～6）、須恵器有蓋高坏（527-7・8）、須恵器無蓋高坏（527-9～13、544-16・17）、須恵器壺（527-14・15・19・21・22・30～32、544-15・19・20、530-2）、須恵器瑳（527-16～18・20・23・24、544-14）、須恵器甕（527-25～29、528-1～16、529-1～3、530-1・2・4～6、531-1・2、544-20）、須恵器鉢（530-3）、土師器高坏（544-21）、土師器坏（544-22）、土師器甕（544-23・25・26・28～31）、土師器壷（544-24）、土師器鉢（544-27）、須恵器系土器高坏（544-18）、製塩土器（545-5・9～14）などがある。

大溝Ｅ０９０００１中層出土遺物（第532図1～38、第533図1～26、第534図1～34、第535図1～33、第536図1～10、第545図1～4・6～8・15・19、図版213・215）

中層の埋土から須恵器、瓦質土器、韓式系土器、土師器、黒色研磨土器などが出土した。図示し得たのは144点で、須恵器坏蓋（532-1～9）、須恵器坏身（532-10～28）、須恵器有蓋高坏（532-29～31）、須恵器無蓋高坏（532-32～35）、須恵器高坏（532-36～38）、須恵器鉢（533-1・2・4・5）、須恵器把手付鉢（533-3・6～8）、須恵器鳥形瑳（533-9）、須恵器瑳（533-10～12・15・16）、須恵器壺（533-13・14・22～24）、須恵器器台（533-17～19）、須恵器甕（533-20・21・225）、陶質土器壺（533-26）、土師器鉢（534-1～17、535-1～9）、土師器高坏（534-18～27）、須恵器系土器（534-28～32）、黒色研磨土器高坏（534-33）、黒色研磨土器壺（534-34）、土師器羽釜（535-8・9）、土師器壺（535-10・11、535-15・16）、土師器甕（535-17～33、

536-1 ～ 5)、韓式系土器鉢（535-12 ～ 14)、土師器甑（536-6･7)、韓式系土器カマド（536-10)、製塩土器（545-1 ～ 14)、鳥足文タタキの甕（545-19）などがある。

大溝Ｅ０９０００１下層出土遺物（第537図1～50、第538図1～26、第539図1～6、第540図1・2、第541図1～23、第542図1～29、第543図1～26、第545図16～18、図版214・217・218～220)

下層の埋土から須恵器、瓦質土器、韓式系土器、土師器、黒色研磨土器などが出土した。図示し得たのは254点で、須恵器坏蓋（537-1 ～ 16・18)、須恵器高坏蓋（537-17)、須恵器坏身(537-19 ～ 29・31 ～ 39)、須恵器鉢（537-30)、須恵器有蓋高坏（537-42・46)、須恵器脚付壺(537-47)、須恵器無蓋高坏（537-40 ～ 47・ 49・50)、須恵器系土器無蓋高坏（537-48)、須恵器高坏（538-1 ～ 5)、須恵器鉢（538-6 ～ 8・12)、須恵器把手付鉢（538-9・10・13)、須恵器壺(538-11･12･21･22)、須恵器甕（538-14 ～ 20)、須恵器樽型甕（538-23)、須恵器器台（538-24)、須恵器甑（538-25)、須恵器甕（538-26、539-1 ～ 6)、陶質土器甕（540-1・2)、韓式系土器平底鉢（541-1 ～ 10)、韓式系土器甕（541-11・14・16 ～ 18・20)、韓式系土器羽釜（541-13)、瓦質土器甕（541-15･19)、韓式系土器甑（541-21 ～ 23)、土師器坏（542-1 ～ 7)、土師器高坏（542-8 ～ 26)、須恵器系土器（542-27 ～ 29、製塩土器（543-1)、土師器壺（543-2 ～ 8・11・14・17)、土師器甕（543-9・10・12・13・15・16・18 ～ 26)、鳥足文タタキの鉢（545-18）などがある。

大溝Ｅ０９０００１からは、以上の土器の他に移動式カマド、土製品、埴輪類、鉄製品、石製品、木製品、鹿角製品、玉類、鉱滓（図版257-6・7)、動物遺体等が大量に出土している。

Ｕ字形板状土製品は、主に上層と中層の埋土から出土した。図示し得たのは第606図2（図版241・242）である。

移動式カマドは、図示し得たものが土師質4点（599-1・2、601-1・2）と、韓式系土器カマド（587 ～ 592・594-2・597-1、図版224）5点がみられた。

土製品は6点を図示した。土師質当て具（545-15、図版220)、土師質土錘（545-16・17、図版258)、土製紡錘車（626-1・5・14、図版245）などがある。

埴輪類は土師質の形象埴輪、土師質の円筒埴輪、須恵質の円筒埴輪などがある。図示し得たのは23点で、土師質形象埴輪（581-1 ～ 6、図版234)、土師質円筒埴輪（581-8・9 ～ 12、582-1 ～ 4・6 ～ 11、図版234・235）などがある。

鉄製品は21点を図示した。曲刃鎌（641-4 ～ 8、図版252)、刀子（642-4 ～ 6、643-3、図版254)、轡（644-1、図版255)、立聞金具（644-3・5、図版255)、環状金具（644-6、図版255)、鉄鏃（645-3 ～ 6・12 ～ 14、図版256）などがある。

石製品は25点を図示した。石製紡錘車（625-4･13･14、図版244)、双孔円板（632-1･4 ～ 8･11 ～ 13、図版247a)、有孔円板（632-23)、砥石（634-1・3・5・7 ～ 9、635-2・3・5 ～ 8、図版249 ～ 251)、台石などがある。また、図示していないが、他に台石、敲石なども出土した。

木製品は99点を図示した。曲柄平鍬（651-1・4、図版276)、直柄又鍬（651-2、図版276)、

鋤柄（653-3、図版278）、曲柄又鍬（651-5、図版276）、曲柄鍬（651-8～10、図版276）、鎌形木製品（652-1）、鎌柄（652-2、図版276）、横槌（652-9・10、654-1・3、図版277・279）、曲物底板（661-4・5、図版286）、鋤柄把手（653-4、図版278）、一木平鋤（653-7、図版278）、柄（653-8、図版278）、大足横桟（654-5、図版279）、大足横枠（654-6、図版279）、目盛板（654-8）、木錘（654-10、655-3～6、図版280）、掛矢（656-3）、斧柄（656-4・5、図版281）、刀子柄（656-6、図版281）、台（657-11、図版282）、枠（657-1･8、図版282）、紡錘車（657-4、図版282）、挿入部留具（657-5、図版282）、織機（657-9）、槽（660-1・2・4・5、図版285～286）、椅子脚（661-9・10、図版287）、鞘（662-2、図版287）、柄装具（662-6、図版288）、刀形（663-5・6・8、図版288）、剣形（663-4・7、図版288）、舟形（663-10・11、図版289）、衣笠腕木（663-13、図版289）、箱（661-3・6、図版286）、コップ形容器（661-1、図版286）、盤（661-2、図版286）、杓子状木製品（666-5、図版291）、琴板（667-1～3、図版292）、筑状弦楽器（668-1、図版292）、下駄（669-1・2、図版293）、背負子（669-4、図版293）、火鑽臼（669-9、図版293）、舷側板（671-1・3～5、図版295）、隆骨（671-6、図版295）、楔？（673-6）、建築部材（672-2・11、図版296）、垂木（672-9、図版296）、緯打具（678-2、図版300）、井桁（673-1、図版296）、杭（673-4・5、図版296）、有頭棒（674-9、図版297）、用途不明品（674-10・11、675-2・3・4・6、676-1～3・7、677-10、678-1～3、679-2、図版297・298・299・300・301）、加工材片（677-7・8、図版299）など、多数が出土した。

鹿角製品は６点を図示した。鑣（644-2・4、図版255）、刀子柄（659-3）、柄頭（647-2、図版260）、鞘尻（647-3、図版260）などの製品に加えて、材料となる鹿角（648-6、図版262）もみられた。

玉類には瑪瑙製の勾玉（623-10、図版243b）、土玉（629-02）滑石製臼玉７点などがある。

動物遺存体には、ウマ・ウシを始めとする多種の動物の骨歯があり、最上層から下層までの各層から出土している。そのうち最上層から出土した動物遺存体にはシカ（図版270a）・ウマなどがあり、上層からはウマ・シカなどが、中層からはイノシシ・ウマ（図版268a-1、268a-3、268a-4、268a-6、269a-9）・シカ（図版270a-7、270a-8）・ウシ（図版269b-1）・イヌ（図版271-1、271-4）などの哺乳類に加えて、鳥類のキジ（図版274a-8）や、魚類もみられた。下層からはシカ（図版270a-2、270a-9）・イノシシ（図版270b-2）・ウマなどがみられた。また、これらの他に肩口部分からウマ（図版266b）･イノシシなどが、層位は特定できなかったがシカ（図版262a-3、262a-5）・ウマ（図版268a-5、268b-5、268b-6）・イヌなどの哺乳類や、魚類のサメも認められた。これらの他にウシかウマかの二者択一の資料や哺乳類とのみ確定されたものを加えると、大溝Ｅ０９０００１からは180点を超える動物遺体が出土した。

谷Ｆ１・大溝Ｆ（第509図～第511図、図版102）

西居住域の西側は、西へ落ちる谷状の地形となっており、これを谷Ｆ１とした。検出面は

T.P.1.2m である。谷 F1 の最下部は、北北西－南南東方向に直線的に溝が掘削されていた。これはＥ調査区で検出された大溝Ｅ０９０００１およびＤ調査区大溝Ｄ９００、さらにはその北西に位置する下水竪坑地区で検出された大溝Ｈ１１と同一のもので、集落域の西端を限るものである。本調査区では東の肩部が調査区外におよぶため溝幅は確定できていない。

谷１の堆積層はａ～ｈ層に分けられる（第 511 図）。各層は暗灰～青灰色、もしくは黒褐色系のシルト～粘質シルトで、間に砂礫層を挟む。また谷２埋土とは異なり、耕作土のように下位層の小ブロックをあまり含まない水性堆積層である。出土遺物から、ａ～ｅ層は TK10 ～ TK43 段階に相当し、f･g 層は II 型式１段階～２段階、ｈ層およびｇ層下位の砂礫層は II 型式１段階に相当する。下位の大溝が埋没した後、微高地上に集落域を形成しながらも谷Ｆ１は徐々に埋没が進行している、湿地状の環境であったことが、土壌分析の結果から明らかになっている。

大溝Ｆの堆積層は、概ねＥ調査区大溝Ｅ０９０００１の堆積層と共通している。堆積層は上･中･下層に分けられるが、Ｅ調査区と比べ下層の堆積とその分布範囲は一部分であった。各層の土質とその時期は、上層が黒褐色粘質シルトでＩ型式４～５段階、中層は２層に分けられ中層ａが暗青灰色シルトでＩ型式３段階、中層ｂは暗灰色粘質シルトでＩ型式１段階～２段階である。下層は古墳時代中・後期遺構面のベ－スである青灰色シルトブロックを含む灰色粘質シルトで、須恵器の出土をみないがＥ調査区の状況からＩ型式１段階およびそれ以前であると考えられる。

谷Ｆ１および大溝Ｆからの出土遺物は、須恵器、土師器、韓式系土器、木製品、鉄製品、鹿角製品、玉類や石製品、動物遺体など多岐にわたる。

谷Ｆ１出土遺物（第 550 図、第 551 図、第 603 図 1、第 674 図 7、第 677 図 1、図版 297）

須恵器、土師器、韓式系土器、須恵器系土器、滑石製臼玉 109 点などが出土した。須恵器坏蓋（550-1 ～ 13）、坏身（550-14 ～ 27）、高坏（550-28・30・31）、高坏蓋（550-29）、把手付鉢（551-1）、壺（551-2 ～ 6）、甕（551-7）、韓式系土器甑（551-8）、須恵器系土器高坏（551-9）、土師器鉢（551-10・13）、須恵器鉢（551-11）、製塩土器（551-12）、韓式系土器壺（551-14）、土師器高坏（551-15）、甕（551-16・17）、把手付鍋（551-18）、移動式カマド（603-1）、韓式系土器甑（551-19・20）などがある。また、これらの土器のほかに、板材（677-1）、有頭棒状木製品（674-7、図版 297）、ガラス玉（分析編第３章図版 1-F1 ～ 4）、管玉（628-8・15・17・19、図版 243a）、双孔円板（632-17・18、図版 247a）、砥石、台石が出土している。動物遺存体にはウマ、ウシ、トリなどがある。

大溝Ｆ上層出土遺物（第 552 図 2 ～ 12・15・17・18・20 ～ 34・36 ～ 39、第 553 図 10 ～ 20、第 554 図 1 ～ 5、第 555 図 1、第 556 図 1 ～ 35、第 557 図 1 ～ 8、図版 216・217、223）

大溝Ｆ上層からは、須恵器、土師器、韓式系土器、須恵器系土器、製塩土器、木製品、鉄製品、鹿角製品、玉類や石製品、動物遺存体などが大量に出土している。須恵器坏蓋（552-2 ～ 10・29 ～ 31）、高坏蓋（552-11・12・15）、坏身（552-17 ～ 28・32・33）、高坏（552-34・36 ～ 39）、壺（553-16、554-1 ～ 4）、鉢（553-10･11）、甑（553-12）、把手付鉢（553-13）、器台（553-14）、

甕（553-17 ～ 19、555-1）、提瓶（553-20）、製塩土器（556-1 ～ 7）、土師器ミニチュア鉢（556-8・9）、鉢（556-10・11・15・17・18・29・30）、須恵器系土器坏（556-13）、坏蓋（556-14）、土師器直口壺（556-16・22）、高坏（556-19 ～ 21・35）、甕（556-23 ～ 28、557-1・3・4・7）、韓式系土器甕（556-31・32）、鍋（556-33）、壺（556-34）、甑（557-8）などがある。

大溝Ｆ中層出土遺物（第 552 図 1・16、第 553 図 1 ～ 6・8・9、第 558 図 1 ～ 24、第 559 図 1 ～ 33、第 560 図 1 ～ 23、第 561 図 1 ～ 10、図版 214・215・219、221 ～ 223、226）

大溝Ｆ中層からは、須恵器、土師器、韓式系土器、製塩土器、木製品、鉄製品、鹿角製品、玉類や石製品、動物遺存体などが大量に出土している。須恵器坏蓋（552-16、553-3 ～ 5）、高坏蓋（553-7）、高坏（553-6・8）、壺（553-1・2）、把手付鍋（553-9）、鉢（553-10・11）、甕（554-5）、製塩土器（560-3・4）、鉢（559-1 ～ 8、560-5・9・10）、土師器高坏（559-9 ～ 33）、甕（560-6 ～ 8・11・14 ～ 21、561-1 ～ 10）、韓式系土器甕（558-16 ～ 18）、壺（558-19・20）、黒色研磨土器高坏（558-1 ～ 4・6）、壺（558-5）、鉢（558-7）、韓式系土器平底鉢（558-8 ～ 15）、甑（558-20・22 ～ 24）、土師器小形丸底壺（560-1・2）、壺（560-12・13・22・23）などがある。

大溝Ｆからは、以上の土器類のほかに、埴輪類、Ｕ字形板状土製品、移動式カマド、鉄製品、木製品、鹿角製品、玉類・石製品、鉱滓などが出土している。円筒埴輪（583- 1、図版 234）、Ｕ字形板状土製品（第 622 図、図版 240）、刀子（643-4・5、図版 254）、鑿（643-6、図版 255）などの鉄製品、曲柄平鍬（651-3・7、図版 276）、鎌柄（652-4）、竪杵（652-5、図版 276）、横槌（652-6、図版 277）、反柄（653-5、図版 278）、柄（653-9、図版 278）、目盛板（655-9、図版 281）、斧柄未製品（656-2、図版 281）、枠（657-7、図版 282）、台（658-1・2、図版 283）、槽（659-1・2、図版 284）、曲物底板（661-7）、椅子（661-8、図版 287）、柄頭（662-3、図版 287）、鞘尻（662-4、図版 288）、斎串？（663-2）、鏃形（663-3、図版 288）、舟形（663-12、図版 289）、鞍（665-1、図版 290）、サシバ形（666-1、図版 291）、ササラ状（666-2、図版 291）、背負子（669-5 ～ 7、図版 293）、アカ取り（670-1・2、図版 294）、蓋（679-3、図版 301）、建築部材（672-3 ～ 5、図版 296）、柱材（672-1・7、図版 296）、扉材（672-10、図版 296）、杭（673-2・3・7）、板材（677-2・11）、加工残材（677-3）、不明（673-8、674-1・3・14、675-1・7、676-4・5、678-5 ～ 7・9・11・14、679-1、図版 297 ～ 301）などの木製品、鹿角製の柄頭（647-1、図版 260）、滑石製勾玉（623-3、図版 243b）、ヒスイ製勾玉（623-9、図版 243b）、石製紡錘車（625-3、図版 244）、土製紡錘車（626-11、図版 245）、管玉（628-1・16・18、図版 243a）、双孔円板（632-3・16、図版 247a）、有孔円板、鉱滓（図版 257-8）、砥石 3 点（第 635 図 4）、敲石などの石製品がある。

動物遺存体は上層と中層から出土しており、上層からはイヌ、ウマなど、中層からはシカ、イヌ（図版 272a-4）、カラス（図版 274a-8）、ウマ、イシガイなどがある。

大溝Ｄ９００（第 350 図、第 512 図～第 516 図、図版 132・133、原色図版 14b）

Ｄ－１調査区の西端、A20e1 ～２区、A20f1 ～２区で検出した。西肩は西側の調査範囲外に広がっているが、内側に弧を描くように北北西から南東に走向する幅６ｍ以上、深さ 1.47m 以上の大溝である。北西約 14m に位置するＨ地区の大溝Ｈ１１と同一の遺構である。東肩に沿うようにして 10 ～ 30㎝間隔に杭を打ち込み、簡易的な護岸施設を持つことから、人為的に管理されていた遺構であることがわかる（第 515 図、図版 133a）。

埋土は、溝中の土層の堆積状況から大きく７層に分けられる（第 516 図）。各層中より遺物は出土しているが、とくに５層、６層中には多量の土器とともに木製品、動植物遺存体が良好に遺存していた。そのため各層中にも玉類などの微細な遺物が含まれている可能性も十分に考えられた。そこで肉眼で発掘中に採取することが困難な遺物については採取エラーをわずかでもフォローするため土壌をコンテナ７杯分ずつ採取し、水洗選別を行った。その結果、後述するような玉類や小動物などの微細な遺物を多く得ることが出来た。

土層の堆積状況から、流路としての流れはほとんどなく、よどんだ状況で遺物は堆積したものと思われる。各層から出土した土器から、１～２層は６世紀中頃～後半（II 型式１段階～ II 型式３段階）、３～４層は５世紀後半から６世紀中頃（I 型式５段階～ II 型式２段階）、５層は５世紀中頃から後半（I 型式２段階～ I 型式５段階）、６層は５世紀前半から中頃（I 型式２段階～ I 型式３段階）、７層は５世紀前半以前（I 型式２段階以前）と考えられる。

なお、大溝Ｄ９００の１～２層はＨ地区大溝Ｈ１１の１層、３～４層は２層、５層は３層、６層は４層、７層は５層にそれぞれ対応する。

大溝Ｄ９００出土遺物

須恵器、土師器、製塩土器、韓式系軟質土器、韓式系硬質土器、移動式カマド、筒状土製品、木製品、土製品、ガラス玉、滑石製玉類、石製品、鉄製曲刃鎌、骨角製品、動物遺存体、植物遺存体等が出土している。

須恵器（第 562 図、第 563 図、図版 227・228）

坏蓋、坏身、高坏、把手付き鉢、壺、高坏形器台、甕などがある。(562-1・4) は２層、(562-5・14・15・17、563-1) は３層、(562-20・21) は３・４層、(562-2・3・7・9・18・19・22) は３・５層、(563-2) は３・５・６層、(563-3) ３層以下、(562-6・10・12・13・23) は５層、(562-8・11) は５・６層、(562-16) は６層から出土している。

(562-1 ～ 10) は坏蓋で、(1･4) は II 型式２段階に相当し、(1) は内面中央に一定方向のナデ、(4) は不定方向のナデを施している。(5) は天井部外面に赤色顔料が付着し、内面は不定方向のナデを施している。(6) は天井部に丁寧なヘラケズリ調整を施す。I 型式 2or3 段階（田辺編年 ON46 型式）に相当する[註9]。(2) は 3･5 層から出土しているが、5 層に属する可能性が高い。

(3・5) は I 型式５段階に相当する。(562-7 ～ 10) は坏身で、(7) の口縁部外面の一部に赤色顔料が認められる。(8) は内面に不定方向の細かいナデを施している。(8) は I 型式３段階、(10) は I 型式３段階、(7・9) は I 型式５段階に相当する。(562-11・12) は高坏で、(11) は口径

11cm、器高 9.3cmを測る有蓋高坏で、坏部内面に不定方向のナデを施している。円形透し孔を３方にあけている。Ⅰ型式３段階に相当する。(12) は脚部片で、透し孔は３方。(562-13) は把手付き鉢、(562-14 ～ 16) は甕で、(16) は底部外面に「×」のヘラ記号を刻んでいる。(14) は口径 10.8cm、器高 11.2cm、口頸部高 4.6cm、体部高 6.6cmを測り、頸部に波状文、体部に櫛描刺突文を巡らしている。Ⅰ型式５段階に相当する。(17) はⅠ型式２段階、(16) はⅠ型式３段階に相当する。(562-18 ～ 20・22) は壺で、(22) は３・５層から出土しているが、５層に属する可能性が高い。(562-23) は高坏形器台、(563-1 ～ 3) は大甕である。なお、(562-13・23) はⅠ型式２段階、(563-3) Ⅰ型式 2or3 段階、(562-2・23) はⅠ型式３段階、(563-1) はⅠ型式５段階に相当すると考えられる。

土師器（第 564 図～第 566 図、図版 229・230）

高坏、浅鉢、小型鉢、ミニチュア鉢、鉢、ミニチュア甕、甕、長胴甕、布留系甕、甑、土管？などがある。

(564-4) は 1･3 層、(564-7) は２層、(564-14･15、565-1) は３層、３～４層から (600-2)、３～５層から (565-5)、3･5 層から (564-10･22)、３層以下から (564-17)、４層から (564-5)、４～５層から (564-3・8・28、566-4)、４・６層から (564-18)、３～６層から (565-2・3、566-3)、３・５・６層から (564-20)、４～６層 (564-26)、５層から (564-13、566-2)、５～６層 (564-11・19、565-6)、６層から (564-1・2・6・7・9・12・16・21・23 ～ 25、565-4・7・8、566-1) が出土している。564-27 は層位不明。

(564-1・2・4 ～ 6) は高坏で、(1) は内面に放射状の暗紋を施している。(5) は内外面ともに赤色顔料を塗布し、柱状部外面にハケメ痕が残る。(564-3) は浅鉢。(564-7) 小型鉢。(564-7・8・13) は鉢で、(8) は口縁部にヨコナデ、体部外面はナデで、一部ヘラケズリ、内面は板状ナデ調整。煤が外面の一部と内面に薄くかかる。(13) は口径 17.2cmを測り、外面の調整は縦方向の幅広のヘラミガキ、内面はハケメ後、板状ナデを施している。(564-9・10) はミニチュア鉢。(564-11・12) はミニチュア甕で、口径約 6cm、器高約 6cmを測る。(11) は平底で、口縁部内面、体部外面はハケメ、内面は粘土紐の接合痕が明瞭に残る。

(564-14 ～ 18 ～ 23・25、565-4・5、566-1) は甕で、(1) は口径 12.6cm、器高 25.6cmを測る。口縁部は直立気味に立ち上がる。外面はハケメ、内面はヘラケズリ調整。(19) は口径 9.6cmを測り、口縁部は頸部からそのまま立ち上がる。(20) の底部は平底気味で、口縁部は直立気味に立ち上がる。(23) は口径 16cm、器高 16.4cmを測る。外面はナデ、内面はあたりの強い板状ナデ調整で、内面全体的に炭化物が付着している。器面はややいびつで、凹凸があり、2mm前後の砂粒を多く含む。(25) 口径 14.2cmを測り、口縁部外面はナデ、内面はハケメ、体部外面は平行タタキメ、内面は板状ナデ調整を施している。炭化物が内面に付着している。韓式系土器の可能性もある。(565-4) は口径 17.4cmを測り、口縁部は外反して、端部を丸くおさめる。

(565-1 ～ 3・6 ～ 8) は長胴甕で、(6) は口径 18.4cm、器高 33.5cmを測る。口縁部はわずかに

内湾して面をもつ。体部外面はハケメ、内面はナデ調整を施している。(8) は口径 17.4㎝、器高 31.6㎝を測る。口縁端部は内側につまみ上げ、端部外面は若干窪む。外面はハケメ後、下半部にナデを加え、内面上半はハケメ後、ヘラケズリ、下半部はヘラケズリ調整を施している。5 層で取り上げた破片を一部含む。

(564-24・26 ～ 28) は布留式甕で、(24) は口径 14.3㎝、器高 21.5㎝を測り、端部は内傾してやや肥厚する。体部外面はハケメ、頸部内面はヘラケズリ、体部内面はハケメ後、あたりの強いナデ調整を施し、底部内面に指頭圧痕が残る。(26) は体部外面にハケメ、内面はナデ調整、(27) は体部外面にハケメ、内面は板状ナデ、(28) は体部外面にハケメ、頸部内面はヘラケズリ、内面は指おさえ後、ナデている。(566-3) は甑で、口径 27㎝を測り、外面はハケメ後、指おさえとナデ、内面はハケメで、下半部に縦方向のナデ調整を施している。(566-4) は筒状土製品で、口径 18㎝を測る。外面はナデ、内面は縦方向のナデ調整である。土管？

製塩土器（第 566 図 5 ～ 16）

(5・8) は 3 層・3 層以下、(14) は 3・4 層、(15) は 3 層、(6・10) は 5 層、(7) は 5・6 層、(9) は 2・3・5・6 層、(13) は 2・5・6 層、(11・12) は 6 層、(16) は 3 層以下・6 層から出土。

韓式系土器（第 562 図、第 566 図、図版 228・230、原色図版 22）

韓式系軟質土器羽釜 (566-2) は口径 16.4㎝、器高 26㎝を測る。口縁部は内湾気味に開き、端部は平坦で、わずかに窪む。口縁部外面は平行タタキメ後、ナデ消し、内面はヨコナデ、体部外面は縦方向の平行タタキメ後、一部ナデ、内面は同心円文の当て具痕が明瞭に残る。鍔は一部欠けているが、そのまま使用しているため煤の一部は口縁部に及んでいる。全体的に器壁は厚い。5 層から出土した (図版 133b)。韓式系硬質土器広口壺 (562-21) は口径 19.3㎝、器高 21.5㎝を測り、体部は扁平で、底部は平底である。体部外面上部の調整は灰かぶりのため不明、中位以下は横方向の格子ふうタタキメ、底部はタタキメ後に回転カキメを加え、内面はヨコナデ、底部は指ナデである。頸部外面に 2 帯の櫛描波状文を巡らせている。2 つの突帯で上下を区画した中に 2 段に櫛描波状文を施す例は須恵器の壺ではめずらしい。プロポーションなどから小伽耶系土器と考えられる [註 10]。3 ～ 5 層から出土した。

移動式カマド（第 598 図、第 604 図、図版 230）

3 点出土している。604-2 は天井部幅約 25.7㎝、掛け口径約 17.6㎝である。掛け口天井部の平坦面は外側にもやや突出させ、幅 4.1㎝を測る。接合する部分が少ないため推定する部分が多いが、裾部の外面、庇の基部に張り付け突帯を巡らす。下半部の内面はヨコハケ、外面は斜方向のハケの後に天井部外面にヨコハケ調整を施している。3 ～ 4 層から出土した。なお、破片の一部は H 地区の大溝 H １１の 2 層出土の資料と接合している。色調は灰褐色を呈する。598-1 は 5 ～ 6 層から出土した。天井部幅 22㎝、掛け口径約 19㎝の円形を呈する。掛け口は天井部で屈曲して、幅約 2.9㎝のやや外傾する平坦面をつくり、端部外面はヘラケズリ調整を施し、シャープな面をつくる。庇はほぼ水平 (わずかに上向き) に張り出す「付け庇」で、張り出しは 3.3㎝とやや短く、

焚き口の上部のみに設けられている。庇高は掛け口高（天井部）を上回らないタイプである。体部外面には縦方向の平行タタキメ後、一部ナデ消している。内面はナデ調整を施している。胎土中には雲母・角閃石が多量に含まれ、暗灰褐色を呈する、いわゆる「生駒西麓産」と呼ばれるものである。他に、掲載していないが、天井部の破片が３層から出土している。598-1と同タイプであるが、外面の調整は縦方向のタタキメを施した後、ほとんどナデ消している。また、掛け口の径はやや小さく、１つ以上の掛け口をもつタイプの可能性もある。掛け口天井部の平坦面の幅は3.7cmを測る。胎土は生駒西麓産である。

木製品（第652・653・655～657・662・669・674図、図版276～278・280～282・287・293・297・298）

２層からカセカケ（657-10、図版282）。３層から一木平鋤（653-6、図版278）、木錘（655-2・8、図版280）、目盛板（655-10、図版281）、用途不明品（674-2・16、676-6、図版297）。５層から木錘（655-1、図版280）、５・６層から火鑽臼（669-10、図版293）、用途不明品（674-15、図版298）。６層から鎌柄（652-3、図版276）、エブリ（653-2、図版277）、斧柄（656-1、図版281）、緯打具（657-6、図版282）、鞘（662-1、図版287）、用途不明品（674-5、図版297）、有頭棒（674-8、図版297）が出土している。なお、（675-15・16）は用途不明品として扱っているが、目盛板（コモゲタ）の可能性も考慮しておきたい。

玉類（第632図10・15、図版248、観察表編 表１～４）

玉類にはガラス玉、滑石製臼玉、滑石製双孔円板、土玉がある。ガラス玉は黄色の粟玉（分析編第３章図版1-D5）が出土しているが、出土層位は不明である。

滑石製臼玉は１層から１点、１・２層から５点、２層から20点、２・３層から１点、３層から25点、３層以下で11点、４層から30点、５層から39点、６層から９点、７層から１点、層位不明は４点で計146点である。

双孔円板は２点（第632図10･15）で、（10）は径1.2×2.0cm、厚さ0.3cm、重さ1.5gを測り、３層から出土した。（15）は径1.55×2.2cm、厚さ0.35cm、重さ1.7gを測り、４層から出土した。

土玉は図化していないが、５層から１点出土している。径1.65、厚さ1.2cm、重さ3.0gを測る。

石製品（観察表編 表５・６）

砥石は１点で、敲石は３点で、３層から頁岩製の砥石（個体番号D10、以下個体番号省略）、微閃緑岩製の敲石（D3）、ドレライト製の敲石（D4）、６層から砂岩製の敲石（D2）が出土している。

鉄製品（第641図9）

曲刃鎌（641-9）は長さ16.3cm、最大幅3cm、最大厚0.25cmを測る。３層から出土した。

骨角製品（第648図、図版261・262）

２層から落角（資料番号D3230-01、図版262a-2）、３層から鹿角加工品（資料番号D3910-01、図版262-5）、５層から鹿角加工品（資料番号D4227-03、第648図1、図版261a）、鹿角刀子柄（資料番号D4227-04、第648図2、図版261b）が出土している。

動物遺存体（図版 267 ～ 274）

1・2 層からウマの切歯、2 層からウマ下顎骨（図版 267a-3）・右脛骨、タヌキの右側頭骨・後頭骨（図版 273b-2・3）、3 層からウマの左中足骨（図版 268b-3）・第 3 中手 or 中足骨・右橈骨、シカ左上腕骨・角、不明大型哺乳類、不明哺乳類、4 層から不明哺乳類の肋骨、エイ・サメ類の椎骨、5 層からウマ末節骨（図版 269a-10）、イヌ右側頭骨、タイ科、エイ・サメ類の椎骨、不明大型哺乳類、6 層からウマ右脛骨、イヌ胸椎（図版 272a-3）・左下顎骨（図版 271-1）、クロダイ属・タイ科などの魚類、鳥類（図版 274a-1）、7 層から不明大型哺乳類、貝などが出土している。詳細については分析編第 5 章の表 15 ～ 25 参照。

大溝Ｈ１１（第 517 図～第 523 図、図版 126 ～ 131）

Ｈ地区、A20c2 ～ 3 区から A20b2 ～ 3 区に跨って検出した。西肩を確認し、東肩は東側の調査範囲外に広がっているが、北北西 - 南南東方向に走向する幅 7m 以上、深さ約 1.2m を測る大溝である。南東約 14m に位置する同一の遺構であるＤ調査区の大溝Ｄ９００と同様に、北西居住域の西端を区画する。また、Ｆ調査区（西居住域）の大溝Ｆ、Ｅ調査区（東南居住域）の大溝Ｅ０９０００１と同一の大溝と考えられる。

埋土は 6 つに大別される（第 14 図、第 523 図、図版 131e）。層中に含まれていた土器から、1 層は 6 世紀前半～後半（II 型式 1 段階～ II 型式 3 段階）、2 層は 5 世紀後半から 6 世紀中頃（I 型式 5 段階～ II 型式 2 段階）、3 層は 5 世紀中～後半（I 型式 2 段階～ I 型式 5 段階）、4 層は 5 世紀中頃（I 型式 2 段階～ I 型式 3 段階）、5 層は 5 世紀前～中頃（I 型式 2 段階以前）、5 層下位は 4 世紀中頃～後半に比定される。なお、1 層はＤ調査区の溝Ｄ９００の１～２層、2 層は 3 ～ 4 層、3 層は 5 層、4 層は 6 層、5 層は 7 層にそれぞれ対応する。

調査にあたっては、北・南側に土層の堆積状況を確認するために、先行トレンチを入れ、溝中の土層の堆積状況を把握した上で、遺物の取り上げは層位ごとに、分布状況を確認しつつ行った。

その結果、遺物の散布状況から、西側からも遺物を投棄した状況が確認され、大溝の西側にも居住域の存在が想定された。なお、溝の肩口については、各層が収斂するため層位ごとの取り上げは困難で、後述しているように上下の層にわたって接合する土器が多い理由の一つである。

また、調査中から玉類や小動物の骨などが確認され、肉眼で発掘中に採取することが困難な遺物については採取エラーをわずかでもフォローするため、2 層、3 層を中心に土壌を土嚢袋約 700 杯採取し、水洗選別を行った。その結果、玉類や小動物などや、ムギ、コメをはじめとする多くの種実類を得ることができ、周辺の環境を復元する上において多大な成果をもたらしている。

大溝Ｈ１１出土遺物

須恵器、土師器、製塩土器、韓式系軟質土器、陶質土器、須恵器系土器、木製品、土製品（移動式カマド、U 字形板状土製品、土錘、紡錘車、筒状土製品、埴輪、ガラス玉、滑石製玉類、石製品、鉄製品、骨角製品、鉱滓、動物遺存体、植物遺存体等が出土している。

須恵器（第567図～第563図、第577図）

1層（第567図、第568図）

567-1・4・5は坏蓋で、1・4は天井部外面中央に赤色顔料が付着している。5は内面に同心円文の当て具痕が残る。567-8～11・12・14・15は坏身で、567-10は口径12.6cm、器高3.7cmを測り、内面中央に同心円文の当て具痕が残る。567-8は内面に不定方向のナデ、567-9・11・14は内面に一定方向のナデを施す。567-23は有蓋高坏で、透し孔を3方向にあけている。567-26は壺、567-27は提瓶、567-25は甕、568-1・3は甕、567-19は壺蓋である。567-21は大型蓋で、口径19.9cm、器高10.95cmを測り、天井部外面にヘラ記号を刻む。567-18・22は高坏蓋で、22は内面に不定方向のナデを施す。

567-22・23・25はI型式4段階、567-18はI型式5段階、567-2はII型式1段階、567-5・14・15はII型式2段階、567-1・9・11・12はII型式3段階、567-8・10はII型式4段階に相当すると考えられる。

1～2層（第567図～第569図）

567-2・3・6、569-6は坏蓋で、567-3は天井部の中心は、ヘラキリ未調整。567-7・13、569-4、570-10は坏身で、567-7は口径15.5cm、器高5.4cmを測り、底部外面中央に平行タタキメの当て具痕が残る。569-4は口径14.8cm、器高5.1cmを測り、色調は灰色～白灰色で、内面に同心円文の当て具痕が残る。567-24、571-34は高坏で、34は底径8.1cmを測り、脚部に四方向の透し孔をあけている。透し孔は縦長の小さいもので、1ヶ所は貫通していない。I型式2・3段階に相当すると考えられる。567-24は三方向の透し孔。567-20は高坏蓋である。568-2は甕で、外面は平行タタキメ後、回転カキメ、内面はスリケシ状のナデ調整を施している。

567-20はI型式5段階、569-4はII型式1段階、567-2・3・13、569-6、570-10はII型式2段階、567-7はII型式3段階に相当する。

1～3層（第567図、第570図、第573図）

570-1は坏蓋で、口径13.5cm、器高4.3cmを測り、天井部外面および内面中央に回転カキメを施している。I型式3段階に相当する。567-16・17、570-21は坏身で、16は内面に一定方向のナデを施す。17はI型式4段階、16はI型式5段階、21はII型式1段階に相当する。573-5は大甕である。

2層（第569図～第573図、図版227・228）

569-1～3・5・7～13・15～17・22・24・27～33・35・37～40・42・43、570-1・3は坏蓋で、569-1は天井部外面の回転ヘラケズリは粗い。569-2・10は内面中央に同心円文の当て具痕が残る。569-7は内面に黒褐色物質が付着。569-11は外面にヘラ記号を刻んでいる。569-12・35は内面中央に不定方向のナデ、569-24・25・32は内面中央に一定方向のナデを施している。569-15の内面は一部発泡している。569-16は胎土に黒色粒子が目立つ。570-31～33は外面に一部赤色顔料が認められる。

570-8・9・11 ～ 18・22 ～ 24・26 ～ 29・31・33・34・36・37 は坏身で、570-11 は底部外面に火だすき痕が残る。570-9 は内面中央に同心円文の当て具痕が残る。570-16 は外面に一部赤色顔料が認められる。570-23・29 の内面中央に一定方向のナデ、570-18・27 は内面中央に不定方向のナデを施している。570-34・37 は外面にヘラ記号を刻む。570-28 は内面に黒色物質、570-29 は内面に黒褐色物質が付着している。570-31 は小型で、胎土は粗い。

なお、570-31 は坏蓋 569-15 とセットと考えられる。571-1・2・13・16 ～ 19・23・26・27・29・33・35・37・38・40・41・43・46・47 は高坏で、2 は口径 12.8㎝、器高 9㎝、底径 8.8㎝を測る。坏部の内面中央は一定方向に研いだように滑らかで、すり皿としての機能が考えられる。脚部中位に、三方向の円形の透し孔を千鳥に穿っている。23 は内面中央に同心円文の当て具痕が残る。13・17・19・23・37・38・43・46 は透し孔を三方向、1 は四方向にあけている。

47 は甕 572-21 と同じく「瓦質須恵器」である。571-7・8・10・11 は高坏蓋で、8 の内面中央に不定方向のナデを施している。11 は内面中央に同心円文の当て具痕が残る。572-1・4・5・8 は瓶で、1 は口径 12.0㎝、器高 12.1㎝、体部最大径は 9.5㎝を測る。体部中位から口頸部外面はカキメ調整後、口頸部に櫛描波状文をめぐらす。口頸部外面と体部外面下半にヘラ記号を刻んでいる。572-3・9・10 は直口壺、572-6 は短頸壺。572-13 ～ 15・17・18 は広口壺で、13 は口縁部内面の上縁に一部赤色顔料の付着が認められる。15 は口径 14.8㎝を測り、全体に粗いヨコナデ調整で、5 ～ 10㎜前後の砂粒を多く含み、断面の色調は 7.5YR6 ／ 3 にぶい褐色を呈している。572-12 は提瓶の口縁部と考えられる。572-20 ～ 24、573-2 ～ 4 は甕で、572-20 は口径 22.4㎝を測り、外面は平行タタキ後に口頸部外面はヨコナデ、肩部以下は回転カキメ調整。口縁部の端部内縁を面取り状に削り込んでいる。572-21 は口径 22.4㎝を測る。口縁部外面に一部赤色顔料が認められる。焼成は甘く胎土は中世から近世にみられる瓦質土器に近似している。成形手法は須恵器の手法によるものであるが、胎土が甘く瓦質であること、そして当初から意図していた可能性も考慮し、焼成不良の須恵器として無視することも躊躇される。このため、この種の土器を便宜的に「瓦質須恵器」として扱っておきたい。573-1 は高坏形器台である。

570-1 は I 型式 2 段階、569-42、570-3、571-10 は I 型式 3 段階、569-33・37・39・40・43、571-1・17 は I 型式 4 段階、569-15・16・17・22・24・25・27 ～ 31・35、570-16・23・24・26 ～ 29・31・33・34・36・37、571-7・11・13・16・18・19・23・37 は I 型式 5 段階、569-5・8・9・12・13・32・38、570-11 ～ 15・17・18・22、572-1 は II 型式 1 段階、569-2・3・7・10・11 は II 型式 2 段階、569-1、570-8・9 は II 型式 3 段階に相当する。なお、II 型式 3 段階の 569-1、570-8・9 については、取り上げミスの可能性が高い。

2・3 層（第 569 図～第 572 図、第 577 図、図版 227）

569-14・18 ～ 21・23・26・34・36・41、570-2・4・5・7 は坏蓋で、569-19 は灰白色の色調で、やや瓦質。569-26 は、2 層から出土した坏蓋 569-16 と同様に胎土に黒色粒子が目立つ。570-19・20・25・30・32・35・38 ～ 44、577-13・15 は坏身で、570-39 は口径 10.1㎝、器高 5.05

cmを測り、内外面は回転カキメ調整で、胎土は緻密である。内面のカキメ調整は丁寧にナデ消している。570-42は底面中央に赤色顔料が一部付着している。570-32・38・44は内面中央に一定方向のナデ、570-41・44は内面中央に不定方向のナデを施している。571-3～6・15・20～22・24・25・28・30・32・36・39・42・44・45は高坏で、6は口径11.45cm、器高8.55cm、底径7.8cmを測る。坏部は比較的深く丸みをもち、裾部外面に凸線を一条巡らす。15は口径13.6cm、器高10.9cm、脚部高6.3cmを測る長脚（長脚一段）で、坏部内面に重ね焼きの痕跡が明瞭で、脚部外面にヘラ記号を刻んでいる。28の透し孔の周辺は面取りを行っている。571-5・20・21・24・25・30・39・42・45は透し孔を三方向、571-15・36・44は透し孔を四方向にあけている。571-9・12・14は高坏蓋で、9は内面中央に不定方向のナデを施している。572-2・7は甕、572-16・19は壺、577-31は甕である。短頸壺（572-11）は口径10.3cmを測り、体部外面はタタキメを施し、下半部以外はその後ヨコナデ調整を行い、タタキメをすり消している。

なお、569-11、570-7・41、571-28はⅠ型式２段階、571-22はⅠ型式２段階もしくは４段階、571-30、577-31はⅠ型式３段階もしくは４段階、570-2・4・5・42・43、571-6・12・21はⅠ型式３段階、570-35・39・40・44、571-3・21・24・25・42はⅠ型式４段階、571-14はⅠ型式４～５段階、569-14・18～21・26・34・36、570-19・20・25・30・32・38、571-4・9・20、577-13・15はⅠ型式５段階、569-23、571-5・15はⅡ型式１段階に相当する。

３層（第571図、577図、図版227）

577-1～12は坏蓋で、8は口径12.6cm、器高4.5cmを測り、口縁端部はわずかに内傾して、緩やかな凹面をなす。天井部外面に赤色顔料で「十」の記号を描いている。壺（577-29）は口径15.3cmを測る。口頸部外面に２つの突線を界して上下に波状文を巡らしているが、下段の波状文については、その上に回転カキメ調整を加えている。体部外面は縦方向の平行タタキメ後、カキメ、内面は丁寧なヨコナデ調整を施している。571-31、577-22・23は高坏で、577-22・31は三方向に透し孔。577-23の透し孔は米粒大の大きさで、四方向にあけ、脚部外面に「－」のヘラ記号を刻んでいる。577-26は筒形器台である。577-27・28・30・32は甕で、577-30は口径19.6cmを測り、体部内面はナデ、外面は自然釉付着のため調整は不明である。

なお、577-27・29・32はⅠ型式２段階。577-26はⅠ型式２・３段階。577-10～12・20・32はⅠ型式３段階。577-5・6・8・9・16・19・28はⅠ型式４段階。577-1～4・7・14・17・18・21はⅠ型式５段階に相当する。

４層（第577図）

直口壺（577-24）は口径9.5cm、器高15cmを測る。Ⅰ型式２段階に相当するものと思われる。破片の一部は３層、５層で取り上げているが、４層に所属する資料と考えられる。

土師器・製塩土器（第574図～第576図、第578図～第580図）

１層（第574図、第575図）

小型長頸壺（574-10）は体部外面、口頸部内外面に赤色顔料（赤色の化粧土を）を塗布して

いる。体部外面、口頸部内面はハケメで、器壁は厚く、成形時の指おさえによる凹凸が明瞭に残る。北西居住域の土坑Ｄ６７９（第422図14・15）、北東居住域の井戸Ｄ４７４（第232図13）からも同タイプのものが出土している。鉢（574-15）は口径20㎝、器高13.25㎝を測り、外面に煤が付着している。鍋（575-8）は底部が欠損しているが、鍋と考えられる。

1～2層（第574図11、第576図6・8、第580図1）

574-11は壺で、体部外面上半部は不定方向のナデ、下半はヘラミガキ、内面下半はヘラケズリ調整を施している。薄作りで、ほとんどが2層から出土したものである。576-6は底部がすぼまる甑で、口径20㎝を測る。体部中位に左右一対の扁平な匙状の把手を上向きに取り付けている。580-1は製塩土器である。

1～3層（第575図6、第576図7）

575-6は甕で、口径16.6㎝を測る。西肩から出土したため層位は限定できない。576-7は甑で、体部に左右一対の扁平な匙状の把手を上向きに取り付けている。

2～4層（第575図1）

壺（1）は口径13㎝、器高22.2㎝を測る。体部外面はナデ、内面はヘラケズリ調整を施している。2層のものは混入の可能性が強い。

2層（第574図～第576図、第580図）

壺（574-12）、直口壺（574-13）、高坏（574-16・17）、甕（574-19・21・22・24、576-2）、布留式系甕（575-2）、長胴甕（575-4）、浅鉢（574-3・14）、鉢（574-2・4）、ミニュチア鉢（574-5・6）、小型鉢（574-8）、注口付き大型鉢（576-4）、製塩土器（580-2～23・29）がある。

甕（574-21）は一部1層、3層の破片が接合しているが、2層に所属すると考えられる。浅鉢（574-3）は口径12.5㎝を測り、体部外面下半はナデ後、底部を中心にヘラケズリ調整を行っている。鉢（574-2・3）は外面に比べて、内面の調整は丁寧。注口付き大型鉢（576-4）は、概要報告書では内面全体に煤が付着している点から、移動式カマドの煙出し部分の破片と考えていたものである。その後、再度、口縁部の傾きを検討した結果、口縁部が内側ではなく、外側に開くものであることが判明した。なお、煤の付着は破損後に二次的に転用されたためであろう。今回、注口付き大型鉢と訂正する。類例はＣ調査区の土坑Ｃ３１９２から出土している（第208図6）。

2・3層（第574図～第576図、第580図）

浅鉢（574-1）、甕（574-23・26、576-1・3）、長胴甕（575-7）、製塩土器（580-26・28・30・31）がある。長胴甕（575-7）の破片の一部は第10層と接合。甕（574-26）は口径12.8㎝、器高17.1㎝を測る。体部外面上半は縦方向の粗いヘラミガキ、下半は強いナデ調整、内面は指ナデ後、部分的にハケメ調整を行っている。

3層（第574図、第575図、第578図、第580図）

小型丸底壺（578-5）、甕（574-20、575-5）、高坏（574-18）、浅鉢（578-3）、製塩土器（580-24・25・27・33）がある。小型丸底壺（578-5）は口径7.9㎝、器高9.4㎝を測る。体部外面は

不規則なハケメ、下半部はナデ消し、内面はヘラケズリ状のナデ調整。外面の色調は灰褐色。

甕（574-20）は小型で、口径 10.4cm、器高 11.7cmを測る。底部はやや平底気味。甕（575-5）は布留式系で、口径 17.4cmを測り、口縁部はわずかに内湾し、端部は内傾する。器壁は薄い。浅鉢（578-3）は内面に黒色物質が 0.5mm前後の厚さで溜まっていた。底部外面は一定方向の手持ちヘラケズリ調整を施している。二次的に被熱している。

製塩土器（580-33）は口径 4.2cm、器高 7.2cm、重量 55.6g を測る。ややしもぶくれ。外面はタタキメ後、丁寧にナデあげている。内面は指ナデの痕跡がよく残る。外面に銀色の物質が付着。底部外面はススが付着。二次的に加熱を受け、暗赤褐色に変色している

3～4層（第578図）

ミニチュア鉢（578-2）、小型丸底壺（578-6）、甕（578-17）がある。土師器ミニチュア鉢（578-2）は粘土紐による輪積の痕跡が明瞭。小型丸底壺（578-6）は口径 9cm、器高 10.5cmを測る。外面は表面摩耗のため調整は不明、内面はナデ調整。甕（578-17）は口径 11.2cmを測り、外面は不定方向のナデ、内面はナデ調整で、全体的に表面は凹凸で、内面の粘土紐の痕跡は明瞭。

4層（第578図、図版580図）

小型丸底壺（578-4）は体部外面上半に縦方向のハケメ、下半はヘラケズリ後ナデ、内面はナデ調整である。製塩土器（580-32）は口径 4.1cm、器高 7cm、重量 50.4g を測る。外面は指オサエ後、指によるヨコナデ、内面は指ナデの痕跡がよく残る。底部～外面にかけて一部、銀色の物質が付着している。3層出土の製塩土器（580-33）に比べて外面の調整が丁寧。二次的に加熱を受け、暗黄褐色に変色している。

4層・5層（第578図）

土師器高坏（578-13）は口径 21cmを測り、坏部の口縁部は内外面ともにハケメ調整を施す。

4層・5層下位（第578図）

土師器高坏（578-11）は口径 16.6cmを測り、坏部内面に放射状暗文を施す。

5層（第578図、第580図）

578-10・12 は高坏で、10 は坏部外面にハケメ後にヘラミガキ、内面は放射状にヘラミガキ調整を施している。12 は口縁部内面に黒色物質が付着し、外面は指おさえの痕跡がよく残る。578-1 は鉢で、外面はナデ仕上げで、粘土紐の痕跡が明瞭に残る。578-7 は小型丸底壺で、口径 8.5cm、器高 9.2cmを測る。体部外面はヨコハケ後に、下半部を中心に不定方向のナデ調整を施している。578-8 は有段口縁鉢で、体部外面はハケメ、内面はナデ調整を施している。578-15・16 は布留式甕である。578-18 は二重口縁壺で、胎土中に金雲母を多く含んでいる。578-26・27 は弥生系の甕底部。578-28 は壺底部で、外面は縦ヘラミガキ調整を行っている。

5層・5層下位（第578図、第579図）

578-14 は広口壺で、口頸部外面はヘラミガキ、内面はハケメ後、粗くヘラミガキ調整を施している。578-9・22 は鉢で、9 は内面を放射状にナデている。579-2・3 は高坏で、2 は内外面ヨ

コナデ調整。3は坏部内外面ナデ、底部外面はハケメ後、ナデ調整を施している。578-19は壺？で、内外面ともに粗いハケメ調整を施す。579-15・20は布留式甕で、15は生駒西麓産の胎土。20は体部外面にハケメ、内面はヘラケズリ調整。578-20・21・23・24、579-19は弥生系甕で、578-20・24は内面に板状ナデ、579-19は口径14.4cmを測る口縁部片で、内外面とも粗いハケ目調整。578-21・23は内面にハケメ調整を施している。578-23は底部外面にヘラ記号を刻んでいる。579-17は甕で、外面はナデ、内面はナデ状ハケメ調整。製塩土器の可能性が考えられる。

なお、578-19・21・23、579-17・19は一部4層のものが接合している。

5層下位（第578図、第579図）

578-25、579-18・27・30・31は弥生系甕で、578-25は4・5層のものと接合するが、5層下位とする。いずれも外面は平行タタキメで、578-25は内面に板状ナデ、579-18・27・30・31はハケメ調整を施している。579-13・14・21は布留式甕、579-16は庄内式甕で、胎土は生駒西麓産。579-1・4・5・6・7・8・9・10は高坏で、7は坏部外面にハケメ、底部外面はヘラミガキ調整を施している。579-11は小型丸底壺、579-24は鉢？、579-25は壺の口縁部片である。579-12は脚部で、胎土は5層・5層下位出土のもの（579-3）に近似する。

579-22・23は二重口縁壺で、22は口縁部外面にジクザグ状に暗紋を施している。579-26・28・29は底部片である。

韓式系土器（第574図～第577図、図版227）

2～3層から韓式系軟質土器平底鉢（574-9）、韓式系軟質土器甕（575-3）、1～3層から韓式系軟質土器甑（576-5）、3層から陶質土器瓶（577-25）が出土している。

平底鉢（574-9）は口径9cmを測る。外面は縦方向の平行タタキメの上から強いナデ、内面はナデ調整である。1層で取り上げた破片を一部含む。

甕（575-3）は口径20cmを測り、口縁端部は面をもち、シャープ。外面は横方向の平行タタキメ後、ナデ、内面は指おさえ後にナデ調整を施している。他の甕に比べて器壁はやや厚い。

甑（576-5）は底部の大半が破損しているが、口径25.6cm、器高27.5cm、底径11.9cmを測る軟質の赤焼き系土器。体部中位に水平方向の浅い沈線を巡らし、その位置に左右一対の牛角状把手を上向きに取り付けている。把手の下面側には、製作～乾燥時の支えとして使用した植物茎の痕跡と考えられる竹管文状のスタンプ痕が認められた。蒸気孔は中央に1個と周囲に4個の孔を巡らすタイプ。体部外面は縦方向の平行タタキメ後にヨコナデ、内面は丁寧なナデ調整を施している。口縁部は内外面ともに回転ヨコナデ、底部下端の外面はヘラケズリ調整を施している。

陶質土器瓶（577-25）は口径8.9cmを測り、体部外面に右開きの鳥足文タタキメを横方向に連続的に巡らしている。肩部はヨコナデ、内面は丁寧なナデ調整を施している。

須恵器系土器（第574図）

574-25は小型鉢で、1・2層から出土した。内外面は回転ナデ調整。574-27～30は高坏で、いずれも2層出土である。27は高坏の坏部で、内外面は回転ナデ調整。28は高坏の脚部で、内

外面は回転ナデ調整。29 は裾部、内外面は回転ナデ調整。30 は高坏の裾部で、内外面は回転ナデで、裾部外面には平行タタキメ状痕跡が認められ、しぼり目またはハケメの痕跡と考えられる。

木製品（第 651 ～ 655 図、第 657 図、第 662 図～第 664 図、第 667 図、第 669 ～第 673 図、第 674 ～第 679 図、図版 276・279・280・288・289・292・294・295・297・300・301）

柄振、ナスビ型鍬、砧、横槌、大足、農具、糸巻き、木錘、刀形、鞘尻、輪鐙、舷側板、杓子、ささら、琴柱、火鑽臼、有孔木製品、用途不明品、加工木等の木製品が出土している。

1 層からエブリ（653-1、図版 277）、刀形（663-1、図版 288）、アカ取り（670-3、図版 294）、タタリ（679-4、図版 301）、用途不明品（674-12・17、図版 297）、加工木等が出土している。

2 層から曲柄又鍬（651-6、図版 276）、横槌（652-7、654-2、図版 277・279）、大足（654-7）、木錘（654-11、655-7、図版 280）、鞘尻（662-5、図版 288）、斎串？（663-9）、ササラ状木製品（666-3）、琴柱（667-6・7、図版 292）、火鑽臼（669-8）、杭（673-10）、有頭棒（674-6、図版 297）、用途不明品（657-2、674-13、678-4・8・10・12・13、679-5 ～ 7・9・10、図版 297・300）、加工木等の木製品が出土している。

3 層から横槌（652-8）、木錘（654-9、図版 279）、カセカケ（657-3）、輪鐙（664-1・2、図版 289）、琴柱（667-4・5、図版 292）、舷側板（671-2、図版 295）、杭（673-9）、用途不明品（676-8、677-4・5、679-8）、加工材片（677-9）、加工木等の木製品が出土している。

4 層から大足（654-4、図版 279）、用途不明品（674-4）、加工木等の木製品が出土している。

以下、主要な木製品について詳述する。輪鐙は 2 点（664-1・2、原色図版 17b）出土している。1 は高さ 20.6㎝、幅 15.65㎝を測る。輪部は平面楕円形で、内径縦 7.3㎝、横 10.6㎝で、断面梯形を呈し（内側が広い）、幅 2.3 ～ 2.6㎝、厚さ 1.8 ～ 2.2㎝を測る。柄部はやや上開きで、断面は隅丸長方形を呈し、長 7.3㎝、上方幅 3.8㎝、下方幅 2.55㎝、厚さは 1.3 ～ 1.9㎝をはかる。柄部の上方に 1.5 × 1.8㎝の横長方形の孔（鐙靼孔）をあけている。ここに鐙靼（皮紐）を装着して鞍に連絡したものである。柄部上縁及び鐙靼孔の内縁上部は、著しく磨耗している。これは鐙靼が結ばれていた痕跡で、長期にわたって使用されていたことを物語る。鐙靼孔や輪部の摩滅の痕跡から、乗馬する人の右足を乗せるものと考えられる。表面は丁寧に調整されており、輪部を削り込んで断面梯形にすることで、軽く、また重量のかかり具合を考慮して、柄部の基部を厚くするなど、実用品として行き届いた細工を施している。なお、鐙靼孔のやや下に径 0.3㎝、深さ 0.3㎝の断面擂鉢形の穴をあけている。これは前面を意識したための印と思われる。材質はカシ（アカガシ亜属）で、木取りは柾目である。(2) は柄部を欠き、残存高は 13.3㎝を測る。輪部は平面長楕円形で、内径縦 8.1㎝、横 9.7㎝で、断面隅丸長方形を呈し、幅 2.3 ～ 2.6㎝、厚さ 1.8 ～ 2.2㎝を測る。(1) に比べて形態的に洗練されておらず、整形はやや粗い。材質は (2) 同様、カシ（アカガシ亜属）で、木取りは柾目である。

エブリ（653-1）は長 13.9㎝、幅 51.8㎝、着柄部の厚さ 2.3㎝を測る。刀形木製品（663-1）は切っ先部分を欠損し、現存長 47.2㎝、幅 3.1㎝、厚さ 1.3㎝を測る。刃を内反りに表現する刀

形木製品は類例がなく、珍しい資料といえる。用途不明品（679-04）は先端部を欠損し、現存長は41.4㎝、最大幅8.9㎝、厚さ1.9㎝を測る。形状から紡織具の「たたり」の可能性も考慮される。琴柱（667-6）は二次的に火を受け、炭化している。火鑽臼（669-8）は現存長2.0㎝、幅0.9㎝、厚さ0.7㎝を測る。側面には断面Ｖ字形の刻みが入れられている。二次的に火を受け、炭化している。アカトリ（670-3）は身の一端に、断面円形の柄がつく。柄と身は一木で作られ、いま身の先端部と側縁の一方を欠損する。現存長は44.3㎝、現存幅12.0㎝を測る。横槌（652-8）は長さ38.8㎝を測る。

土製品（第574・576図、第580図、第626図、第607図、図版240）

土製品には、移動式カマド、Ｕ字形板状土製品、土錘、紡錘車がある。移動式カマドは５点出土している。第576図８は体部下半部分のため、焚口、釜口部分の形状は不明である。外面は斜め方向のハケメ、内面は板状工具によるナデ調整を施している。２層から出土した。

他に、図化していないが、胎土は生駒西麓産で、第586図と同様なタイプの掛け口部分の破片（ただし、外面の調整はナデ）、煙出し部分の破片、そして胎土に砂粒を多く含み、焚き口と付け庇との間隔が広いタイプのもの、さらに体部に埴輪に見られるようなタガ状の突帯を巡らすもの（３層出土）の破片が出土しているが、これについては大溝Ｄ９００出土のもの（第604図2）と接合した。

Ｕ字形板状土製品の破片は５点出土している。図版240下は幅15.6㎝で、２層から出土した（図版128b）。南西居住域の土坑Ａ１１３５出土のもの（第611図）よりも一回り大型で、板状部の厚さは1.4～1.5㎝を測る。裏面には木目、細い縄紐の圧痕が残存している。なお、縄紐は作業台にあらかじめ敷いて、土製品の成形を行い、乾燥後、土製品を作業台から切り離す際に使用された道具としての用途が考えられる。第607図1-1・2は図版240下に比べてやや粗いつくりで、板状部の長辺の一端をＬ字形に折り曲げている。１は３層から、２は２層から出土したもので、幅は13.0～14.8㎝、厚さ1.5㎝前後を測る。なお、図化していないが、図版240e～ｇと同タイプのものが、１層、２層から各１点出土している。

土錘（第580図37、図版258）は現存長7.7㎝、厚さ約3.8㎝で、３層から出土。紡錘車（第626図８、図版245）は断面台形を呈し、径4.3×4.2㎝、厚さ1.8㎝を測る。２層から出土した。

筒状土製品（第574図７）は口径11㎝を測り、外面及び口縁部上端は粗いハケメ、内面は縦方向の板状工具によるナデ調整を施している。形状から煙突？の可能性が考えられる。

埴輪（第581図７、第582図５）

２層から円筒埴輪（582-5）、３～４層から衣蓋埴輪（581-7）が出土している。衣蓋埴輪（581-7）は内外面とも赤色顔料を塗布している。

玉類（第628図、第629図、第632図、図版243、原色図版23）

管玉（第628図４・６・７・10・12）は５点で、すべて２層より出土している。長さ1.75～2.2㎝、径0.4～0.6㎝を測り、孔は両面から穿孔している。色調は緑灰色で、材質については肉眼

観察の結果、7は緑色片岩、4・6・7・10・12は蛇紋岩である。

ガラス玉は19点、琥珀玉は3点出土している（原色図版23、分析編第3章 図版2・3-H1～22)。内訳はガラス棗玉1点、ガラス小玉1点、ガラス粟玉17点、琥珀粟玉3点である。

ガラス棗玉は2層から出土したもので、長1.15cm、厚さ0.9cmを測る。色調は飴色を呈し、表面に縦方向のヒビ割れ状の痕跡（ガラス管を上下に引き伸ばしたときの皺）が観察される。また、小口に襟首状に切断口の痕跡が残存している。形状から、内外2層のガラスによって構成される「サンドイッチ・グラス玉」と呼称されるもので、その間に金箔や銀箔を挟み込むものを金層ガラス、銀層ガラス、何も挟み込まないものを重層ガラスという(註11)。今回の玉は、大阪・柏原市高井田山古墳出土の金層ガラス玉(註12)に近似しているが、内層のガラスが抜け落ちている状況が観察されるため、金箔を挟み込んでいたものか否かは不明である。ガラス小玉は2層出土で、径0.6cm、厚さ0.6cmを測り、色調は濃紺色。ガラス粟玉で、径は0.4～0.2cm、厚さ0.3～0.15cmを測る。2層から13点、3層から4点出土し、色調はコバルトブルー、淡緑色、白色、不透明な赤色、暗緑灰色、薄緑色を呈している。琥珀粟玉はいずれも2層から出土したものである。

滑石製臼玉は1層から5点、2層から503点、3層から48点、4層から1点、計557点出土している。径は0.45～0.65cm、厚さ0.1～0.45cmを測り、色調は緑灰色を呈する。形状によって臼形、算盤形、円筒形、台形の4タイプに分けられる。

滑石製双孔円板（第632図2・19・21、図版247a）は3点出土している。2は3層出土で、径3.15cm、厚さ0.5cmを測り、色調は淡緑灰色を呈する。19は2層出土で、径2.6×2.8cm、厚さ0.6cmを測り、色調は緑灰色。21は1層出土で、径2.2×2.3cm、厚さ0.3cmを測り、色調は暗緑灰色を呈する。滑石製有孔円板は5点で、2層から4点、3層から1点出土している。図化したのはその内の3点（第632図14・20・22）で、いすれも2層より出土したものである。

土玉（第629図5～14、図版248e）は10点出土している。外面の色調は2.5Y 2/1黒色、断面は2.5Y 6/2灰黄色を呈する。いずれも2層より出土した。(5)は径1.1×0.95cm、厚さ0.85cmを測る。(11)は径0.75×0.65cm、厚さ0.55cmを測る。

鉄製品（第641図、第642図、第645図、図版252～254・256・257b）

鎌、刀子、釣針、鉄鏃の他に椀形鍛冶滓が出土している。641-1・2は直刃鎌で、1は1層、2は5層下より出土した。642-3・8・9は刀子で、3は刃部と柄部は共造りで、全長16.3cm、刃長5.8cm、最大刃幅0.292cmを測る曲柄刀子である。柄が上方に屈曲する形状から、鹿角製刀子を模したものと考えられる。柄部の断面は長方形を呈し、柄元での幅0.463cm、厚さ0.933cm、柄頭では幅0.747cm、厚さ1.147cmと柄頭に向かって徐々に幅・厚さが増す。柄部の左右側面には、枠取りした区画内に鏨状工具によって綾杉状に文様を彫り込んでいる。同様の例は、文様の有無は不明であるが、寝屋川市讃良郡条里遺跡(註13)、福岡県甘木市池の上墳墓群D-3号・D-5号(註14)にも見られる。さらに、柄部の下面、刃部の棟には鏨状工具で「×」印が彫り込まれている。棟に「×」印を彫り込んでいる例は、大阪市瓜破遺跡(註15)に次いで二例目となる。8・9は2層

出土で、8は茎の一部は破損し、刃部は折れ曲がっている。9は刃部の先端部のみ残存している。645-1・2は釣針で、2層から出土した。1は残存長6.3㎝、径0.3㎝を測る。2は針先を失う。645-10・11は鉄鏃で、10は5層下位、11は1層から出土した。図版257b-10・11は椀形鍛冶滓で2層から出土した。質は緻密で、外面に気孔・木炭痕が少し認められ、上面には溶解した黒色ガラス質滓が付着する。

石製品（第634図、第635図、図版249a・251b）

砥石、敲石、台石が出土している。砥石は1層から2点、2層から5点、3層から3点で、計10点。図化したのは3点（634-2・6、635-1）で、634-2は径3.4×3.55㎝の円形で、厚さ1.7㎝を測り、中央に径0.7㎝の孔を穿つ。材質は流紋岩で、側縁全体に擦痕が観察され、携帯用砥石と考えられる。634-6は流紋岩製で1層から、635-1は砂岩で2層から出土した。敲石は2層、台石は3層から出土し、いずれも材質は砂岩である。

骨角製品（第648図～第650図、図版259・261・262・270、原色図版23）

2層から鹿角製刀子（648-3）、鹿角製加工品（648-5・7、649-4・6）、鹿角製管玉（649-7）、骨製管玉（649-8）、有孔骨製加工品（649-9）、卜骨（650-1・2）が出土している。4層から柄の未製品と考えられる鹿角製加工品（648-4）が出土している。5層下位から把と柄を共造した鹿角製柄（649-1）が出土している（図版261）。

動物遺存体

哺乳類、爬虫類、鳥類、両生類、貝類[註16]、ウニ、カニなどの動物遺存体で、以下、層別に種名を表記する。詳細については、分析編第5章・第6章参照。

哺乳類（図版264～273a～d・f）、鳥類（図版274a）

1層からウマ、イノシシ、ネズミ、トリ、2層からウマ、ウシ、イノシシ、シカ、イヌ、イヌ科（タヌキ？）、イタチ科、ネズミ、キジ科、3層からウマ、イノシシ、シカ、イヌ、ネズミ、トリ。4層からシカなどが出土している。

爬虫類（図版273h）、両生類（図版273e）、貝類（図版274b・c・d）、ウニ、カニ（図版274e）

1層からシジミガイ科、2層からカエル、スッポン、カニ、アカニシ、シジミガイ科、イガイ、イボウミニナ、オガイ、3層からカエル、ヘビ、アカニシ、ウニなどが出土している。

サカナ類（図版275）

310点の内で種類、部位などを同定できたのは191点で、同定された淡水魚と海水魚の出土量に顕著な差は見られないが、種類別に見れば淡水魚のナマズが集中的に出土していることが、分析の結果、指摘されている。1層からタイ科、2層から魚類では、マダイ、イシダイ科、タイ科、スズキ、ニベ科、ボラ属、ハモ属、クロダイ属、コチ科？、エイ・サメ類、サメ類、アユ、ナマズ、ナマズ目、コイ科、3層からマダイ、タイ科、クロダイ属、ボラ科、フグ目？、ウシノシタ科、スズキ、イシダイ科、ハタ科、ブリ属、ウナギ目、エイ・サメ類、サメ類、アユ、ナマズなどが出土している。

種実類（大型植物遺存体）

土壌洗浄したタッパー及びガラス瓶に193試料の分析・同定の結果、木本24種類、草木30種類の種実が検出された。出現頻度は、1層ではメロン類、タデ属、ブドウ科、コムギ。2層ではスモモ、コムギ、モモ、ヒョウタン類。3層ではスモモ、コムギ、ノブドウ、ヒョウタン類の順で、コムギの出土量が多い。また、イネと比較すると、コムギは1層ではイネの約6倍、2層では約14倍、3層では約9倍となる。層別、出土量については分析編第1章の表1参照。以下、同定された種名を列記する。

イヌガヤ、マツ属複維管束亜属、ヤマモモ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属、シイ属、ブナ科、ハンノキ属、ヤマグワ、カジノキ属、クスノキ科、スモモ、モモ、サクラ属、サンショウ、カラスザンショウ、アカメガシワ、ブドウ属、ノブドウ、ブドウ科、クマノミズキ、ハイノキ属、エゴノキ属、ヒルムシロ属、イネ、エノコログサ属、コムギ、ムギ類、スゲ属、ホタルイ属、カヤツリグサ科、イボクサ、カナムグラ、アサ、クワ科、ギシギシ属、サナエタデ近似種、タデ属、アカザ科、ゴハリマツモ、キンポウゲ属、アオツヅラフジ、マメ類、ヒシ属、エゴマ、シソ属、ナス科、スズメウリ、ゴキヅル、メロン類、トウガン、ヒョウタン類、オナモミ、タカサブロウ。

溝Ｅ０９００６０（第257・258図、図版61b）

南西居住域に属するＥ調査区のほぼ中央部のB19d5・e5・f5・f6・g6・h6・i6区で検出した。大溝Ｅ０９０００１のすぐ東側を沿うような状態で認められ、幅0.6m～1.2mを測った。

埋土内から須恵器、土師器などが出土した。出土した須恵器はⅡ型式2段階～3段階に相当するものである。

検出した位置と時期からみて、溝Ｅ０９００６０は北西居住域で認められた溝Ｄ９８６と同様の性格を持つもので、大溝Ｅ０９０００１が埋没した後の集落の西限の溝と考えられる。

溝Ｅ０９００６０出土遺物（第504図9～11、図版219）

埋土内から須恵器、土師器、鉱滓などが出土した。図示し得たのは3点で、製塩土器（9）、須恵器脚付鉢（10）、須恵器壺（11）などがある。

Ｅ調査区流路出土遺物（第546図1～35・第547図1～25・第548図1～9・第549図1～9、図版231～233）

Ｅ調査区で検出された古墳時代中・後期の大溝の西肩部は、弥生時代後期～古墳時代前期の流路の埋土である砂層をベースとしているが、砂層の上端部および直上から古式土師器がほぼ原型を留めた状態で検出された。検出状況から見て、これらの土器には大溝の開削時期より先行するものと大溝の埋没時期を示すものが混在するものと考えられる。ここでは78点を図示した。

546-1～15は古式土師器の高坏である。坏体部から口縁部にかけて外反するもの（1～3・5・

13 ～ 15）と、直線的ないしは内弯気味に立ち上がるもの（4・6 ～ 8・11・12）に大別できる。

546-16 は古式土師器の丸底鉢で、体部最大径が上端部付近にある浅い体部に、ごく短く外反する口縁部からなる小型のものである。

546-17 ～ 35・547-1 ～ 4・6・8 ～ 16・19 は古式土師器の壺で、小さな扁球形の体部と大きく外上方に開く口縁部からなる小型のもの（546-17）、扁球形の体部と外上方に開く口縁部からなる小型のもの（546-18 ～ 28・546-30 ～ 35・547-1 ～ 4・6）、体部上半が直立気味で、口縁の立ち上がりも直立気味にわずかに開く小型のもの（546-29）、扁球形に近い体部と上方につまみ出す程度の口縁部からなる小型の無頸壺（547- 9）、平底の小型壺（547-10）、扁球形の体部と外上方に開く口縁部からなる中型のもの（547-11 ～ 16）、一度短く外上方へ立ち上がった後ごく短く直立し、その後再び外上方へ立ち上がる、いわゆる二重口縁を呈するもの（547-19）等がある。

547-17 ～ 25・548-1 ～ 9、549-6・8 は古式土師器の甕である。低く立ち上がり短い口縁部で、口縁端部に面をなすもの（547-17・18・20）、口縁端部を内側につまみ出すことにより、肥厚させるもの（547-21・25）、口縁端部を外側につまみ出したもの（547-22・24）、口縁部が外反しつつ立ち上がるもの（547-23・548-1 ～ 7）、口縁の立ち上がりが、一度短く外上方へ立ち上がった後ごく短く直立し、端部の上端に面をなすもの（548-8）、口縁の立ち上がりが短く直立するもの（548-9）、口縁部がわずかに内弯しつつ外上方に立ち上がり、端部を軽く外側に摘み出すもの（549-6・8）などがある。体部は球形をなすものが大半を占めるが、549-6・8 はやや胴長の体部である。549-3・4 は土師器で、甑である。いずれも須恵器の同器種を模倣したものと考えられる。549-1・2・5 は韓式系土器で、黒色研磨土器の高坏（549-1・2）、平底鉢の底部（549-5）、などがある。549-7 は須恵器甕、549-9 は土師器甕である。

第４節　古代～中世の遺構と遺物

第１項　飛鳥時代～奈良時代の遺構（第 687 図、図版 141・142）

Ｅ調査区の南端部で認められた第 8c 層上面の第８ｃ遺構面で、飛鳥時代～奈良時代の遺構が検出された。

主なものとしては掘立柱建物２棟と溝１条がある。掘立柱建物は調査区の南東端部付近に２棟がならんだ状態で検出され、北側の掘立柱建物２は南北方向に３間（3.8m）の柱穴が認められたが、平面プランのほとんどが調査区東壁外にあるため、その全容は不明である。南側の掘立柱建物１（図版 142b）は２間（2.7m）×２間（3.2m）の規模で、束柱を１箇所持つ総柱の建物と考えられる。柱穴から須恵器・土師器が少量出土したが図示し得るものはなかった。

竪穴住居の西側で、微高地の縁辺部を北北東から南南西方向に走る溝Ｅ８０００１を検出した。最大幅 2.5m で最大深度は 0.15m 内外を呈し、残存延長は 13.5m を測った。

また、Ｆ調査区の北端部からＤ－２調査区南東端部を経てＣ調査区北西端部で検出された、古

墳時代後期から奈良時代の遺物を含む東西方向の自然流路（図版 141a）があり、その南側で認められた土手状の遺構（図版 141b）から須恵器・土師器などが出土している。

第２項　平安時代前・中期の遺構（第 688 図、図版 143 ～ 146）

Ｅ調査区の南端部で認められた第 8b 層上面での第８ｂ遺構面（図版 143a）で、平安時代前・中期の集落が検出された。検出された遺構は溝１条、ピットなどで、集落はＥ調査区南東端部で認められた微高地上に存在し、西側と北側は浅い谷状の地形に遮られ終わっている。東側と南側はそれぞれ調査区の東壁外および南壁外へ広がる状況を呈しており、すぐ下層で検出された第８ｃ遺構面とほぼ同じ状況といえる。

溝Ｅ０８０００１（図版 143b）は最大幅 1.35m で深度は 0.2m 内外を呈し、残存延長は 13.5m を測った。内部から土師器・黒色土器Ａ類などが出土した。

この面では、一部の集落域と流路の周辺を除く広い範囲に水田が検出されている。この時期の畦畔は地形に沿って作られたもので、規格や形状もさまざまなものである（図版 144）。

Ｃ調査区の北端部で東北東から西南西に走る流路の一部が検出されているが、この流路から南に広がる水田に水を引き入れるための木製樋管が４基検出された（図版 145・146）。

第３項　平安時代後期～鎌倉時代の遺構（第 689 図、図版 147 ～ 149）

Ｃ調査区の第４遺構面および第５遺構面、Ｆ調査区、Ｄ調査区などで、平安時代後期～鎌倉時代初頭の集落が検出された。

そのうち掘立柱建物が検出されたのはＣ調査区の第４遺構面（図版 147a）で、掘立柱建物、井戸、土坑、溝などの遺構が調査区の北半部で検出され、黒色土器、土師器、瓦器、磁器などが出土している。また、第５遺構面では溜池状の遺構、土坑などが検出され、黒色土器、土師器、瓦器などが出土した。

Ｆ調査区では、複数の井戸や土坑が検出されており、内部から瓦器・土師器などが出土した。

Ｄ調査区では、Ｄ－１調査区の南東半部で井戸、ピットなどが検出された（図版 148・149）。

この面でも、前段階と同様に一部の集落域を除く広い範囲に水田が検出されているが、この頃には讃良郡においてもすでに条里制が施行されており、この時期以降の水田は条里制に則っている。

八丁堤道（図版 150）

四條畷市史によれば、砂・岡山周辺の人々が寝屋川舟運へ至る道が八丁堤道で、調査地を東西方向に横断し、西半部付近で南西方向に向かい、南西端部付近で岡部川を渡り寝屋川市の堀溝地

区へ至るもので、この里道は近年まで存在していた。

調査の結果、ＡＢ－Ｅ調査区、Ｂ調査区、ＡＢ－Ｗ調査区で東西方向に、Ｅ調査区では北東から南西方向の堤状遺構を検出した。堤は砂とシルトを盛り上げて形成され、杭を打ち込んで補強されている。この遺構はＢ調査区では第４遺構面、Ｅ調査区では第５遺構面で初めて認められ、平安時代後期に比定される。讃良郡条里遺跡の一角の坪境に当たる里道の八丁堤道と考えられ、これ以降ほぼ同じ位置で徐々に規模を拡大して存在していた。なお、ＡＢ－Ｅ調査区とＡＢ－Ｗ調査区は調査対象深度が浅く、初期の段階の八丁堤道を検出する深度まで掘削しなかった。

八丁堤道の基盤となる堤状遺構の中からは土器の出土が少なく、図示し得るものはわずかであった。また、15 世紀の里道の堤を形成する砂層から、銭貨 13 枚が一括して出土した。

第４項　古代～中世の遺物

古墳時代中期から後期のような大量の遺物は出土しなかったが、古代～中世の遺物についても土器・古銭・木製品等が出土した。土器については調査区（図示できた調査区のみ）ごとに記述し、古銭については出土地点が限定され、および出土量が少ないことから一括で説明する。また、木製品については大半が杭であったこともあり、ここでは省略する。

１．土　器

（１）Ａ調査区出土土器（第 690 図１～５、図版 309）

土坑Ａ３２８出土土器（第 690 図２・４・５、図版 309）

須恵器と土師器がある。須恵器は丹波篠古窯系の小型の壺（2）である。口縁端部は上下に拡張し、底部には回転糸切り痕が残る。土師器は口径 13 ～ 14㎝前後の乳白色系の中皿（4・5）である。本土坑出土土器は、10 世紀前半の第１四半期に属するものである。

Ａ調査区包含層出土土器（第 690 図１・3、図版 309）

瓦器・土師器・黒色土器等が出土するが、図示できたものは少ない。1 は第９面上層から出土した黒色土器Ａ類の鉢である。高台が付き、口縁端部内側に凹線をめぐらす。内面には細かいヘラミガキ調整が施される。10 世紀前半のものであろう。3 は第３面上層から出土した大和型の瓦器椀である。見込み部分にヘラミガキによる連結輪状の暗文を施す。12 世紀中頃ものである。

（２）Ｃ調査区出土土器（第 690 図６～ 44、図版 309・310）

土坑Ｃ１０７７出土土器（第690図６～12、図版309）

黒色土器と土師器がある。黒色土器はＢ類の椀である（6・7）。内外面ともヘラミガキ調整を施す。土師器には椀と坏と皿がある。椀（8）は高台が付くもので、全体的に肉厚である。坏は皿に近い形態を呈し、口径16cm（5寸）の大型の坏（9）と口径12cm（4寸）の小型の坏（10）に大別される。皿は、いわゆる「て」字状口縁で、口径16cm（5寸）の大皿（11）と口径10cm（3寸）の小の皿（12）がある。本土坑出土土器は、概ね10世紀後半頃のものと考えられる。

土坑Ｃ１１２４出土土器（第690図13～16・18～22、図版310）

黒色土器と土師器がある。黒色土器はＢ類の椀である(13)。土師器には坏と皿がある。坏(14)は皿に近い形態である。皿は口径15cm（5寸）前後の大皿（15・16）と９～10cm（3寸）前後の小皿（18～22）に大別される。小皿は基本的に「て」字状口縁を呈する。これらは11世紀前半～中頃のものである。

ピットＣ９３８出土土器（第690図23～25）

黒色土器と土師器がある。黒色土器はＡ類の大型の椀（23）とＢ類の椀（24）に分かれる。土師器は口縁部が「て」字状に屈曲した坏（25）である。10世紀中頃のものである。

ピットＣ１０１７出土土器（第690図26）

10世紀後半の黒色土器Ｂ類の椀（26）が出土する。

ピットＣ８６０出土土器（第690図27）

27は10世紀後半の黒色土器Ｂ類の椀である。

溝Ｃ１０２６出土土器（第690図28・29、図版310）

土師器と陶磁器がある。土師器は口径が9cm（3寸）前後の小皿である（28・29）。そのうち29はいわゆる底部が上げ底を呈したへそ皿である。土師器皿は14世紀中頃のものである。

土坑Ｃ９７９出土土器（第690図31）

図示できたものは土師器の大皿である（31）。形態的特徴から13世紀代のものと思われる。

ピットＣ１１２７出土土器（第690図32）

図示したものは土師器の皿であるが（32）、深身であることから椀もしくは坏の形態に近い。13～14世紀代のものか。

土坑Ｃ１１６５出土土器（第690図33・44、図版310）

黒色土器Ｂ類の椀である（33）。比較的大きく、しっかりした高台を付ける。内外面とも細かいヘラミガキ調整が施されている。10世紀後半～11世紀前半ものである。陶磁器は龍泉窯系の青磁碗の底部である（44）。見込み部分に花文を施す。12世紀代のものである。

ピットＣ１０７９出土土器（第690図34、図版310）

図示したものはいわゆる「て」字状口縁の土師器小皿である（34）。10世紀後半～11世紀前半のものである。

土坑Ｃ１１６８出土土器（第690図35、図版310）

土師器の小皿が出土する（35）。小皿は「て」字状口縁を呈するが、全体的に深身である。10世紀後半～11世紀前半のものである。

土坑Ｃ９８０出土土器（第690図36、図版310）

土師器の小皿が出土する（36）。小皿は「て」字状口縁を呈した10世紀後半～11世紀前半のものである。

Ｃ調査区包含層出土土器（第690図37～43、図版310）

土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・施釉陶器・陶磁器等が出土する。図示したものの内、土師器には皿と坏がある。皿は「て」字状口縁の小皿（37）で、10世紀後半～11世紀前半のものである。坏は8世紀前半～中頃のものが出土している（38）。口縁端部を内側に巻き込むように肥厚させる。外面はヘラミガキ調整を施し、内面には放射状の暗文を施す。また底部外面には「×」状のヘラ記号が施されていた。

須恵器は鉢である（39）。口縁端部を内側に巻き込むように肥厚させる。形態的特徴から丹波篠古窯系と考えられる。10世紀末～11世紀前半のものである。黒色土器はＢ類の椀（41・42）である。42は口径に比し器高が低く、全体的に浅身形を呈する。底部外面には斜め格子状のヘラ記号が施されている。ともに10世紀後半～11世紀前半のものであろう。瓦器は12世紀中頃の椀の破片である（40）。

施釉陶器は灰釉の皿である（43）。口縁端部を肥厚させ、高台を付けたものであり、10世紀中頃のものと考えられる。

（３）Ｅ調査区出土土器（第691図1～30、図版311・312）

溝Ｅ０８０００１出土土器（第691図1～15、図版311）

土師器と黒色土器が出土する。土師器には坏と椀･甕･鉢がある。坏（7～14）は口径15cm（5寸）、器高3cm（1寸）前後のもので、形態的には皿に近い。15は皿。椀（5）は高台が付く大型品であり、あたかも黒色土器Ａ類を意識したかのように口縁部内面に炭素が薄く吸着する。甕は鍔の付いた長胴甕（1）である。鉢は無頸で高台が付き、球形に近い形態のもの（3）と口縁部が短く外反した扁球形のもの(4)がある。4の体部外面には成形時の粘土巻上げ痕が認められる。

黒色土器はＡ類の鉢（2）である。口縁端部がわずかに外反して立ち上がるが、半球形に近い形態のものであり、内外面にヘラミガキ痕が明瞭に残る。本溝出土土器は、土師器坏の形態等から9世紀後半～末頃のものと考えられる。

溝Ｅ０８０００７出土土器（第691図17・18）

図示したものは、黒色土器Ａ類の椀で、その形態的特徴から10世紀前半のものと考えられる。

溝Ｅ０８０１１０出土土器（第691図16、図版311）

図示したものは、土師器の鍋である。体部は緩やかに内湾しながら外方に開き、さらに口縁部は屈曲して外反する。口縁端部は強いナデにより凹線状を呈する。時期については明確にしがたいが、共伴土器や形態的特徴から9世紀後半～10世紀前半頃のものと推定される。

Ｅ調査区包含層出土土器（第691図21～30、図版312）

瓦器と土師器がある。瓦器は椀である。大和型の瓦器椀（21･23･24）と楠葉型の瓦器椀（22）が共存する。21の見込み部分には渦巻き状、22の見込み部分にはジグザグ状のヘラミガキによる暗文が施されている。土師器は小型の皿である（25～30）。いずれも12世紀中頃～後半に属するものである。

（４）Ｆ調査区出土土器（第692図1～10、第693図1～35、図版313・314）

土手状遺構Ｆ５２４出土土器（第692図1～10、図版313）

土師器と須恵器があるが、これら図示したものは厳密には遺構の時期と異なり、6世紀後半～末の古墳時代後期に属するものである。おそらく土手を構築するにあたって、下層の（古墳時代後期の）遺物包含層や遺構面の土を盛り上げたものと思われる。そのさいこれらの土器も一緒に混入したものであろう。したがって、ここでは（土器自体の）時期は異なるが、あくまでも奈良時代の土手状遺構に伴う遺物ということで、本項で説明することにする。

土師器には甕と甑・坏がある。さらに甕は長胴甕（1～4）と体部が比較的球形に近い甕（6）に大別されるが、そのうち、1の底部はほぼ円形に意図的に欠いており、甑として使用されたと思われる。また、体部には成形時の巻上げ痕が明瞭に残る。2の体部内面には他の甕と異なり、

ハケ目調整が施され、その痕跡が明瞭に残る。3は全体的に寸胴気味で、底部は平底状を呈する。甑（5）は体部下位から底部の一部が残存するのみで、全体の形状については不明である。底部はいくつかの穴があいているのではなく、筒状を呈する。底部側面には直径0.8cmの円孔が穿たれているが、用途については明らかでない。坏（9）は全体にいびつで、肉厚である。

須恵器には坏蓋（7）と坏身（8）および甕（10）がある。これらはともにII型式第4段階に属するものであり、坏蓋と坏身はその大きさや焼成状況からセット関係になる可能性が高い。

井戸Ｆ４７９出土土器（第693図1～7、図版314）

瓦器と土師器がある。瓦器は椀であり、大和型に属すると思われる（1～4）。全体的に器肉が厚く、内外面とも細かいヘラミガキ調整が施されている。土師器には甕と羽釜と皿がある。甕（5）は口縁部が外反し、端部内側が強いナデにより凹線状を呈する。体部に比して、口縁部の器肉が厚い。羽釜（6）は口縁部が短く立ち上がり、口縁部直下に短くて太い断面「コ」字を呈した鍔をもつ、いわゆる摂津型の羽釜である。皿は「て」字状口縁の退化した小皿である（7）。これら本井戸出土土器は、概ね11世紀後半～末頃のものといえよう。

井戸Ｆ４９０出土土器（第693図8～15、図版314）

瓦器と土師器がある。瓦器はすべて大和型の椀である（8～11）。内外面ともヘラミガキ調整が施されているが、内面の調整は密である。いずれも見込み部分にヘラミガキによる連結輪状の暗文を施す。8の底部外面には「楊本」と記された墨書がある。また、9の底部外面には「×」状のヘラ記号が施されている。

土師器は口径が15cm（5寸）前後の大型皿（12・14）と9cm前後（3寸）の小皿（13・15）に大別できる。これら本遺構出土土器は、概ね12世紀中頃のものであろう。

井戸Ｆ３６８出土土器（第693図16、図版314）

図示した16は大和型の小型の瓦器椀である。内外面ともヘラミガキ調整を施す。12世紀前半のものである。

土坑Ｆ４６５出土土器（第693図17～34、第640図7、図版251a・314）

瓦器と土師器がある。瓦器は椀である(17～23)。17・18・21・22の見込み部分には連結輪状、19の見込み部分にはジグザグ状の暗文を施す。20・21は楠葉型の可能性が高く、他は大和型と考えられる。土師器は大皿（24～28）と小皿（29～34）の2規格がある。概ね12世紀中頃のものである。

なお、土器とは別に砥石が3点と羽口1点が出土している。そのうち砥石640-7は流紋岩質凝灰岩（二上層群）である。

Ｆ調査区包含層出土土器（第 693 図 35）

図示した遺物は８世紀代の須恵器の広口壺であるが、口縁部を意図的に欠いているようである。包含層出土遺物とするが、厳密には側溝掘削時に出土したものであり、内部には炭化物が詰められていたことから何らかの遺構に伴っていた可能性が高く、例えば胞衣壺的なものが考えられる。

八丁堤道Ｅ出土土器（第 691 図 19・20、図版 312）

大和型の瓦器椀（19・20）が出土するが、これらは厳密には遺構の時期と異なり、12 世紀中頃～後半に属するものである。里道を構築するにあたって下層の（古代から中世前半の）遺物包含層や遺構面の土を盛り上げたものであろう。そのさいこれらの土器も一緒に混入したものと考えられる。したがって、ここでは（土器自体の）時期は異なるが、あくまでも中世後半の里道構築時に伴う遺物ということで、本遺構出土遺物に含めることにした。

２．銭貨

八丁堤道出土銭貨（第 694 図１～13、第１表）

１～13 はすべて銅銭で、祥符元寶（北宋　初鋳 1009 年）、天禧通寶（北宋　初鋳 1017 年）、皇宋通寶（北宋　初鋳 1038 年）、治平元寶（北宋　初鋳 1064 年）、熙寧元寶（北宋　初鋳 1068 年）、元豊通寶（北宋　初鋳 1078 年）、元祐通寶（北宋　初鋳 1086 年）、聖宋元寶（北宋　初鋳 1101 年）、大観通寶（北宋　初鋳 1107 年）、正隆元寶（金　初鋳 1157 年）、洪武通寶（明　初鋳 1368 年）

第１表　八丁堤道出土銭貨計測表

番号	銭　名	国名	初鋳年	書体	量目g	径（縦）cm	径（横）cm	内径（縦）cm	内径（横）cm
1	祥符元寶	北宋	1009年	真書	2.9	25.0	24.5	19.0	18.5
2	天禧通寶	北宋	1017年	真書	2.8	25.5	25.5	21.0	20.5
3	皇宋通寶	北宋	1038年	真書	3.4	25.5	25.5	19.5	19.5
4	皇宋通寶	北宋	1038年	真書	3.0	24.0	24.0	19.5	19.0
5	治平元寶	北宋	1064年	真書	3.9	24.0	24.0	19.0	19.0
6	熙寧元寶	北宋	1068年	真書	3.7	25.0	25.0	21.0	20.5
7	元豊通寶	北宋	1078年	行書	3.7	24.5	25.0	18.5	18.0
8	元祐通寶	北宋	1086年	行書	4.0	24.5	24.0	19.5	19.5
9	元祐通寶	北宋	1086年	篆書	3.4	24.0	24.0	20.0	20.0
10	聖宋通寶	北宋	1101年	篆書	2.5	24.0	24.0	19.5	19.5
11	大観通寶	北宋	1107年		4.0	25.0	25.0	21.0	21.0
12	正隆元寶	金	1157年		3.4	24.5	25.0	21.5	21.0
13	洪武通寶	明	1368年		3.2	23.0	23.5	19.5	20.0

など11種13枚がある。大半が北宋銭であるが、なかには金代のもの１種１枚と、明代のもの１種１枚も認められた。

註

註１　宮崎泰史編　2002『讃良郡条里遺跡（蔀屋北遺跡）発掘調査概要』IV　大阪府教育委員会

註２　濱田延充編　1993『長保寺遺跡』寝屋川市教育委員会

註３　西口陽一編　1991『讃良郡条里遺跡発掘調査概要・Ⅱ』大阪府教育委員会
濱田延充　2001「用途不明板状土製品について」『韓式系土器研究』VII
徐賢珠　2003「三国時代の竈の焚口枠について」『韓国考古学報』50輯
徐賢珠（大竹弘之訳）　2004「三国時代の竈の焚口枠について」『韓式系土器研究』VIII
田中清美　2003「造付け竈の付属具」『続文化財学論集』文化財学論集刊行会
濱田延充　2004「U字形板状土製品考」『古代学研究』第167号
權五榮・李亨源　2006.8「壁柱（大壁）建築研究のために」『日韓集落研究の現況と課題（Ⅱ）』
宮崎泰史　2006「渡来人との関わり」『年代のものさし－陶邑の須恵器』近つ飛鳥博物館

註４　田中清美　1994「鳥足文タタキと百済系土器」『韓式系土器研究Ⅴ』韓式系土器研究会
竹谷俊夫　1995「日本と朝鮮半島出土の鳥足形タタキ文土器の諸例－その分布と系譜－」『西谷眞治先生古希記念論文集』勉誠社

註５　岡田賢編　2006『蔀屋北遺跡発掘調査概要・Ⅴ』大阪府教育委員会

註６　註３に同じ

註７　中村浩編　1978『陶邑Ⅲ』大阪府文化財調査報告書第30輯、大阪府教育委員会
第67図１・２　直線文タタキメ（TK85）、
第75図10　直線文タタキメ（TK73）、図版第32－４　直線文タタキメ（TK73）

註８　渡辺和仁　2008「奈良盆地北東部出土の土師質焼成須恵器と須恵器生産」『韓式系土器研究』X

註９　田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店

註10　木下亘氏、金大煥氏からご教示をえた。

註11　高橋進一　1999「古墳出土のサンドイッチ・グラス玉について」『田中義昭先生退官記念文集　地域に根ざして』

註12　柏原市教育委員会　1996『高井田山古墳』柏原市文化財概報　1995－Ⅱ　（図55）

註13　奥村茂輝編　2008『讃良郡条里遺跡VII』（財）大阪府文化財センター調査報告書　第182集（第130図１）

註14　橋口達也編　1979『池の上墳墓群』甘木市文化財調査報告第５集　甘木市教育委員会（第32図、第36図）

註15　池田研　2002「金属製品」『瓜破遺跡発掘調査報告Ⅱ』財団法人大阪市文化財協会（図29－391）

註16　貝類については財団法人大阪市文化財協会の池田研氏からご教示をえた。

付表１　北東居住域 遺構掲載頁一覧（１）

遺構種別・出土地区 遺構№	本文編 掲載頁	図面編 掲載頁	写真図版
竪穴住居Ｂ２	51	33	37
カマドＢ１３１３００	52	33	
カマドＢ１３１３０１	52	33	
掘立柱建物Ｂ２	68	67	37
掘立柱建物Ｂ３	68	67	38
掘立柱建物Ｂ４	68	68	38
掘立柱建物Ｂ５	69	68	39
掘立柱建物Ｂ７	69	69	
掘立柱建物Ｂ８	69	69	40
井戸Ｂ１３１０００	73	78	41
周溝墓Ｂ１３１１０１	76	85	42
周溝墓Ｂ１３１２５０	76	86	43
土坑Ｂ１３００２５	104	21・22	
土坑Ｂ１３０３５７	101	94	
土坑Ｂ１３０４１７	108	21・22	
土坑Ｂ１３０７６４	103	96	
土坑Ｂ１３０７６５	103	96	
土坑Ｂ１３０９６１	104	21・22	
土坑Ｂ１３０９６５	103	96	
土坑Ｂ１３１００１	102	95	
土坑Ｂ１３１００２	102	95	
土坑Ｂ１３１０８２	105	21・22	
土坑Ｂ１３１０８３	106	21・22	
土坑Ｂ１３１０９３	106	21・22	
土坑Ｂ１３１０９７	102	94	
土坑Ｂ１３１１０３	103	96	
土坑Ｂ１３１１０６	106	21・22	
土坑Ｂ１３１１８０	107	21・22	
土坑Ｂ１３１２００	105	21・22	
土坑Ｂ１３１２３１	106	21・22	
土坑Ｂ１３１２３８	105	21・22	
土坑Ｂ１３１２６８	106	21・22	
土坑Ｂ１３１３１０	105	21・22	
溝Ｂ１３０１０７	107	21・22	
溝Ｂ１３０２８８	107	21・22	
溝Ｂ１３１３２０	104	21・22	
ピットＢ１３０７６２	108	21・22	
ピットＢ１３０８４７	108	21・22	
ピットＢ１３０９９２	107	21・22	
ピットＢ１３１０７２	107	21・22	
ピットＢ１３１１５５	108	21・22	
ピットＢ１３１２７２	108	21・22	

遺構種別・出土地区 遺構№	本文編 掲載頁	図面編 掲載頁	写真図版
竪穴住居Ｃ１６９３	46	26	10
竪穴住居Ｃ２４４０	51	32	11
竪穴住居Ｃ２４８４	47	27	10
竪穴住居Ｃ３２１７	48	28	11
竪穴住居Ｃ３３３３	47	28	11
竪穴住居Ｃ３７６７	48	29	11
竪穴住居Ｃ３７７０	49	30	11
竪穴住居Ｃ３８１８	50	31	11
竪穴住居Ｃ３８４０	49	31	11
竪穴住居Ｃ３８８８	48	30	11
竪穴住居Ｃ４０４０	49	30	11
カマドＣ１５５７	52	34	25
カマドＣ１５５９	52	34	25
カマドＣ１５６０	52	34	25
掘立柱建物Ｃ１	52	35	12
掘立柱建物Ｃ１北側土器溜まり	53	38	25
掘立柱建物Ｃ２	54	39	13
掘立柱建物Ｃ３	55	39	13
掘立柱建物Ｃ４北	55	40	14
掘立柱建物Ｃ４南	55	40	14
掘立柱建物Ｃ５西	57	41	14
掘立柱建物Ｃ５東	57	41	14
掘立柱建物Ｃ６	58	43	14
掘立柱建物Ｃ７	58	44	14
掘立柱建物Ｃ７周囲溝２４２２	59	45・46・47・48	30
掘立柱建物Ｃ８	58	43	15
掘立柱建物Ｃ９	62	54	16
掘立柱建物Ｃ１０	59	49	22
掘立柱建物Ｃ１１	60	49	15
掘立柱建物Ｃ１２	63	56	17
掘立柱建物Ｃ１３	60	50	22
掘立柱建物Ｃ１４	62	55	18
掘立柱建物Ｃ１５	64	60	19
掘立柱建物Ｃ１６	67	65	21
掘立柱建物Ｃ１７	61	51	22
掘立柱建物Ｃ１８	62	51	15
掘立柱建物Ｃ１９	63	56	20
掘立柱建物Ｃ２０	61	50	22
掘立柱建物Ｃ２１	63	57	21
掘立柱建物Ｃ２２北	65	61	21
掘立柱建物Ｃ２２南	65	61	21
掘立柱建物Ｃ２３	66	63	23

付表１　北東居住域 遺構掲載頁一覧（２）

遺構種別・出土地区 遺構No.	本文編 掲載頁	図面編 掲載頁	写真図版
掘立柱建物Ｃ２５	64	57	24
掘立柱建物Ｃ２８	65	62	
掘立柱建物Ｃ２９	67	62	
掘立柱建物Ｃ３０	64	60	15
掘立柱建物Ｃ３１	66	64	
掘立柱建物Ｃ３２	66	64	
掘立柱建物Ｃ３４	67	66	
掘立柱建物Ｃ３５	66	63	23
井戸Ｃ２４７６	72	74	26・27
井戸Ｃ２５４９	71	72	28・29
井戸Ｃ２７５６	74	80	
土器溜まりA18－d6製塩土器溜まり	82	19・20	
土坑Ｃ１６９４	88	17	
土坑Ｃ１７２３	87	17	
土坑Ｃ１７９２	87	17	
土坑Ｃ２０６３	81	92	
土坑Ｃ２０７０	88	17	
土坑Ｃ２１５１	85	17	
土坑Ｃ２１５５	85	17	
土坑Ｃ２１９８	78	89	31
土坑Ｃ２２００	85	17	31
土坑Ｃ２２０３	82	17	31
土坑Ｃ２２０５	79	89	31
土坑Ｃ２２１０	86	17	30
土坑Ｃ２２１３	87	17	
土坑Ｃ２４１２	90	21・22	
土坑Ｃ２４１５	78	88	32
土坑Ｃ２４２３	90	21・22	
土坑Ｃ２４７５	85	17	
土坑Ｃ２５９１	86	17	
土坑Ｃ２６４６	85	17	
土坑Ｃ２７００	90	19・20	
土坑Ｃ３０１６	81	92	34
土坑Ｃ３０２４	93	19・20	
土坑Ｃ３１０７	92	19・20	
土坑Ｃ３１９２	91	19・20	
土坑Ｃ３２８３	97	21・22	
土坑Ｃ３２９４	83	21・22	
土坑Ｃ３３４２	80	91	33
土坑Ｃ３３９２	97	21・22	
土坑Ｃ３３９３	96	21・22	
土坑Ｃ３４７１	82	19・20	

遺構種別・出土地区 遺構No.	本文編 掲載頁	図面編 掲載頁	写真図版
土坑Ｃ３４７２、ピットＣ４４８５	94	19・20	
土坑Ｃ３４８５・３４８６	78	88	32
土坑Ｃ３５８３	92	19・20	
土坑Ｃ３６９２	97	21・22	
土坑Ｃ３８２８	94	19・20	
土坑Ｃ３８７０	95	19・20	
土坑Ｃ３８７３	82	19・20	
土坑Ｃ４０８３	77	87	33
土坑Ｃ４１５９	79	90	32
土坑Ｃ４１９３	92	19・20	
土坑Ｃ４１９５	92	19・20	
土坑Ｃ４２１８	92	19・20	
土坑Ｃ４２２３	94	19・20	
土坑Ｃ４７７３	80	92	34
溝状土坑Ｃ１９２２	88	58	
溝状土坑Ｃ２９２７	80	91	33
溝状土坑Ｃ３３７２	97	21・22	
溝状土坑Ｃ３３９８	97	21・22	
溝状土坑Ｃ３４０８	96	19・20	
溝状土坑Ｃ３４１６	96	19・20	
溝状土坑Ｃ３８２７	96	19・20	
落ち込みＣ２２７９	89	17	
落ち込みＣ２６８１	88	17	
落ち込みＣ２７０１	89	17	
落ち込みＣ２７０２	89	17	
落ち込みＣ２７４０	90	17	
落ち込みＣ２８６０	93	21・22	
落ち込みＣ２８９５	93	21・22	
落ち込みＣ３２８１	97	21・22	
落ち込みＣ３８３３	97	21・22	
落ち込みＣ４５５５	98	21・22	
溝Ｃ１７０６	91	19・20	
溝Ｃ２３３１	77	87	31
溝Ｃ２４０１	86	17	
溝Ｃ２４０１土器群上部	81	93	35
溝Ｃ２４９０	89	17	
溝Ｃ２５５０	84	21・22	
居住域内区画溝Ｃ２６２６	83	19・20・21・22	41・42
溝Ｃ２７２９	90	19・20	
居住域内区画溝Ｃ２８７９	83	19・20・21・22	41・42
居住域内区画溝Ｃ３４７３	83	19・20・21・22	41・42
居住域内区画溝Ｃ３５４０	83	19・20・21・22	41・42

付表１　北東居住域 遺構掲載頁一覧（３）

遺構種別・出土地区 遺構№	本文編 掲載頁	図面編 掲載頁	写真図版
居住域内区画溝Ｃ３５４１	83	19・20・21・22	41・42
溝Ｃ３５４７	91	19・20	
溝Ｃ３５８２	91	19・20	
溝Ｃ３８２１・３８２９	96	19・20	
溝Ｃ３９２３	96	19・20	
居住域内区画溝Ｃ４２４３	83	19・20・21・22	41・42
居住域内区画溝Ｃ４２４７	83	19・20・21・22	41・42
居住域内区画溝Ｃ４２４８	83	19・20・21・22	41・42
居住域内区画溝Ｃ４２６３	83	19・20・21・22	41・42
居住域内区画溝Ｃ４２６４	83	19・20・21・22	41・42
小溝Ｃ２７７５・２７６４	89	17	
ピットＣ１７６１	87	17	
ピットＣ１７８８	87	17	
ピットＣ２０７２	88	17	
ピットＣ２１３１	85	17	
ピットＣ２２２７	88	17	
ピットＣ２３２５	87	17	
ピットＣ２３５３	90	17	
ピットＣ２５０３	86	17	
ピットＣ２５４６	90	21・22	
ピットＣ２６９１	89	17	
ピットＣ２７２０	88	17	
ピットＣ２７５３	90	19・20	
ピットＣ２７７１	89	17	
ピットＣ２７８２	87	17	
ピットＣ２８８７	93	19・20	
ピットＣ２９８８	94	19・20	
ピットＣ３１１６	93	19・20	
ピットＣ３１８２	93	19・20	
ピットＣ３２８９	94	21・22	
ピットＣ３３２５	97	21・22	
ピットＣ３３４８	94	21・22	
ピットＣ３３５１	94	21・22	
ピットＣ３５７７	92	19・20	
ピットＣ３７８２	98	19・20	
ピットＣ３８４２	95	19・20	
ピットＣ３８９９	95	19・20	
ピットＣ３９２５	94	19・20	
ピットＣ４２３３	95	19・20	
ピットＣ４２３４	95	19・20	
ピットＣ４２５３	92	19・20	
ピットＣ４２６０	91	19・20	

遺構種別・出土地区 遺構№	本文編 掲載頁	図面編 掲載頁	写真図版
ピットＣ４２７１	95	19・20	
ピットＣ４５５１	98	21・22	
ピットＣ４５８７	93	19・20	
ピットＣ４６１３	93	19・20	
ピットＣ４６５０	95	19・20	
ピットＣ４６８０	95	19・20	
A18d6区ピット	91		
北東谷	84	17	35
南東谷	86	17	35
流路Ｃ４３５３	112	19・20	
柵Ｃ１	84	21・22	
柵Ｃ２	84	21・22	
包含層A18d4区	98		
包含層A18d5区	98		
包含層A18d6区	98		
包含層A18e2区	98		
包含層A18e3区	98		
包含層A18e4区	98		
包含層A18e5区	98		
包含層A18e6区	98		
包含層A18f3区	98		
包含層A18f4区	98		
包含層A18f5区	98		
包含層A18f6区	98		
包含層A18g4区	98		
包含層A18g5区	98		
包含層A18g6区	98		
包含層A18h6区	98		
包含層A18i6区	98		
包含層A18d7区	99		
包含層A18e7区	99		
包含層A18f7区	99		
包含層A18g7区	99		
包含層A18i7区	99		
包含層A18i8区	99		
包含層A18d7区	100		
包含層A18d8区	100		
包含層A18d9区	100		
包含層A18e8区	100		
包含層A18f8区	100		
包含層A18g8区	100		
包含層A18g8区	100		

付表１　北東居住域 遺構掲載頁一覧（４）

遺構種別・出土地区 遺構No.	本文編 掲載頁	図面編 掲載頁	写真図版
包含層A18h8区	100		
包含層A18d10区	101		
包含層A18e9区	101		
包含層A18f10区	101		
包含層A18f9区	101		
包含層A18g10区	101		
包含層A18g9区	101		
包含層A18h10区	101		
包含層A18h9区	101		
包含層A18i10区	101		
包含層A18i9区	101		
包含層A18j10区	101		
包含層A19f1区	101		
包含層A19g1区	101		
包含層A19h1区	101		
包含層A19i1区	101		
掘立柱建物Ｄ１２	69	71	46・47
掘立柱建物Ｄ１３	70	70	46・47
掘立柱建物Ｄ１４	70	71	46・47
井戸Ｄ４７４	74	81・82・83・84	48・49・50

遺構種別・出土地区 遺構No.	本文編 掲載頁	図面編 掲載頁	写真図版
土坑Ｄ５２０	109	25	46・47
土坑Ｄ５２９	109	25	46・47
土坑Ｄ５３７	109	25	46・47
土坑Ｄ８１９	109	23・24	46・47
土坑Ｄ８３８	109	23・24	46・47
溝Ｄ４９３	110	25	46・47
溝Ｄ４９４	110	25	46・47
溝Ｄ４９５	110	23・24・25・98	46・47・50
溝Ｄ７５２	110	23・24	46・47
ピットＤ５０１	111	25・97	46
ピットＤ５１１	111	23・24・25・97	47
ピットＤ７４９	111	23・24・25・97	50
ピットＤ７５３	111	23・24・97	46
ピットＤ７５８	111	25	46・47
ピットＤ８４２	112	23・24	46・47
ピットＤ８４７	112	23・24	46・47
ピットＤ８５１	112	23・24	46・47
流路Ｄ４７０	112	23・24	46
包含層（Ｄ－２調査区）	113		

付表２　南東居住域 遺構掲載頁一覧

遺構種別・出土地区 遺構No.	本文編 掲載頁	図面編 掲載頁	写真図版
竪穴住居Ａ１	113	166	53
竪穴住居Ａ２	113	166	54
竪穴住居Ａ３	114	166	54
竪穴住居Ａ４	114	166	54
掘立柱建物Ａ１	114	167	55
掘立柱建物Ａ２	114	167	
井戸Ａ４９４	115	168	55・56
井戸Ａ５４２	116	170	56
井戸Ａ５９０	117	171・172	57
井戸Ａ６７６	116	171・172	57
井戸Ａ６９５	117	173	57・58
井戸Ａ７６７	116	171・172	

遺構種別・出土地区 遺構No.	本文編 掲載頁	図面編 掲載頁	写真図版
土坑Ａ４３５	118	174	58
土坑Ａ５３６	118	165	
土坑Ａ５６１	118	165	
土坑Ａ５９４	118	165	
土坑Ａ６７５	117	165	
土坑Ａ１５４０	117	165	
土坑Ａ１５５２	118	165	
土坑Ａ１５５６	118	165	
土坑Ａ１５６７	119	165	
溝Ａ５３５	119	165	
溝Ａ８７７	119	165	
ピットＡ１５７５	119	165	

付表３　南西居住域 遺構掲載頁一覧（１）

遺構種別・出土地区 遺構No.	本文編 掲載頁	図面編 掲載頁	写真図版
竪穴住居Ａ５	120	187	63
竪穴住居Ａ６	120	187	63
掘立柱建物Ａ３	124	197	
井戸Ａ１５０１	128	204	64
井戸Ａ１６１３	129	205	65
馬埋葬土坑Ａ９４０	131	214	66・67
馬埋葬土坑Ａ１３４５	132	215	67
土坑Ａ６３０	138	181・182	
土坑Ａ６５５	132	215	65
土坑Ａ８１８	138	181・182	
土坑Ａ９５８	138	181・182	
土坑Ａ９６４	138	181・182	
土坑Ａ９６５	138	181・182	
土坑Ａ１１３５	133	216・217	68
土坑Ａ１１６５	136	221	
土坑Ａ１１８６	140	181・182	
土坑Ａ１１８７	140	181・182	
土坑Ａ１２４０	138	181・182	
土坑Ａ１３５７	136	219	
土坑Ａ１３５９	139	181・182	
土坑Ａ１３６７	139	181・182	
土坑Ａ１３９３	136	221	
土坑Ａ１３９４	137	223	
土坑Ａ１４０７	140	181・182	
土坑Ａ１６３２	136	220	67
土坑Ａ１６３９	136	220	
土坑Ａ１６５４	135	218	69
土坑Ａ１７７１	139	181・182	
土坑Ａ１７７９	139	181・182	
土坑Ａ１８００	139	181・182	69
溝Ａ９５１	141	181・182	
溝Ａ９５７	141	181・182	
溝Ａ１１８９	141	181・182	
溝Ａ１１９２	140	181・182	
溝Ａ１１９４	140	181・182	
溝Ａ１２１５	141	181・182	
溝Ａ１２１６	142	181・182	
溝Ａ１２２２	141	181・182	
溝Ａ１２２９	140	181・182	
溝Ａ１２３１	137	224	69
溝Ａ１２４１	142	181・182	
溝Ａ１２４４	141	181・182	

遺構種別・出土地区 遺構No.	本文編 掲載頁	図面編 掲載頁	写真図版
溝Ａ１３９９	142	181・182	
竪穴住居Ｂ１	120	186	62
掘立柱建物Ｂ１	124	197	
土坑Ｂ１３０５６７	135	219	62
溝Ｂ１３０２３６	150		121
竪穴住居Ｅ０８０１２０	121	188	
竪穴住居Ｅ１	121	189	
竪穴住居Ｅ２	121	190	
竪穴住居Ｅ３	121	190	70
竪穴住居Ｅ４	122	191	71
竪穴住居Ｅ５	122	192	71
竪穴住居Ｅ６	123	193	72
竪穴住居Ｅ７	123	194	72
竪穴住居Ｅ８	123	195	73
竪穴住居Ｅ９	124	195	
掘立柱建物Ｅ１	125	198	73
掘立柱建物Ｅ２	125	198	
掘立柱建物Ｅ３	125	199	
掘立柱建物Ｅ４	126	199	74
掘立柱建物Ｅ５	126	200	74
掘立柱建物Ｅ６	126	200	
掘立柱建物Ｅ７	126	201	75
掘立柱建物Ｅ８	127	201	75
掘立柱建物Ｅ９	127	202	
掘立柱建物Ｅ１０	127	202	
掘立柱建物Ｅ１１	128	203	
井戸Ｅ０９０４５１	129	206	76
井戸Ｅ０９０５５３	129	206	
井戸Ｅ０９０８０５	129	207・208	77・78
井戸Ｅ０９０８０６	130	209・210	77・78・79
土坑Ｅ０９０１５３	142	184	
土坑Ｅ０９０２１９	142	184	
土坑Ｅ０９０２５８	144	185	
土坑Ｅ０９０４３９	146	185	
土坑Ｅ０９０４４７	137	222	
溝Ｅ０９０７４６	145	185	
土坑Ｅ０９０７５０	146	185	
土坑Ｅ０９０８３２	145	185	
土坑Ｅ０９０８４４	147	185	
土坑Ｅ０９０８７１	144	185	
土坑Ｅ０９０９００	148	185	
土坑Ｅ０９０９３３	147	185	

付表３　南西居住域 遺構掲載頁一覧（２）

遺構種別・出土地区 遺構№	本文編 掲載頁	図面編 掲載頁	写真図版
土坑Ｅ０９０９３６	148	185	
土坑Ｅ０９０９４８	148	185	
土坑Ｅ０９１０００	149	185	
ピットＥ０９０１２９	143	184	
ピットＥ０９０１４３	143	184	
ピットＥ０９０２８４	144	185	
ピットＥ０９０２９０	145	185	
ピットＥ０９０３３２	147	185	
ピットＥ０９０５０１	142	184	
ピットＥ０９０５１７	143	184	
ピットＥ０９０５２４	143	184	
ピットＥ０９０５２５	144	184	
ピットＥ０９０７５２	146	185	
ピットＥ０９０７５５	147	185	

遺構種別・出土地区 遺構№	本文編 掲載頁	図面編 掲載頁	写真図版
ピットＥ０９０８７５	146	185	
ピットＥ０９０８７８	144	185	
ピットＥ０９０９２５	148	185	
ピットＥ０９０９４１	147	185	
ピットＥ０９０９４７	147	185	
ピットＥ０９０９５０	149	185	
ピットＥ０９１００７	149	185	
ピットＥ０９１０３２	149	185	
ピットＥ０９１０４８	149	185	
ピットＥ０９０９４４	144	185	
ピットＥ０９１１２０	145	185	
ピットＥ０９１１３８	143	184	
溝Ｅ０９０４４６	137	222	
溝Ｅ０９０７４９	146	185	

付表４　北西居住域 遺構掲載頁一覧（１）

遺構種別・出土地区 遺構№	本文編 掲載頁	図面編 掲載頁	写真図版
竪穴住居Ｄ１	150	255	80・84
竪穴住居Ｄ２	151	256・257	80・84
竪穴住居Ｄ３	151	257・258	83・85
竪穴住居Ｄ４	152	259・260	86
竪穴住居Ｄ５	153	260・261	87
竪穴住居Ｄ８	153	261	87
竪穴住居Ｄ９	154	263	
竪穴住居Ｄ１０	154	263	83
竪穴住居Ｄ１１	154	263	83
竪穴住居Ｄ１２	155	264	83
竪穴住居Ｄ１３	155	264	92
竪穴住居Ｄ１４	155	265	82・97
竪穴住居Ｄ１５	156	266	88
竪穴住居Ｄ１６	157	268	90
竪穴住居Ｄ１７	157	253・254	
竪穴住居Ｄ１８	157	269	89
竪穴住居Ｄ１９	158	271・272	89・90
竪穴住居Ｄ２０	158	272・273	89・90・96
竪穴住居Ｄ２１	159	275	83
竪穴住居Ｄ２２	159	275	83
竪穴住居Ｄ２３	159	274	92・83
竪穴住居Ｄ２５	160	276	91

遺構種別・出土地区 遺構№	本文編 掲載頁	図面編 掲載頁	写真図版
竪穴住居Ｄ２７	160	278	93
竪穴住居Ｄ２８	161	278	93
竪穴住居Ｄ２９	161	278	93
カマドＤ１１４０	161	275	92・94
カマドＤ１４２７	161	265	93
カマドＤ１５６９	162	265	92
掘立柱建物Ｄ１	162	279	93・96
掘立柱建物Ｄ２	162	280	94
掘立柱建物Ｄ３	163	281	94
掘立柱建物Ｄ４	163	282	94
掘立柱建物Ｄ５	164	282	83
掘立柱建物Ｄ６	164	283	
掘立柱建物Ｄ７	164	283	
掘立柱建物Ｄ８	165	284	97
掘立柱建物Ｄ９	165	285	95
掘立柱建物Ｄ１０	166	286	95・96
掘立柱建物Ｄ１１	166	287	81
掘立柱建物Ｄ１５	167	285	88
掘立柱建物Ｄ１６	167	288	80
掘立柱建物Ｄ１７	167	288	82
掘立柱建物Ｄ１８	168	289	80・96
掘立柱建物Ｄ１９	168	289	

付表４　北西居住域 遺構掲載頁一覧（２）

遺構種別・出土地区 遺構No.	本文編 掲載頁	図面編 掲載頁	写真図版
井戸Ｄ６４３	168	290	97
井戸Ｄ９５２	169	291	99
井戸Ｄ１２８１	169	292	98
土坑Ｄ４７２	170	253・254	
土坑Ｄ４８０	170	293	99
土坑Ｄ５９９	170	294	
土坑Ｄ６０７	171	294	
土坑Ｄ６４０	171	294	81
土坑Ｄ６４８	172	253・254	95
土坑Ｄ６５８	172	296	95
土坑Ｄ６７９	172	253・254	101
土坑Ｄ６９０	172	253・254	81
土坑Ｄ７０１	172	253・254	81
土坑Ｄ７４０	172	278	
土坑Ｄ９２６	173	296	99
土坑Ｄ１２５８	173	253・254	80
土坑Ｄ１３６３	173	296	
土坑Ｄ１３９４	173	253・254	
土坑Ｄ１５６２	173	296	91
土坑Ｄ１６０１	174	253・254	
土坑Ｄ１６１７	174	253・254・295	99
土坑Ｄ１９３６	175	253・254	
溝Ｄ５４０	175	23・24	
溝Ｄ５４３	175	23・24	
溝Ｄ６００	175	253・254	81
溝Ｄ６４１	175	253・254	81
溝Ｄ９０２・Ｄ５４６	176	253・254・258	80・81
溝Ｄ９８６	176	299	80・100
溝Ｄ１０３６	177	253・254	82・101
溝Ｄ１０８７	177	253・254	82
溝Ｄ１０９７	177	253・254	88・101
溝Ｄ１３２５	177	253・254	93
溝Ｄ１５１７	178	253・254	
溝Ｄ１５８０	178	253・254	83
ピットＤ５５４	178	296	93
ピットＤ５６３	178	253・254	
ピットＤ６０６	178	296	
ピットＤ６１０	178	253・254	
ピットＤ６１３	178	297	
ピットＤ６２０	178	253・254	
ピットＤ６４４	179	296	95

遺構種別・出土地区 遺構No.	本文編 掲載頁	図面編 掲載頁	写真図版
ピットＤ６６１	179	253・254	
ピットＤ６８０	179	297	101
ピットＤ７１５	179	297	93
ピットＤ７３５	179	253・254	
ピットＤ８６５	179	253・254	
ピットＤ８６６	179	296	
ピットＤ９３６	179	297	96
ピットＤ９３８	180	253・254	93
ピットＤ９７６	180	253・254	83
ピットＤ１０２７	180	298	88
ピットＤ１０５９	180	253・254	90
ピットＤ１０７８	180	253・254	83
ピットＤ１１６７	180	253・254	89
ピットＤ１２４４	180	297	96
ピットＤ１３０２	181	253・254	
ピットＤ１３０５	181	253・254	
ピットＤ１３１４	181	253・254	83
ピットＤ１３２０	181	253・254	83
ピットＤ１３２４	181	253・254	93
ピットＤ１３２６	181	253・254	93
ピットＤ１３５９	181	298	
ピットＤ１４６０	181	298	
ピットＤ１４９５	182	298	
ピットＤ１５０９	182	253・254	
ピットＤ１５２９	182	253・254	
ピットＤ１５３２	182	253・254	
ピットＤ１５８８	182	253・254	91
ピットＤ１６１１	182	253・254	83
ピットＤ１６１４	182	297	83・96
ピットＤ１６４０	182	253・254	
ピットＤ１６５２	183	298	91
ピットＤ１６６６	183	298	97
ピットＤ１６７７	183	253・254	
ピットＤ１８０７	183	253・254	
ピットＤ１８５８	183	298	
ピットＤ１８６８	183	298	97
ピットＤ１８９３	183	298	
ピットＤ１９３０	184	297	
ピットＤ１９３４	184	297	
ピットＤ１９６４	184	253・254	
ピットＤ１９９５・１９９６	184	298	

付表５　西居住域 遺構掲載頁一覧

遺構種別・出土地区 遺構No.	本文編 掲載頁	図面編 掲載頁	写真図版
竪穴住居Ｆ１	186	316	104
竪穴住居Ｆ１１	186	316	110
竪穴住居Ｆ２	187	317	105・106
竪穴住居Ｆ３	187	318	105・106
竪穴住居Ｆ４	187	318	105・106
竪穴住居Ｆ５	188	318	105・106
竪穴住居Ｆ６	188	315	
竪穴住居Ｆ７	188	320	107
竪穴住居Ｆ１２	189	320	107・108
竪穴住居Ｆ８	189	321	108
竪穴住居Ｆ９	189	321	110
竪穴住居Ｆ１９	190	321	108
竪穴住居Ｆ１０	190	322	109
竪穴住居Ｆ１３	190	315	110
竪穴住居Ｆ１４	191	315	111
竪穴住居Ｆ１５	191	315	
竪穴住居Ｆ１６	191	325	111
竪穴住居Ｆ１７	192	315	
竪穴住居Ｆ１８	192	315	
掘立柱建物Ｆ１	192	327	112
掘立柱建物Ｆ２	193	327	112
掘立柱建物Ｆ４	193	328	
掘立柱建物Ｆ３	193	328	
掘立柱建物Ｆ６	193	329	

遺構種別・出土地区 遺構No.	本文編 掲載頁	図面編 掲載頁	写真図版
掘立柱建物Ｆ５	193	329	
掘立柱建物Ｆ７	194	330	113
掘立柱建物Ｆ８	194	330	113
掘立柱建物Ｆ９	194	331	113
掘立柱建物Ｆ10	194	331	
井戸Ｆ８０６	195	332	
井戸Ｆ８５５	195	332	
井戸Ｆ９４４	195	333	115
井戸Ｆ１１６８	195	334	116
井戸Ｆ６９０	196	335	114
井戸Ｆ６２７	196	336	
土坑Ｆ１１２０	196	337	116
土坑Ｆ６８４・６８５・６８６	196	315	
土坑Ｆ６７９	197	337	
土坑Ｆ６２６	197	315	
溝Ｆ１０６２	197	338	117
溝Ｆ１０７５	197	338	118
溝Ｆ６３４	198	339	117
溝Ｆ６３３	198	339	117
溝Ｆ６２１	198	315	
溝Ｆ７２４	198	339	
谷Ｆ２	198	315	102・103
流路５２９	199	315	102・103

付表６　竪穴住居遺構番号新旧対照表

新番号	旧
竪穴住居Ａ１	４３０
竪穴住居Ａ２	５００
竪穴住居Ａ３	６５８
竪穴住居Ａ４	５２３
竪穴住居Ａ５	１０１１
竪穴住居Ａ６	１０１２
竪穴住居Ｂ１	１３０４７５
竪穴住居Ｂ２	１３０９０２
竪穴住居Ｄ１	９８４
竪穴住居Ｄ２	９７８
竪穴住居Ｄ３	１０７０
竪穴住居Ｄ４	１０８８
竪穴住居Ｄ５	９０１
竪穴住居Ｄ６	１０８６
竪穴住居Ｄ７	１０８５
竪穴住居Ｄ８	１２２２
竪穴住居Ｄ９	１２３７

新番号	旧
竪穴住居Ｄ１０	１０２５
竪穴住居Ｄ１１	１０２４
竪穴住居Ｄ１２	１０００
竪穴住居Ｄ１３	１２３５
竪穴住居Ｄ１４	１２３６
竪穴住居Ｄ１５	１０２８
竪穴住居Ｄ１６	１０３０
竪穴住居Ｄ１７	１１００
竪穴住居Ｄ１８	１１１３
竪穴住居Ｄ１９	１１１０
竪穴住居Ｄ２０	１１１２
竪穴住居Ｄ２１	１２３８
竪穴住居Ｄ２２	
竪穴住居Ｄ２３	１２２１
竪穴住居Ｄ２４	１１５３
竪穴住居Ｄ２５	１３７８
竪穴住居Ｄ２６	１１５０

新番号	旧
竪穴住居Ｄ２７	５４７
竪穴住居Ｄ２８	８６０
竪穴住居Ｄ２９	８６１
竪穴住居Ｅ１	０９００４０
竪穴住居Ｅ２	０９０２００
竪穴住居Ｅ３	０９０１６１
竪穴住居Ｅ４	０９０２２０
竪穴住居Ｅ５	０９０７０９
竪穴住居Ｅ６	０９０７１０
竪穴住居Ｅ７	０９０２２２
竪穴住居Ｅ８	０９０３５８
竪穴住居Ｅ９	０９０３５６
竪穴住居Ｆ１	９００
竪穴住居Ｆ２	９２０
竪穴住居Ｆ３	７２７
竪穴住居Ｆ４	９１５
竪穴住居Ｆ５	９２１

新番号	旧
竪穴住居Ｆ６	１０４４
竪穴住居Ｆ７	９３０
竪穴住居Ｆ８	９３５
竪穴住居Ｆ９	７５５
竪穴住居Ｆ１０	１０００
竪穴住居Ｆ１１	９９１
竪穴住居Ｆ１２	１０９９
竪穴住居Ｆ１３	９５０
竪穴住居Ｆ１４	１２１９
竪穴住居Ｆ１５	１１９０
竪穴住居Ｆ１６	１２８９
竪穴住居Ｆ１７	１２３１
竪穴住居Ｆ１８	１２３２
竪穴住居Ｆ１９	１１３４

付表７　須恵器編年対照表

『陶邑』III 中村 浩氏案 1978・2001			田辺昭三氏 旧案 1968		田辺昭三氏 新案 1981			森 浩一氏案 1958 1962		山田邦和氏案 1998				暦年代（参考）
I型式	第1段階	前期								I期	前期	古段階（大庭寺窯式）		5世紀前半
		後期	I期	TK73型式	I期	TK73型式	一須賀2号窯段階	I期	前半					
							TK73号窯段階					新段階（高蔵寺73号窯式）		412年
	第2段階			TK216型式		TK216型式					中期	古段階（高蔵寺216号窯式）		
	第3段階			TK208型式		TK208型式	ON46号窯段階					新段階（高蔵寺208号窯式）		5世紀中頃
							TK208号窯段階							
	第4段階			TK23型式		TK23型式			後半		後期	古段階（高蔵寺23号窯式）		471年
	第5段階			TK47型式		TK47型式						新段階（高蔵寺47号窯式）		5世紀後半
II型式	第1段階		II期	MT15型式	II期	MT15型式		II期		II期	前期	古段階（陶器山15号窯式）		6世紀前半
	第2段階			TK10型式		TK10型式	TK10号窯段階					新段階（高蔵寺10号窯式）		6世紀中頃
	第3段階			（　）			MT85号窯段階	III型式	前半		後期	古段階（陶器山85号窯式）		6世紀後半
	第4段階			TK43型式		TK43型式			後半			中段階（高蔵寺43号窯式）		588年
	第5段階			TK209型式		TK209型式						新段階（高蔵寺209号窯式）	西 弘海氏 飛鳥編年 1986	
	第6段階		III期	（　）	III期	TK217型式			末	III期	初期（高蔵寺217号窯式古段階）		飛鳥I 590年代〜640年代	616年前後
														641年
														645年
III型式	第1段階			TK217型式				IV期	前半		前期	古段階（高蔵寺217号窯式新段階）	飛鳥II 640年代〜660年代	648年
														660年
	第2段階												飛鳥III 660年代後半〜670年代	
				（　）		TK46型式						新段階（高蔵寺46号窯式新段階）		682〜685年
	第3段階			（　）		TK48型式			後半		後期	古段階（高蔵寺48号窯式）	飛鳥IV 680〜690年代	
														694〜710年
IV型式	第1段階		IV期	MT21型式		MT21型式		V期	前半	IV期	前期	陶器山21号窯式	飛鳥V 690〜700年代	701〜710年
														716〜725年
	第2段階			（　）		（　）								749年
				（　）										
				（　）		（　）			後半		後期	高蔵寺7号窯式		
	第3段階			TK7型式	IV期	TK7型式								753年 781〜784年
	第4段階													8世紀末
V型式	第1段階		V期	TK122型式		MT83型式		VI期		V期				824年
	第2段階			MT5型式										

（宮崎泰史　2007「陶邑の変遷」『年代のものさし－陶邑の須恵器－』平成17年度冬季企画展　大阪府立近つ飛鳥博物館）の図２・３を一部加筆して転載

引用文献
中村 浩編　1978『陶邑』Ⅲ　大阪府教育委員会
中村 浩　2001『和泉陶邑窯　出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版
田辺昭三　1966『陶邑古窯址群Ⅰ』　平安学園考古学クラブ
田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店
森浩一　1958「和泉河内窯出土の須恵器編年」『世界陶磁全集』第１巻　河出書房
森浩一・石部正志　1962「後期古墳の討論と回顧」『古代学研究』第30号　古代学研究会
山田邦和　1998『須恵器生産の研究』学生社
西弘海　1986『土器様式の成立とその背景』真陽社

報 告 書 抄 録

ふりがな	しとみやきたいせき　いち
書名	蔀屋北遺跡Ⅰ
副書名	なわて水みらいセンター建設に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	2009－3
編著者名	宮崎泰史、山上　弘、藤田道子、岩瀬　透、岡田　賢、岡本敏行、藤永正明、三辻利一、安部みき子、丸山真史、辻本裕也・辻　康男、別所秀高
編集機関	大阪府教育委員会　文化財保護課
所在地	〒540－8571　大阪府大阪市中央区大手前２丁目　TEL　06－6941－0351(代)
発行年月日	平成22年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	面積(㎡)	調査原因
蔀屋北遺跡（しとみやきたいせき）	四條畷市（しじょうなわてし） 蔀屋（しとみや）・砂（すな）	27229	7（51）	34° 44′ 25″	135° 37′ 52″	平成13年４月２日から 平成19年９月15日	25,000 ㎡	なわて水みらいセンター建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
蔀屋北遺跡	集落跡・ 生産域	弥生時代 古墳時代 古代 中世	竪穴住居、掘立柱建物、井戸、大溝、区画溝、溝、土坑、墳墓、馬埋葬土坑、製塩土器土坑、ピットなど多数。	弥生式土器、陶質土器、韓式系土器、須恵器、土師器、須恵器系土器、黒色研磨土器、U字形板状土製品、移動式カマド、製塩土器、鉄製品、木製品、骨角製品、玉類、石製品、ガラス玉、動物遺存体など多数。	馬１頭を丁寧に埋葬した馬埋葬土坑、準構造船の船底材・舷側板などを井戸枠に転用した井戸などの検出。 韓式系土器、U字形板状土製品、移動式カマド、輪鐙・鑣轡・漆塗り木製鞍橋などの初期実用的馬具などの出土。

要約	総面積30,000㎡を超える古墳時代中・後期の集落域内に5箇所の居住域が検出され、各居住域内から、竪穴住居73棟、掘立柱建物84棟、井戸27基（準構造船の船底材・舷側板を井戸枠に転用したものを複数含む）、馬埋葬土坑2基などをはじめとする多数の遺構が検出された。また、集落の西を限定する大溝や、各居住域を区画する区画溝も複数確認された。これらの遺構からは各種の遺物が大量に出土した。出土遺物の内容や、馬埋葬土坑、あるいは井戸枠に転用された準構造船の船底材の存在などから、朝鮮半島から渡来した人々が営んだ馬飼い集団の集落であることが明確になった。

大阪府埋蔵文化財調査報告2009－３

蔀屋北遺跡Ⅰ

なわて水みらいセンター建設に伴う発掘調査

本文編

発行日　平成22年３月31日
発　行　大阪府教育委員会
〒540－8571
大阪市中央区大手前２丁目
TEL 06－6941－0351（代表）
印　刷　㈱近畿印刷センター
〒582－0001
柏原市本郷５丁目６番25号